1072
講談社現代新書

ハンガリー狂騒曲

東欧改革の光と影

自由と民主化を求めての激しい変革の流れのなかで、明日への希望と不安とが交錯する。

その深層では、家族への愛、祖国への思いが静かに燃えつづけている。理想を探りつつ悩み、よろこび、悲しむ人々の表情を生き生きと伝える真摯なドキュメント。

家田裕子

チョコロン——夫が息子のタカシに一番最初に教えたのが「チョコロン」であった。この言葉は、
あなたのお手に接吻いたしますという意味で、王国時代の紳士の作法の名残りである。
成人男子が御婦人がたに使うと丁寧な響きとなるし、子供は男の子でも女の子でも大人に対して使える。
お手に接吻しますの意味である以上、女性から男性には使わない。
また私のような中年の女性が、高齢の女性に使うことは不可能ではないが、
それでも、あなたより私は若いのよといわんばかりの状況になるので、
女性はとにかく使わない方がいいそうだ。タカシがチョコロンひとことで、
どれだけ多くのハンガリー人から微笑みをもらったことか。——本書より

カバー写真＝みやこうせい

ハンガリー狂騒曲

東欧改革の光と影

家田裕子

講談社現代新書

はじめに

一九八七年の冬から八九年十月末までの約二年間を、我が家はハンガリーで暮らした。この間、東欧改革の先駆者を自任するハンガリー社会の変動はまことに目まぐるしいものであった。私の夫はハンガリーの歴史を専門としている。研究に必要な資料を集めに、初めは一年間の予定で、私と幼稚園児の息子をハンガリーへともなった。十年前にも二年間ハンガリーに留学してすっかりハンガリーが好きになった夫は、出発に先だって私にこんなことを言ったものだ。

ハンガリーは物質的な豊かさでは日本に劣るし、言論面で不自由な点はあるが、社会保障や教育制度はしっかりしており、基本的な生活物資に困ることもない。夫婦でまじめに働けば、まず家を持ち、さらに別荘を持つことが普通の庶民の暮らしぶりである。労働時間はきちんと守られており、家族を大切にするハンガリー人にとって、週末や夏休みを家族と共に別荘で過ごすというのがごくあたりまえの生活だ。日本とはまた違った豊かさがあるのだから、それを見にいこうと。

しかし十年ぶりのハンガリーの変貌は、夫の予想をはるかに越えていた。何より当のハンガリー人自身が、これほど急激に何もかもが変化するとは夢にも思わなかったと口々に言うありさまだったのだ。我が家が首都ブダペストに着いてまもなく、カーダール政権が終焉を迎えたが、それより先に出版言論の自由化が始まっており、これはじきに洪水のような勢いとなった。もともとハンガリーの知識人は内輪では盛んに議論をしていた。夫は反体制派といわれる友人も多く持っていたが、今ではあらゆることが公然と語られ、行われている。東欧で進む改革については、日本でも逐次伝えられてきた。ブダペストの我が家にも日本からハンガリー情勢への取材協力依頼が頻繁に舞い込み、おちついた研究生活に没頭しようという夫の夢はふきとんでしまった。常日ごろ日本の東欧に関する認識の乏しさと交流の少なさを嘆いている東欧研究者にとって、これは喜ぶべき事態ではあったのだが。

東欧に対する関心が高まっている今、市井の人びとの生活や表情、日々のできごとの中から、ハンガリー社会および東欧の様子を伝えてみようというのが筆者の心づもりである。

東欧はとても遠い世界だと思われるだろうか。

実際に暮らしてみて、私はしばしば昭和三十年代、自分の子供の頃の日本に舞い戻ったような錯覚を味わった。むろんこれは、つきつめていけば錯覚だったことが多かったとはいえ、過渡期の日本に育った私にとって今もなお、ハンガリーは日本人にとって決して理

西欧の影響を受け続けながらも、日本人がヨーロッパの精神風土として理解しているのとはまた違う世界がそこにはあることをひしひしと感じるようになった。これが東欧というものかと驚き戸惑う自分に、私は今さらのように苦笑せざるをえなかった。なぜなら私自身、東欧のチェコスロヴァキア史にもう十年以上も手をそめていたからである。東欧の啓蒙的な指導者たちが幾世紀も西と東ということに繰り返し思いをはせ、どこへ向かうべきかと絶えず問い続けてきた歩みを、私は文字の上でたどりつつも、その本当の意味をとらえてはいなかったのだと痛感せざるをえなかった。近代日本の歩みを考えても、東欧の問いには身につまされるものがある。

東欧の人びとは、どこへいっても我われに対してきわめて友好的である。他のアジア諸国には無関心な人たちすら、いちように日本への賛美や好奇心に溢れており、日本の繁栄の秘密を聞きたがる。それは未知なる東洋の国に発する問いではなく、西側先進国への憧れであった。

それにもかかわらず、こうした会話のいきつくところは決まって、東洋としての日本文化に対する礼儀正しい礼讃でしめくくられるのだが、実のところ我われがいちばん戸惑うのもそこだった。一つには、東洋というきわめて広い茫漠とした概念を彼らがあまりにも

無造作に扱うため、そこに何をイメージしているのかこちらの方がつかみきれないからである。いま一つには、東欧の人びとが日本を、ヨーロッパと異質だという意味でアジアと定義し尊重しようとする時、むろん彼らは自分たちがヨーロッパ人だという大前提に立っているわけだが、先にも述べたように、私の中では東欧と西欧の違いというものが真剣な問いとなっていた。だから彼らの言うヨーロッパとはこれまた何かと考えこまざるをえない。さらに今日の日本文化にとって欧米からの影響もまた抜きには語れないわけで、彼らのようにアジア対ヨーロッパ、ヨーロッパ対日本という言葉を明瞭には口にできなかったのである。

漠然とした言葉を連ねてきたが、これから具体的に我が家の目を通した東欧の暮らしを描いてみよう。

あらかじめ言っておけば、出発前に夫が私に語ってみせたハンガリーなりの豊かさというものはひびわれ、すでに音をたてて崩れつつあった。改革という言葉の明るい響きとは裏腹に、庶民は激しいインフレに生活を脅かされ、明日を思い悩んでいたのだ。ハンガリー人自身が悩む姿と重ねつつ、我が家でも毎日さまざまなことを語りあかした。日本に帰ってからは、そこに日本の暮らしへの思いも重なって、何かを言い切ろうとすることへのためらいは増すばかりである。

たった二年暮らしただけで、ハンガリー社会への案内役をかってでるつもりになってこの文章を書くのではない。東欧社会は我が家がそこを去ってから、さらに劇的な変化を繰り返している。この書が最新のハンガリー・東欧紹介になることもできない。ただ日本に帰って時間がたつうちに、私の内ではますますそこで出会った人びとの姿が鮮明によみがえるようになった。東欧の人の顔が思い浮かぶようなものを、日本の読者に紹介したいという気持ちが強まり、筆をとることにした。我が家が経験したできごとには随分と風変わりなものもあって、これが東欧の実態ですよと言ったりしたら東欧の人びとに叱られるかもしれない。しかし実際に我われが経験しなかったことは書かない覚悟である。

読者にお願いしたいのは、私と共に東欧の生活に旅をして私の試行錯誤につきあっていただき、ここに描かれたことを批判的に吟味するということである。ハンガリーに関する記述の基本的な情報源は、ハンガリー語にかなりの程度打ち込んだ夫からのもの、また幼稚園児としてはハンガリーの子供よりおしゃべりという太鼓判をおされたほどハンガリー語を話し、現地にとけこんでいた息子からのまた聞きも多い。夫と息子はあらゆることをハンガリーに好意的に、私は懐疑的に議論するのが我が家のならわしとなっていた。

本著にすこしでもとりえがあるとすれば、ささいなことにああでもないこうでもないと勝手なことを言い合った家族の不協和音のたまものである。さらにハンガリー以外の東欧

諸国への旅はいずれも駆け足程度の短さだったために、その記述に至っては旅行者の印象以上のものではない。ただ私の記す感想にも、移りゆく東欧の過去と将来を結ぶ一瞬が反映されている。願わくは本著がはるかなる東欧に読者を近づけ、東欧や西欧を知る人びととのあいだには対話を生みださんことを。東欧がより身近になり、そして日本の姿を考える一つのきっかけともなれば願ったりかなったりである。

本文中、必要があると思われる人物の名は仮名を用いてある。

また、原音ではブダペシュトだが、慣例にならってブダペストと表記することや、小見出し、章区分の多くは出版社の意向に従った。

当時、ハンガリー通貨フォリントの換算率は、一フォリント＝約二円であった。だがこの公式換算だけでは、生活実感としてのフォリントの価値が伝わらない。現実の一フォリントは、日本の物価水準に直せば十円相当の購買力を持った。そこで本文では、公式換算のほか、実際感覚によるフォリントの価値を示して説明した部分もある。

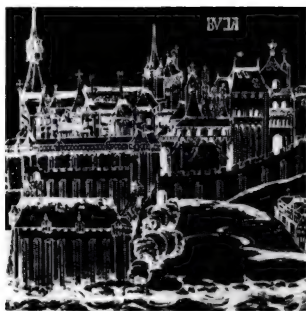
原稿を最大限にいかすべく尽力して下さった講談社の鈴木理氏と、出版を実現して下さった阿部英雄氏に感謝の意を表する。

目次

1――アテネからブダペストへ

1493年の古図によるブダ

アテネの安ホテル

一九八七年の十二月に、私と息子はギリシャの明るい陽ざしの中、初めてヨーロッパの土を踏んだ。一足先の九月にブダペストで生活を始めていた夫がアテネ空港で待っていた。
あえて家族がばらばらに渡欧したのは、チェルノヴイリ原発事故の影響を考えたからだ。ハンガリー行きを決めて準備を進めていたある日、たまたま出席した講演会で夫は中欧の被害が予想以上であること、東欧の被害状況は情報が公開されないだけにつかめていないこと、特に幼児の身体に深刻な影響が予測されることなどを専門家に聞いてきた。夫と私はすっかり考えこんでしまったのである。夫はまず単身ハンガリーに行き、現地の実態を

確かめたいと言いだした。結局、ハンガリーは地理的条件が幸いして、中部ヨーロッパでは最も被害が少ないことを確認したうえで、私と息子を呼びよせたのであった。

二十八時間の空の旅で疲れ切ってアテネに着いた息子と私をタクシーに乗せると、夫はブダペストからの夜行列車でユーゴスラヴィアの若者が安いアテネのホテルを紹介してくれたと嬉しそうだ。ヨーロッパへの渡航費も滞在費も日本の大学からもらう助手の給料でまかなう我が家にとって、見知らぬ土地でこれはさい先の良い始まりに思えた。

タクシーの運転手は愛想よく話しかけてくるが、夫の告げた先にホテルなんかないよと首をひねり、良いホテルを紹介しようと再三もちかける。これは客ひきに他なるまいと考えた我われは、とにかく行ってみて下さいと、渋る運転手相手にやりとりを繰り返すうち、目的地に着いた。ほうれここは風紀の悪い地区ですぜ、日本からきた家族を良いホテルに泊めてあげなさいよと不満げな運転手は、めざすホテルを目にすると、これはヒッピーのたまり場だとしかめっつらをした。日本の都市と同様にコンクリートの建物がごみごみと建ち並ぶアテネで、そのホテルは時を忘れたような姿でつつましく建っている。古風な建築でよかったと嬉しがる我われをまじまじと見つめて、運転手は走り去ってしまった。

フロントには小柄な中年の男性がおり、暖房がないし食堂は閉鎖中だがいいですかと念をおした。それどころか、実際に泊まってみれば、トイレットペーパーもトイレの鍵もな

く、通路の電球もあちこち切れ、盗難防止のためか毛布にはすべて二つずつ穴までくりぬいてあったが、このホテルは忘れがたい思い出となった。泊まり客は若者ばかり。宿泊代のかわりにここで働いて次の土地へ移ってゆく者もいるとかで、そうした若者が口こみでしじゅう出入りしているらしい。だがすみずみまで貧相なのに、このホテルにはみじめさではなく、なにか心休まる飾らぬやさしさが漂っていたのだ。

アテネの繁華街では、日本人とみて盛んに観光業者に声をかけられる。またアクロポリスの丘で、石塀の色彩とその前で編み物をする老婆の姿の絶妙な取り合わせに見とれていると、老婆が「やすいよ、やすいよ」と、日本語で声をかけてきたのに驚かされもした。金持ちの日本人として見られた場所ではこうした愛想のよさにつきまとわれ、我われのホテル付近のようなうらぶれた場所、つまり日本の観光客など見かけないような路地裏では、手荒な応対に翻弄された。私という人間はどうでもよくて、ただ日本という国籍と国力だけがひとり歩きする状況にその後もいっこうに慣れることはなかったが、アテネはその皮切りとなった。こうした洗礼を受けなければ、東欧にいるヴェトナム人や、ヨーロッパに出稼ぎにきているアジア人の気持ちを察することは難しかったかもしれない。

くだんのホテルのフロント係はきわめてひかえめで親切だった。彼はトルコ人である。学生時代に東京で学ぶギリシャの留学生と知り合い、私の現代ギリシャに関する不十分な

知識はできあがったのだが、その留学生は歴史的ないきさつによる反トルコ感情をあらわにしていた。アテネの貧相なホテルで働くトルコ人にとって、各国の若者がリュックサック一つで集まってくるここは居心地の良い職場なのだろう。留学生の友人は、ギリシャ人と分かると日本人は決まって古代ギリシャを持ち出すと不満を述べた。バルカンの小国たる今日のギリシャよりも輝かしい古代ギリシャ文明のイメージが先行することに、ひるんでしまうのだ。

　混血が進んだ結果、今日のギリシャ人の風貌はヨーロッパ世界の中で独特なものとなっている。ナチス・ドイツのプロパガンダの一つに、金髪碧眼（へきがん）の民たる古代ギリシャ人の正統な子孫は現代ギリシャ人ではなくドイツ人である、という宣伝があった。ヨーロッパ文明の源という偉大な歴史を持ちながら、こんないいがかりをつけられるほどにアジア的な要素も帯びたギリシャから、次にめざすハンガリーとは、千年余り前にアジアからきてヨーロッパの血を刻印したマジャール人の国である。どういう人たちと出会うのだろうか。

　ハンガリーの国名と民族名は原語で「マジャール国（オルサーグ）」「マジャール」人といい、専門家は日本でも原語を用いることがある。ハンガリーは多民族国家だったため、本来ハンガリー国民であることとマジャール民族であることは同義ではなかった。しかし本書では慣例に従って「ハンガリー」「ハンガリー人」を使うことにしよう。

知る日本、知らざるヨーロッパ

二日間アテネで休息をとり、列車で我われはハンガリーの首都ブダペストへと向かった。車中、ユーゴスラヴィアから一人の青年が同じコンパートメントに乗り合わせ、英語で話しかけてきた。サーシャと呼んでくれと言い、自分はマケドニアの出身で、昔の偉大なアレクサンダーという王様の名前をつけられたのだと教えてくれる。アレクサンダー大王なら日本の子供も歴史の時間に習うし、誰でも知っているよと答えると、サーシャ君は驚いて口をぽかんと開けた。

知日家の知識人は別として、ヨーロッパの庶民にとって日本は相変わらずよく分からない国だし、さらに情報不足の東欧では緑茶の国からきた我われがコーヒーを飲むたびに仰天されたりもした。日本人の我われの方はヨーロッパ世界の種々雑多な知識を持ち、一方、相手側は日本のことをあまりにも知らないという、すっとんきょうなくい違いに満ちた生活の幕開けである。

アレクサンダー大王が日本でまで有名だとは本当に誇らしい、驚いた、僕はユーゴスラヴィア国民という感情は持っていない、あくまでもマケドニア人なんだ、と興奮しているサーシャ君は、これからチェコスロヴァキアの首都プラハへ行くという。「社会主義で僕の

国はクリスマスのお祝いをやめてしまった。プラハのクリスマスは美しい。物は安い。女の子はとってもきれい」だそうである。

一晩列車にゆられて我われはブダペスト東駅に着いた。暖かなギリシャの陽光に慣れた目には、冷たい雨に煙るこの都の光景がひどく沈鬱なものに映った。やがて春には花が咲き乱れ、夏の太陽のもとで古都ブダペストのたたずまいがいかに晴々と美しく輝くか、その時の私には想像もつかなかったのである。

列車は一時間遅れで着き、友人たちが申しでていた歓迎の出迎えをあらかじめすべて断っておいた夫は、人を待たせずにすんでよかったと言いながら、同じコンパートメントに乗り合わせた人たちに礼を言った。隣のおばさんは自分の子が作ったというトンカツと辛いパプリカの漬物をごちそうしてくれたし、向かいのおじさんもハンガリー語を話す夫に大感激して、ポケットから小さな鏡を出し、息子にプレゼントしてくれたのである。

我われが乗った列車は、一日半でギリシャ語からスラヴ語圏のユーゴスラヴィア、そしてフィン・ウゴル語圏のハンガリー語の世界を走りぬける。列車内の表示はフランス語、ドイツ語、ロシア語で、乗客たちは言葉の通じぬ隣人との意思の疎通を、初めからあきらめているかのようだ。グループで乗り込んだ人たちばかりがにぎやかである。しかし東洋人の夫がハンガリー語を話すと知って、周りの寡黙な人たちから親しげな声がかかり、旅は

一転して楽しいものとなったのである。

夫の期待を裏切り、旧友チャバ君の巨大な頭がブダペスト東駅でプラットホームの群衆から突き出ている。迎えにきてくれたのだ。ハンガリー人は他のヨーロッパ人と比べて背の低い方だ。なんとなく懐かしさを覚える体型の人も多く、日本女性にミニスカートは似合わないというならハンガリー女性の半分にも似合うとは思えない。ただしドイツ人やスラヴ人とも盛んに混血した民族のため、金髪、碧眼、長身の人も多い。

チャバ君も雲をつくような大男である。「列車が遅れることは、駅に電話して確かめたから知っていたよ。我われの生活の知恵というものさ」と言いながら、チャバ君は荷物を彼の愛車ラダに積んでくれる。ラダはソ連製の車で、これを持っているということは、チャバ君が比較的余裕のある市民だという証拠である。もっとも、我われの滞在中から西側の中古車がハンガリーにも増え、社会主義圏の車しか手に入らない状況は変化し始めていた。

ブダペストの我が家

チャバ君のラダで我われが着いたのは、新しい住宅地域の十一区に建つアパートである。二百万都市ブダペストには二十二区まである。十一区は知識人が多いと夫は言った。しかしその後、ハンガリー語の教科書に工場地帯の十一区と書いてあるのを見つけた。百年前の

地図では畑ばかりだ。ともかく十一区には住宅があり工場があり田園風景も残っていて、知識人から労働者までさまざまな隣人が住んでいる。高級官僚や外国人の多い二区の高級住宅街を勧めてくれる友人もいたが、せっかくハンガリーにきたからには普通のハンガリー人の間で住みたいというのが、ここを選んだ夫の意思である。

ヨーロッパのたたずまいがそっくり残るブダペストの旧市街には、それぞれの建物に豊かな装飾がこらされ、ひとつとして同じ表情の建築はない。巨神や女神、キューピッド、唐草模様などを配した四、五階建ての建築が個性を主張しあいながら、街全体としては調和がとれている。この美しい旧市街の周囲を、社会主義政権下で建てられた十階ほどの高層アパート群がドーナツ状にとり囲む。旧市街を抜けると同じ顔の高層アパートばかりなので、私などは東西南北どこにいるのかさえ分からなくなってしまう。

我が家が一角を借りたアパートは、そうした高層アパート群がとぎれ、次のより新しいアパート群がはじまるはざまにある。小さな公園に面した三層の住宅だ。私はその三階に住むのだと思ったが、階の数え方は複雑で、地階、中一階、そして三段めの我が家は一階という具合に数えるのだという。公園の周りには二、三層式の個人住宅が建ち並び、とりわけ豊かでもなくとりわけ貧しくもなく、静かなのがとりえといった環境である。

我が家に入る。十二畳ほどの居間と四畳ほどの小部屋を、台所と浴室の面する廊下がむ

すぶ。ウサギ小屋は日本の切ない実態だが、ハンガリーの住宅事情も良くない。多くの所帯持ちが二部屋か三部屋に住んでいる。しかも間取りが妙で、二部屋がつながっている住宅が多い。一つの部屋を通り抜けなければ別の部屋に行けないのである。夫が貸間探しをした時には、部屋が独立していることを条件の筆頭とした。我が家のある三層式住宅には各階に三戸ずつ計九戸の家族が住む。十年前に住民の共同出資で建てられた集合住宅で、各戸は一DKから二DKまで。広い住居はまったくない。ルーマニアからの亡命者が、食べ物にもこと欠くルーマニアよりハンガリーの住宅事情ははるかに悪いと嘆いていた。

それでも私には、新しい住まいが素敵に映った。この大家さんは旧市内に別な家を持つ。娘が結婚してドイツに行ったので、十一区のこの住居を家具つきで旅行者に貸している。家具や食器はハンガリーでごく普通に使われるものが備わっているが、狭いながらもユニット家具や様式の統一で、和洋折衷型の日本の大方の家よりすっきりと見えるのだ。

息子タカシの幼稚園

息子はチャバ君の子が通う幼稚園に入れてもらうこととなった。

ハンガリー人は当節の幼稚園はひどいものだと口を揃える。社会主義以前の、特に教会が運営していた学校や幼稚園はすばらしかったが、今の幼稚園に子供を入れるくらいなら、

おばあちゃんに見てもらう方がましだと誰もが言う。今の保母さんたちは高圧的で、子供へのいつくしみに欠けるというのだ。

幼稚園に限らず、社会主義のもとで生まれた「新しい労働者」の中には、妙に官僚的だったり横柄な人物が結構いる。そうした売り子や店員や事務員などのせいで、みんな生活にぎすぎすしたものを感じながら、昔はこんなじゃなかったのにと嘆く。とげとげしく働いた人自身が、帰りに買物する店ではりねずみタイプの同類に手荒く扱われ、昔はこんなじゃなかったとぼやくありさまは、笑えない悪循環の戯画であった。

チャバ夫妻も、自分の子のために慎重に幼稚園選びをした。こぢんまりとしていて保母さんたちもいいから、この幼稚園に我が家のタカシもぜひ入れたらと勧められた。確かに、タカシが通った幼稚園にはすばらしい思い出ばかりがある。

ブダペストには外国人向けのドイツ語幼稚園や、英語幼稚園もある。しかし夫はハンガリーを知るためだといって、息子を普通のハンガリー幼稚園に入れた。

夫は十年前の留学時代に、日本人駐在員たちがここにはパチンコ屋もないと嘆くのに唖然とし、またその子供たちが西側で買った玩具やお菓子を誇りながら、ハンガリーに良いものはないと断言する様子を悲しんでいた。大使館員も東欧勤務を左遷か島流しのようにしか考えないと、夫は怒った。むろんそういう人ばかりではあるまいし、見事なハンガリ

ー語を身につけた方も少数ながらおられるのだから、これは言い過ぎかもしれない。夫が日本人会に近づかなかったため、妻である私には二年間のハンガリー滞在で知り合った日本人はほとんどいない。

それはともかく、息子がハンガリー幼稚園に通っていると知ると、年配のハンガリー人は「まあ、かわいそうに」としばしば同情してくれた。「いいえ、とても良い幼稚園で喜んでいますよ」と答えると、相手の方がびっくりすることが多かった。

ハンガリーの幼稚園は朝の六時から夜の六時まで原則として子供を預かってくれる。早朝と晩は子供をひと組に全部あつめて一、二人の保母さんがつく。人手が少ない時間帯にはどうしても子供を見守ることがおろそかになるという理由から、たいていの親は朝の八時から夕方は四時半まで子供を預ける。出勤と帰宅の時刻に合わせて子供を送り迎えするのである。したがって母親だけでなく父親の姿も幼稚園にはたくさん見かける。

息子タカシは最年少の黄色組に通うこととなった。日本で年少組はすませてあるのだが、言葉を知らないことなどを考えて、初めから手とり足とり世話してくれる黄色組に入れるのが賢明でしょうという幼稚園側の申し出に同意して決めたことである。ハンガリーの幼稚園は保育時間が長いため、ひと組を早番と遅番の二人の保母が受け持つ。それも、経験を積んだ中年の保母さんと、学校を出たての若い保母さんが一対になっているのである。

これは非常に優れた方法だと感心した。

子供は若い保母さんに惹かれるようで、ことに息子の組の若い保母さんシルヴィー先生は絶世の美女だったため、すごい人気だった。しかし我が子タカシのように元気があり余り、若い保母さんなら閉口しかねない男の子たちにとって、自らの子を育てた経験を持つ中年の保母さんは良き理解者である。「うちの子もとんでもないことをしでかしたわ」と笑う余裕が、中年の保母さんには共通している。これは我が息子にも本当にありがたかった。

息子は最初の頃、言葉が分からずにめそめそし、下足箱に隠れて泣いたりもした。しかし黄色組のおかあさん保母さんのカティ先生（カティはカタリンの愛称）は、チャバ君の奥さんと私の夫にあらかじめ簡単なハンガリー語・日本語対照表を作ってくださいと頼むほど、タカシの身になって準備をしてくれた。チャバ君の奥さんは日本に留学した経験を持つ科学者である。

一週間たつと、タカシは下足箱に隠れることもなくなり、一ヵ月たつと日常生活の言葉に不自由しなくなり、三ヵ月目には、有名なおしゃべりで地獄耳のあだ名をつけられた。子供の正確な発音は、二十代半ばに苦労してハンガリー語を習得し、かなりのものだよと自負している我が夫を盛んにくさらせる結果となったのである。

2——子と母のハンガリー語

子供の言葉本能

チェルノヴイリの後遺症を心配して、様子を見に夫が単身出発してしまってからというもの、息子は早くヨーロッパに行こうよと飛行機に乗る日を心まちにしていた。広島の家を閉じ、夫から知らせがくるのを私と息子は埼玉県の実家で待った。

広島の家には夫の主義でテレビがない。息子の慰めは「おじいちゃんとおばあちゃんのテレビ」となったが、ある日、息子が大あわてで、テレビがわけの分からない言葉を話し始めたと飛んできた。なんのことはない、ニュースで外国人が話しているだけである。しかし四歳の息子にとって、外国とは日本語を話さない人びとで一杯の所だと初めて気づいた一瞬

元気な幼稚園児たち

であった。さらに洋画番組で外国の俳優たちが日本語を喋りまくる光景に、息子の混乱は頂点に達した。普通、日本では吹きかえということをして、外国語を日本語に直してから放送するけれど、本当は外国ではそれぞれの国の言葉を話しているのだと説明する。「じゃあハンガリーでは」「もちろんハンガリー語をみんなが話すのよ」……それからというもの、息子は言葉の通じない所へは絶対に行かないとぐずぐず言いとおした。子供は外国へ行っても、たちまち言葉を覚えてしまうのだから大丈夫だといくら言いきかせても、息子はそのことばかり考え、さえない顔をして溜め息までつくのである。息子にすればやっと日本語の基礎が固まり、お話しが上手になったねという周囲の言葉が嬉しくてならない時期でもあった。

最後の最後まで外国へ行くのを渋る息子を、なだめつすかしつ飛行機に乗せた日のことを、私はいまもおかしみを込めて思い出す。出発直前に高熱をだし、空の旅の間じゅう、大好きな機内食に手もつけずこんこんと眠りこんだのも、言葉の通じない世界へいく恐怖のなせるわざではなかったかと思う。

既に述べたごとく、案の定、息子はハンガリー語がペラペラになり、ハンガリー人が目を細めるようになってしまった。周囲のヨーロッパ言語圏と隔絶した言葉の孤島に住むハンガリー人は、外国人が小国ハンガリーの言葉を習得することに感激する。とりわけ経済

大国日本のチビが、ハンガリー語をハンガリー人と同じほど話せるようになったことをひどく嬉しがってくれた。

しかし日本に帰って六ヵ月で、息子はハンガリー語をとことん忘れた。外国生活で子供が身につけた流暢な現地語を、帰国後すっかり忘れてしまったという話をしばしば耳にする。そんなことは親の心がけしだいで防げると信じていた私だが、我が息子に照らして推測すれば、子供には一刻も早く状況の中で安定したいという防衛本能が強いのではないかと思う。ハンガリーではいつまでたっても滑らかにハンガリー語を話せぬ私をいぶかり、笑いころげ、通訳してあげると申し出た息子が、帰国してからは、夫や私がハンガリー語で話しかけるのをおっくうがるようになった。少しでも早く日本語という忘れかけていた言葉で友達と話せるよう、陰ながら精進していることに驚かされたものだ。

しかし息子の頭のどこかには、知識としてではなく、本能ともいうべきハンガリー語が組み込まれており、いつかまたハンガリーに行く日があれば、言葉も自然によみがえるものらしい。

母語への認識

母語に対するハンガリー人の認識は、少し前の日本人とよく似ている。ハンガリー語は

世界一難しく、外国人には習得できないものと決めてかかるのである。かたことを話しても、うまいうまいと褒める。そしてハンガリー語には国際性がないからと謙遜しながら、むろんハンガリー語は世界で一番美しい言語だと内心では思っている。

ここで「母語」という言葉を使ったが、多民族地域では国が制定した公用語と、個人が家庭で身につける母語が区別される。東欧各国にはさまざまな母語を話す民族がまじりあって住んでいるわけだ。

ヨーロッパを巡ってハンガリーに入る人は、まったく見当のつかない看板や標識に圧倒されるだろう。文字はラテン文字のアルファベットなのに、語彙が他のヨーロッパ言語と異質なのだ。文法はむしろ日本語と似ていなくもない。英語やフランス語を学んで、日本語とはさかさまの語順に苦闘した覚えはないであろうか。ハンガリー語は日本語の語順にはるかに近い。ただし語彙がチンプンカンプンだから、親しみやすい言語だとか軽率なことは言えない。

私の語学校

息子が幼稚園に投げ込まれてハンガリー語がぺらぺらになるのを見るにつけ、私も幼稚園に入りたいものだと幾度も夢みた。幼稚園では朝食、昼食、おやつに二時間の昼寝まで

ある。月額、日本円にして千五百円ほどの保育料を収めるだけだ。朝食にパンと水がしばしば登場するのには恐れをなしたが、昼食はたっぷりの肉料理で、ハンガリー料理にも息子は詳しくなった。

願ってもかなわぬ夢はあきらめ、私も自分のハンガリー語学校を探す。留学生の身でない私が行けるのは私立の学校しかない。日本円で一万円ほどの授業料を納め、三ヵ月の初級コースに通い始めた。この授業料は、ハンガリーの最低年金月額に少し足りないほどの額だったから、ハンガリー人にとって安くはない。教科書にも定価の七倍という外国人むけ値段が堂々と貼りつけてある。しかし、払える者からは払わせるというこの工夫に腹はたたなかった。

バスに三十分ほど乗ると、都市のはずれの我が家からブダペストの旧市街に出る。美しい古都の中心部を眺め、数々の歴史にいろどられた古い街並みを心楽しく歩くと、私の学校に着く。最初の二回の授業はもう終わったという。

新参者にして唯一の東洋人である私は、おそるおそるあたりを見回す。クラスは十二名で、六人がソ連から、一人はソ連で学んだボリビア人、ユーゴスラヴィアから三人、ポーランド人が一人、それに私である。

先生は若いハンガリー女性で、カティという。幼稚園の保母さんも同じ名だが、だいた

いがキリスト教や歴史にちなんだ人物の名をつけるため、ハンガリーの人名は日本ほど多種多様ではない。さて、語学教師のカティは初めから私の理想にほど遠い人物だと感じた。
　私自身、外国人に日本語を教える真似ごとをちょっぴり経験していたので、語学学習で生徒に予習をさせることは不可欠だと信じている。生徒が予習を積んだうえで、教師は説明に工夫をこらし復習を徹底させる。まかりまちがっても、自分の教える言語は特殊で、到底理解できるものかなどという意識を教師は持ってはいけない。私は夫に外国語はネイティヴの教師から習いなさいと言い渡され、日本でハンガリー語をあらかじめ夫に教わることを拒否された身の上である。ハンガリー語はなんにも知らない。授業に慣れるにつれ、予習のしようもない単語を並べたてるカティにむらむら反感を覚えた。何が分からないか言うことすらできず、そんなことが言えるなら語学校にくるものですかと、ますます絶句する。しかも、ふたことめにはハンガリー語は難しい、世界一特殊だ、外国人には分からないなどとカティは言う。
　また、私がつかえ、口ごもるたびに、ロシア組がぶしつけに笑ったり、先生をさしおいて教えようとする。このロシア人たちは、特権的な地位の夫と共にハンガリーに赴任したというおばさんたちである。ソ連にはないようなしゃれた品物が溢れるブダペストの生活は大満足らしく、装身具や化粧品をお互いにみせあっては買物情報を交換している。彼女

たちのありがた迷惑な説明はほとんどが違っていて、カティも閉口している。

二人の級友

私のたのみの綱は、妻の不運に同情した夫が毎晩、文法を添削してくれること。それにポーランド人のヨアンナとユーゴスラヴィア大使館員のラディチ氏である。彼らは勉強熱心な優等生だし、人の間違いを笑わない。間違った教示も与えない。

ヨアンナは最初からその知的な美しさで、居心地の悪い授業時間の我が目の保養となった。二十代後半のポーランド女性である。ハンガリー人と結婚してブダペストへきた。ポーランドと日本は昔からなんとなく親和的な関係を保っている。ポーランドは日本文化の紹介が盛んで、親日家も多い。一方、日本でも明治時代から国破れたるポーランドと歌にも歌い、この勇敢で悲しいロマンスに満ちた国へのひいきがかなりいる。ヨアンナには繊細さと教養が漂っている。ほとんど相手の言うことが分からぬのに、初めからヨアンナは私の友達であった。通じない言葉で無理をしても話してみたい相手だったのである。

一方、ユーゴスラヴィアの大使館員ラディチ氏は暖かい目を持った青年で、私がチンプンカンプンに茫然としている入学したての頃、英語でいろいろと助けてくれた。私が英語を話すと知って、カティの態度は一変した。自分も英語を学習中だとか言いつつ、しばし

ばたどたどしい英語で説明してくれたりする。これに怒ったのがロシア人たちである。彼女たちは授業中にロシア語でとおそうとするので、カティから「ここはロシア語の授業ではありません、ロシア語の使用を禁止します」と言い渡されたばかりなのだ。ハンガリーではロシア語が義務教育になっていて、カティもそこそこにロシア語ができる。そのロシア語を禁止した矢先に英語を使い出したので、ロシア人の怒りはもっともだと私も驚いた。

ハンガリー人はひどくロシア語を嫌っている。ある知識人が言うには、誰でも強制されれば嫌になるというのが原因だそうだ。この強制には軍事的、経済的にもあらゆる意味でソ連傘下におかれた不満が含まれていた。ことにハンガリー知識人はロシア語をしゃべれないとこれみよがしに自慢するありさま。彼らの子供は他の科目では優秀な生徒たらんと努めるのだが、ロシア語で最低点をとったよなんて親に得意げに報告する。

ユーゴスラヴィア大使館のラディチ氏はむろんロシア語が話せる。彼は、国際語であるロシア語を義務教育に取り入れたにもかかわらず、ハンガリー人が拒否し続けるのは愚かしく、非理性的な態度だと批判した。確かに、合わせても千百万の人口しかないハンガリー国民が、東欧ブロックの内側にいてロシア語を学べば有利になる点は多かったはずである。ただし、ユーゴスラヴィアの人間がスラヴ語の親戚であるロシア語を習得することに比べれば、アジア起源のハンガリー語とロシア語の距離の大きさは同情の材料にはなる。

我われが滞在中に、ロシア語をハンガリーの義務教育に課す制度は廃止され、選択科目となった。

ハンガリー人にとって身近な外国語はドイツ語であった。年配の知識人はドイツ語を話すが、第二次世界大戦前のハンガリー知識人はさらにドイツ語が流暢だった。ドイツ語ばかりを耳にする地区が首都ブダペストにはあったし、ドイツ人の村と呼ばれる農村もあった。ドイツ系の姓も多いうえ、「ネーメト＝ドイツ人」というそのものずばりの姓の人もいる。もっとも「オロス＝ロシア人」「トゥルク＝トルコ人」という姓もあり、こうした人に会うとハンガリーの歴史に思いを巡らしたりする。西側への窓が開かれた今、ハンガリー人に人気のある外国語はドイツ語、英語、それに日本語熱も高まりつつある。

西と東の級友

さて、この気にくわぬ語学校で、私は意地になった。口ごもればたちまち、日本人全体が馬鹿にされかねない雰囲気なのだ。予習と復習に睡眠時間も削った。途中で大使館勤務が忙しくなって脱落したラディチ氏を除いて、ヨアンナと私は初級クラスで最上の生徒となった。案の定カティは、日本人はやはりすばらしい、困難なハンガリー語にかくも上達したではないかと断言した。

しかし真実は、ハンガリー人の夫がヨアンナにはいて、十年前に同じ苦労をした夫が私にいたというだけである。夫たちの援助なしには理解できない授業を、カティはやってのけたわけだ。

それでもいささか溜飲を下げた私は、次の中級コースで、今度は西側からきたドイツ人やアメリカ人ばかりの級友に囲まれて、しみじみ西と東の感触の違いを痛感した。この中級クラスの西側の生徒にみられる最大の特徴は、自分が分からぬことをはっきりと分からぬと言い、説明して分からせるのは教師の責任だという態度であった。

ロシアのおばさんの知ったかぶりとなんと違っていたことだろう。自分に分からないことはハンガリー語の欠陥である、と豪語するおばさんたちを、陰でラディチ氏は、彼らはロシア人の水準に照らしても、とりわけ傲慢な特権階級だと言っていた。

ここで、ソ連組のアンナのことを記しておかねば不公平というものだろう。

アンナは穏やかな中年の婦人で、私が頼みになると判明した頃に、自分から疑問を尋ねにやってきた。一生懸命にノートをとる彼女の真面目さに、教師が悪いのであってあなたの能力が不足しているのではないと私が慰めるくらいだった。満足のいかぬ状況で初級クラスが終了した時、彼女だけは初級クラスに再登録してやり直した。ラディチ氏にこれを話すと、彼女は本当に良きロシア人だと自分も思うと答えた。でも彼女はアゼルバイジャ

ン出身でソ連では少数民族だそうよと私が付け足すと、ラディチ氏は「なんてこった」と嘆息した。

たった一つの例から全体を結論づけてはいけないが、この語学校におけるロシア組の不遜さは私の強い印象となってしまった。ロシア人の気持ちについてはいずれ改めて取り上げよう。

今は、中級クラスの二人の新しい先生がいずれもすばらしかったことだけを述べておく。彼らは語学教師に必要な最上の資質を兼ね備えていた。カティに不平をもらす私に夫は、少なくとも外国人向けに書かれたハンガリー語教科書を見れば、ハンガリーが日本よりはるかに自国の言語を教える方法を確立していることは是認できるだろうと励ましてくれた。中級クラスでは優れた教科書ばかりでなく、優れたハンガリー語教師がいることも私は知ったのだ。

しかしすばらしい先生にめぐり会えた喜びもつかのま、今度は私自身が妙なできごとにいくつも関わりあい、語学の授業を放りだすありさまとなってしまった。

3——反体制派知識人マリカ

1989.10.23　国会議事堂前での集会

信念の活動家

私が巻き込まれたできごとの数々を話す前に、ここでマリカを紹介しよう。彼女は夫の旧友で、ハンガリーにきて、夫がまっさきに私と息子を連れて訪問した人物である。彼女も十一区に住んでいる。

十年前にマリカ夫妻は家を建てていた。ハンガリー人が家を建てるという時、たいていは文字どおり、自分でレンガを積み壁を塗るのである。設計図を役所に出して許可を受けるという手続きはあるが、レンガやコンクリートなどを自ら調達し、こつこつと時間をかけて自分の家は自分でつくる。作業の途中でコンクリートが足りなくなって、マリカ夫妻

が道路でコンクリートミキサー車を止めたという武勇伝がある。ミキサー車の運転手は、某月某日にきてコンクリートを分けてあげようと約束した。そして礼金とひきかえに、マリカたちは出所不明のコンクリートを分けてもらったという。

彼女は三人の子を持つ研究者で、いわゆる反体制派知識人である。上の娘二人は二十歳を過ぎており、三番目のゲルグはまだ十歳のきゃしゃな少年である。マリカはタカシと一緒に庭で遊びなさいと、ゲルグに言い渡した。マリカの家は四部屋と台所で、家族数を考慮すれば大きくはないが、果樹の繁る広い庭がある。

マリカの夫ペーテルは有能な経済学者だが、国が赤字を抱えて研究所が閉鎖され、今は子供の心理カウンセラーをしている。知識人はただでさえ反体制派の温床だし、ハンガリーは財政建て直しのために研究機関の統廃合を続けていた。「愚かなことだ」とペーテルは首をふる。

長期的に見て、この国の学問水準はどうなっていくのだろう。改革が進んでも国家赤字が解消されない限り、研究条件の改善は容易に達成されないであろう。有能な知識人が職を失うばかりでなく、無能な人間に対する怒りもある。党の息がかかるにわか知識人の一団は「暗闇」と呼ばれている。ある大学でも、有能な人材が昇進をあきらめているのに、論文を書いたこともない「暗闇」がコネで就職するというのでもめていた。

ペーテルもこうした状況に嫌気がさしていたのだが、今は自分で選んだカウンセラーの仕事に満足している。ほぼ独学で心理学を身につけたそうだ。私自身も日本の大学で心理学を専攻したものの興味が続かずやめたと言うと、「もったいない。この国では心理学をブルジョワ的学問とみなして長いあいだ大学で専攻なんかできなかったのに」とペーテルは答えた。

マリカの家庭では、子供たちがみな父に悩みをうちあける。もの静かでリベラリストのペーテルは確かに信頼感を与える人だ。それに対してマリカの理想と直情径行には、なんとなく相手をたじろがせるものがある。マリカは信念のためには身の安全をかえりみることなく活動し、失敗も恐れない。反体制派の間では有名な人物である。

必要なのは機知

庭からタカシとゲルグが戻ってくる。ゲルグは、大声で笑い、とびまわるタカシにうんざりという顔だ。ゲルグの蒼白い顔は、親の見ていない場面でしばしば不自然にゆがむ。マリカに何か言われて、いやだと言いたげに下を向いても、すべて言われたとおりにする。私がタカシに大声を出しては迷惑よと叱ると、マリカは自分の母を思い出す厳しさだわねと感想を述べた。ヨーロッパの躾は概して厳しく、年配のハンガリー人にも子供はお尻を

叩いて育てるものだという考えがあって、若いお嫁さんと意見を対立させたりしている。マリカの口ぶりから、彼女の母親への思い出が暖かいものではないと察しがつく。

「うちのタカシは元気いっぱいだから、いけないことをはっきりさせるのが親の役割だと思う。ゲルグのように繊細な子には、別のやりかたがあるでしょうけれど」と夫に通訳してもらった。ヨーロッパにきて、こんなことを言うはめになるとは思いもかけなかった。

その後マリカとつきあってみて、彼女は相手の資質に合わせて対応することがきわめて不得意なのだと知った。愛情深い母親であるにもかかわらず、子供たちはみなマリカを恐れている。教会へ通うことや将来の進路決定についてマリカは、子供たちに自分の意思をはっきり示してきた。ペーテルは既存の宗教には排他性もあることを忘れてはいけないし、教会通いは子供が自分で決めることだと言い、将来の進路についてもマリカの好きな職業ではなく、子供の資質を慎重に見守って選ばせるのが親の義務ではないかと言い続けている。二十歳をこえた上の二人の娘は、いまだに自分の適性をきわめかねており、それぞれの子に望みを託していたマリカは落胆しながらも、目下は十歳のゲルグの手をひき、政治活動のあいまをぬって教会や息子の習いごとに忙しくかけまわっている。

マリカの知人たちも、いったんは彼女の崇高な使命感にうたれて行動をともにしながら、いつしか離れていくことが多い。やるだけやって駄目でも、神様と良心に従って全力をつ

くしたと思えることが重要なのだとマリカは言った。彼女自身にはそれでいいのだろうが、皆がみな彼女と同じように考え、行動できるものでもない。むしろ鉄のカーテンの内側に閉ざされていたハンガリーの状況では、勇気と同じほど機知も必要であり、良心的策士でなければならぬ場合もあった。そうした中でマリカの自決主義を危ぶみ、具体的な成果を求めて他へ去った人びとを私は幾人か見た。

知識人の貴族的な思考

ハンガリーの歴史には、数々の悲壮な武勇伝が刻まれている。社会主義の歴史は四十年ほどだが、この国には第二次世界大戦に敗れて崩壊するまで、一千年の王国の歴史があった。

知識人には旧上流階級の出身者がいまだに多く、貴族的な思考が健在である。貴族といっても人口の一割近くが貴族の称号を持っていた。したがって貴族ということは必ずしも富を象徴しない。むしろ貧乏貴族が圧倒的に多く、日本の武士階級を思い浮かべればピンとくるであろう。大名から郷士までがこの国の貴族であり、農家に住んでも精神貴族を誇る人びとが貴族の大半を占めていた。東欧の中でハンガリーとポーランドは、貴族と農民の国であった。社会主義政権の成立以前に、東欧で例外的に議会制民主主義を発展させた

といわれるチェコスロヴァキアは、貴族より中産階級の国であったといえる。
ハンガリーは隣国オーストリアの皇帝を王にいただく王国であった。第一次世界大戦でドイツと組んだオーストリア・ハンガリー二重王国は敗北し、皇帝は退位してオーストリアは共和国となった。しかしハンガリーは、王様がいなくなったまま摂政をおいて王制を続けたのである。

ハンガリー社会の底流には、現在も身分社会の名残りを濃厚に感じる。我が家の隣人は親切でよく気のまわる料理上手の主婦であったが、彼女のおばあさんは上流階級の家の女中兼名料理人だったそうだ。また企業精神に富むある知人は、祖父が有名な実業家で、王国時代の紳士階級だったという。本人は親から譲られた唯一の財産となった教育を生かして役所づとめをしていたが、現在の改革に心機一転、実業の道へとのりだした。

職人や工場労働者は子供が学校でどんな成績をとるかよりも、家を手伝わせ、技術を習得させ、早くひとり立ちできるように心をくばる。誰もかれもが自分の出自をはっきりと意識しており、子供たちも大むね両親と同じような職業を選ぶ。高等教育を受けた知識人にはやはり知識人であった両親がおり、それは彼らの家が貴族か、貴族の生活様式に同化しつつあった有産階級であったことと重なる場合も多い。

ポーランドやハンガリーの反体制派知識人には、自分にこそ国難を背負う義務があると

いう貴族的な意識が強い。マリカにも私はこの意識を感じとった。そして実際に、彼女は称号ある家柄の出だと判明した。なぜ分かったのと尋ねる彼女に、日本の士族が持つ誇りと社会に対する責任感を彼女にも感じるからだと答えた。私にも貧乏士族の血が半分流れている。マリカが私生活を犠牲にし、我が身をかえりみず反体制派の活動に身を投じる姿は、私が士族出の祖母から聞いた昔話の登場人物たちとどこか似ていた。江戸時代の終焉とともにサムライは身分としては消えたが、サムライの精神を宿した御老人が私の周囲には結構いたのである。彼らが教育や言論の分野などで、経済重視の戦後日本の風潮に逆らうかのごとく、良くいえば無償という信条を掲げてさまざまに社会に貢献しようとする姿を見てもいた私であった。

ハンガリーの反体制派の中にも私は多くのサムライを見た。しかしマリカの子供たちは母のために家庭生活にたえず緊張がみなぎっていたり、当局から西側への旅行を許可されなかった時期もあって、マリカの活動を冷ややかに見ていた。

今でもマリカのことを思うたびに、あの子供たちもやがて、母の人生を肯定的にふりかえる日がくるに違いないと思う。いかに彼女を批判してみても、社会主義政権下の束縛の中で言論の自由のために闘い、祖国の解放をめざした精神が、ハンガリー人によって評価されないはずはない。

この国の歴史では、結果はともかく愛国心が動機だったというだけで、勇敢な人生や悲壮な死が讃えられてきた。カーダール政権の末期に、次の政権の担い手として多くの人の期待を集めたポジュガイという政治家がいる。マリカのような人びとは、ポジュガイが「ソ連の戦車に踏みにじられたハンガリーの名誉を回復しよう」と感涙をふるうだけで熱狂の拍手を送るのであった。

しかし私には、ハンガリーの混迷を救う方法は、冷静で綿密な活動の中にこそ求められるべきではないかと、しきりに思えたのである。

4――トランシルヴァニア農民との出会い

トランシルヴァニアの中心地コロジヴァール市にあるマーチャーシュ王の像

ハンガリーとルーマニアの関係悪化

我われが滞在していた時期に、ハンガリーと隣国ルーマニアの関係は日増しに悪化し、緊張をはらんでいった。

ルーマニアのチャウシェスク政権は独自の外交路線を掲げ、西側諸国でもその評価は高かった。しかしそうした表むきの顔とは別に、チャウシェスク政権下で国民は極端な欠乏生活を強いられ、独裁の歪んだ政策が次第に明るみに出つつあった。外国からの借金を返すために生産物を輸出にまわし、ルーマニア国民は多くの物資を配給で買わされた。またチャウシェスク氏が進める急速な工業化で、都市周辺には公害をまきちらす工場が造られ、

住宅は高層化され、農村は近代化と称して統合されようとしていた。一見モダンな高層アパートの中では、電気やガスの供給がとどこおり、人びとが煮炊きもままならず、冬には凍えていたことを、日本の方々も今では御存じであろう。
今世紀の動乱で東欧から大量に送り出された亡命者たちは、西側に暮らしつつも祖国への窓口となっている。したがって西側欧米諸国は日本より早くルーマニアの実態に目を向け始めていた。さらにハンガリー人にとっては、現在のルーマニア領トランシルヴァニアに大量のハンガリー系住民がいるだけに、この点の認識には迅速で正確なものがあった。
トランシルヴァニアのハンガリー系住民は二百万人前後といわれるが、今後東欧の改革が反映されれば、その数は増える可能性がある。なぜなら東欧では、時々の政治情勢を反映して、民族統計が変化するからである。自分を少数民族として自由に申告できる時代もあるし、そうしない方が無難な時代もある。何より混血や混住を幾世紀も続けた土地では、個々人が自分は何民族か明確にできない場合さえある。母語や民族意識をもとに自分の民族籍を申告するのである。
トランシルヴァニアだけでなく、東欧では改革によって少数民族の申告が増えることが予想され、各国の民族分布に修正が加えられるであろう。民族統計をどう調査するか、それをどう解釈するかは東欧における難しい問題のひとつである。

ルーマニア領トランシルヴァニアは、かつてドイツ人、ハンガリー人、ルーマニア人などがまじりあって住んだ土地である。十一世紀末にトランシルヴァニアはハンガリー王国の支配下に入り、その後、幾たびも宗主権争いや遊牧民の侵入、ヨーロッパ世界対トルコの勢力争いなどの舞台となった。平時にはハンガリー王に招かれてドイツ人入植者が次々と開拓を進めた土地でもあった。中世末から近世にかけて、トランシルヴァニアは自治侯国としての地位を保っていた。近代には一八六七年から第一次世界大戦に敗れるまでここはハンガリー王国領であった。したがってトランシルヴァニアの地名は、第一次世界大戦終結まではハンガリー語の地名だったし、今でもハンガリー人はそれを使う。ドイツ人はドイツ人で、同じ土地をドイツ語の地名でよんできた。

ルーマニア人の民族意識は高揚の一途をたどっていたものの、伝統的にトランシルヴァニアの支配層はハンガリー人とドイツ人であった。第一次世界大戦後にトランシルヴァニアは多民族を抱えたままルーマニア領に編入された。失地回復をめざすハンガリーは、第二次世界大戦でナチス・ドイツと組んでトランシルヴァニア北東部をとり戻したが、結局は敗戦で再びこれを失った。

チャウシェスク政権は民族同化政策をさらに先鋭化し、ルーマニアをルーマニア人だけの国にする国策を強めていた。ドイツ系住民をドイツに送還するみかえりとして、ルーマ

ニア政府は一人あたり何マルクかを受け取ったという。これをマリカたちは今世紀の恐るべき人身売買と呼んでいた。チャウシェスク政権はルーマニア人以外の国内少数民族に対して生活物資の配給をより減らし、ハンガリー語で高等教育を受ける道も閉ざした。トランシルヴァニアからは、ドイツ系に続いてハンガリー系知識人が移住しはじめた。

東欧の知識人は物質的な欠乏は耐え忍ぶが、子弟の教育だけはできる限り最上のものを受けさせたいと望む。ルーマニアのハンガリー系知識人はハンガリー語大学が閉ざされた時、移住の決心をしたといえよう。しかし先祖代々の土地を離れる意志のないルーマニアのハンガリー系農民は、手工芸品を持ってハンガリーに買い出しにくるようになった。

マリカもトランシルヴァニアからの亡命者を救援する組織で活躍している。社会主義諸国では一般に知識人の収入は肉体労働者より少ない。豊かでもないマリカの家庭だが、幾多の亡命者をひきとり生活が軌道にのるまで面倒をみた。また彼女はさまざまな集会に我が夫を連れ出し、日本人がルーマニア問題を正しく認識することを強く望んだ。

反体制派に好意的でないハンガリー政府ですら、民族問題がからまるだけにハンガリー知識人のルーマニア改革支援や反チャウシェスク運動などを黙認していた。既にハンガリー国内に改革が進展し、現実の経済的な混乱はハンガリー民衆に党への批判をくすぶらせ始めていた。ルーマニアとの民族問題を、内政への不満をそらす材料としてハンガリー共

産党(社会主義労働者党、改革で社会党と改名)が利用しているのではないかと、我が夫は懸念した。

トランシルヴァニアから行商に

ある日、我が家の呼びりんが鳴ったので戸を開けると、見知らぬ農民が三人立っている。トランシルヴァニアからきたといって、数々の民芸品を出し、買ってもらえぬかという。私はびっくりしてうろたえたが、ブダペストの道端にこうした姿を数多く見ていたので事情はすぐにのみこめた。

商業活動の許可なく道で物を売ることはハンガリーでも禁止されており、警官には取り締まる義務がある。身内のような気さえするトランシルヴァニア農民の行商を、黙認する警官の姿もしばしば目にした。それでも、誰か彼かは取締りの対象とならざるをえない。見過ごしてやるからと金銭を要求する警官も出はじめた。警官を含めハンガリー庶民の生活は、目に見えて苦しくなりつつある。ハンガリーへ行商にくるトランシルヴァニア農民は、いつも脅えたような目であたりをうかがいながら道に立つのである。私も彼らから民芸品を買うことがあった。安い食堂で、夫が一目でそれと分かる彼らの民族衣装姿を見つけ、せめてもの昼食をごちそうすることもあった。

西側の装飾品にならぶ目の色を変えるおしゃれなブダペストの若者が、道や街角のトランシルヴァニア農民には目もくれない光景を、私は幾度も腹だたしく眺めた覚えがある。しかし、クリスマスや謝肉祭など肉親や知人が贈り物を交わす時期になると、年配のハンガリー人たちが同情に満ちた様子でトランシルヴァニア農民の荷物からささやかな、しかし精一杯の買物をするのを見て、私は自分の軽率な思い込みを恥じたりもしたのである。トランシルヴァニアのスカーフをつけてバスに乗ると、同じ物をまとった若い女性が私にほほえんだこともある。行商の農民が持ってくるのは、生活必需品とはいえない伝統手工芸品ばかりなので、ハンガリー人自身にもそうしたものを買う余裕はないのだ。

結婚のための買い出し

我が家を訪れた人びとは、マリカにここの住所を聞いたという。ハンガリーにきたものの持ってきた物の大半を売り残し、滞在許可がもうじき切れるので困っている。スカーフやブラウスなど荷物の半分を買い上げた。明日、夫がいる時にまたいらっしゃいと言って送りだす。明日までに彼らがルーマニアへ持って帰る食料などを用意しておこう。

そして翌日、彼らは夫に、実はこの息子が嫁をもらうのでハンガリーに買い出しにきたと言った。三人のうちおばあさんが母親で、若い男女はその娘と息子だそうだ。ガスの供

給があてにならないから新婚夫婦への贈り物にソ連製の電気コンロを買い、食料もできるだけ買っていきたいという。

今日はこんな物を持ってきたと見せるのは、美しい民族衣装である。「私が祖母と母から受け継いだ花嫁衣装です」とおばあさんが言う。「でも、そんな大切な品を手ばなしたくないのでしょう」と聞くと「もう私は結婚しないからいいのよ」とおばあさんは笑った。一針ごとに思いのこもる古い衣装とおばあさんの笑顔を見て胸がつまった。あれもこれもと骨董ものの衣類を買い求めたが、どうしても全部を買い切るわけにはいかない。小麦粉やお菓子に西側製のコーヒーとタバコを、夫は代金に添えて渡した。

ハンガリー警察の取締りに脅える彼らだが、ルーマニア国内に戻る際にはルーマニア側税関員の取調べがある。ルーマニア官憲はハンガリー系住民にとりわけ厳しく、なんだかんだと品物をまきあげるので有名だった。西側のタバコやコーヒーは目こぼしに絶大な威力を発揮する。コーヒーは輸入品のためハンガリーでも安くはないが、ルーマニアにはまったくコーヒーがないと聞いていた。

小さくなったタカシの服も、おばあさんの孫にあげたいと渡した。おばあさんの人柄にすっかり魅せられていたからである。すると彼女は涙を浮かべながら、今までの品物の代金を返そうとした。それは正当な代金だから収めてくださいと言うと、カバンに残ってい

た品々をどうしてももらってほしいと置いていった。

電気コンロはまきあげられかねないと夫は心配し、近々ルーマニアへ行くつもりだから、その時に運んであげると約束した。では結婚式にきてもらえますねと喜ぶ彼らを、夫は宿まで送った。ブダペストにはこうしたトランシルヴァニア農民に同情して、きわめて安く彼らを泊める個人宿がある。

翌々日、荷物をかかえてルーマニアへ帰る彼らを、夫は再び車で駅まで送った。バス代を削っても孫や子にチョコレートを買って帰りたい彼らであった。「村にはパンの配給がない。隣のルーマニア人の町まで半日かかって馬車で買いにいくこともある」と言っていた。子供たちはチョコレートやガムなど見たこともないそうだ。彼らが売り残した品はマリカが知人にさばこうとしたが、かなり残ってしまった。マリカもあのおばあさんの人柄に打たれて「立派なハンガリー農民だ」とつぶやいていた。

マリカの無謀な奮闘

日本の大学助手の給料でハンガリー滞在をまかなう我が家の財政は、決して暖かいものではなかった。そのうえ毎月のように、優秀なハンガリー人学生が西側で教科書やコンピューター部品を手に入れるための援助とか、生活に困っているハンガリー家族を助けるな

どということが重なって、月末にはお財布がからっぽのことが多くなった。

こうした援助の話は、たいていマリカが仲介していた。生活に困るわけではないからと、夫はできるだけのことをするつもりでいる。皆が真剣に生きている東欧を理解するうえで、幼いタカシにも何かが伝わってくれればという期待もあった。それでも私は、しばしば「マリカは私たちを日本の金持ちと勘違いしているのじゃないかしら」とぶつぶつ言った。

ある亡命家族に車が必要になると、マリカはアメリカ合衆国に住む富豪の知りあいに手紙を書く。反体制派が西側へおおっぴらに援助要請の手紙を出すわけにはいかなかったので、我が夫が隣の中立国オーストリアから手紙を送れと頼まれる。するとオーストリア在住のハンガリー人宛に小切手が届くという具合で、今度はオーストリアで西側の車を探してと、マリカに頼まれた。

小切手の金額で買えるのは日本の中古車だけと分かり、夫は親切なオーストリア人の売手と、代金ひきかえに車を買うという仮契約を結んだ。西側の車を買うための書類ができないから待ってくれと、マリカは言う。夫がオーストリアの仮契約をお詫びしながら先延べしていた間に、日本車は部品が高くて修理が難しいと言って、マリカは知人から中古のシトロエンを買ってしまった。マリカ自身、数年前にアメリカからの小切手で日本製の新車を買っていた。自分の経験に照らして日本車はやめるというのだ。最初から日本車では

なくと言ってくれるべきだったと私は怒り、それでなくてもインフレで苦しむハンガリー人の目に、亡命者がたやすく西側の車を持つことはどう映るか、よく考えてみたのかとマリカに念を押したのだが、すべてはあとのまつりだった。

こうしたマリカのめまぐるしくも穴だらけの奮闘ぶりに、私は閉口しはじめた。オーストリアまで車で片道三時間かかる。ガソリン代は我が家にとってもばかにならない。夫が研究所へ行こうとする矢先には、いつも突然マリカがあれこれと頼みごとを抱えてとびこんでくる。

また、マリカがアメリカの小切手で自分に新車を買ったことも不可解だった。上の娘はアメリカの知人の家に留学した経験がある。息子のゲルグはハンガリーの子が持てない西側のおもちゃをたくさん持っている。社会問題の解決に市井の市民の署名やボランティアの力を集めようとするマリカの姿勢は、草の根民主主義とどこか似ていて、どこか違っていた。私が知るアメリカやオーストラリアのボランティアは、寄付や善意の申し出を自分のために使わない。ただし、マリカ自身は恵まれた子供時代を送っていたわけだし、刻一刻と育つ自分の子にせめてまともなことをしてやりたいという気持ちも分からぬではなかった。新車にしても、それで彼女は人助けに駆けまわっている。マリカは自分だけのためには何ひとつ買うこともなく、ストッキングをいつもつくろって使ったりしているのだ。

マリカが誘いにくる熱狂的な政治集会から、夫は考え込んで戻ってくることが多くなった。夫は大学で改革を進める別な友人のグループが緻密で有能な集団であることを知り、むしろそちらの方へ注目するようになっていた。

こんなことばかり書いているが、我が夫は政治マニアでもなんでもない。目下、前世紀のハンガリー貴族の研究をしている歴史家である。しかし改革が始まって以来、ハンガリー人の食卓での語らいや、友人との会話はすべて政治一辺倒になっている。市場のおばさんから大学の教師まで、全国民あげての共通の話題が政治なのだ。

私は戦後の日本にもこうした時期があったのだろうと思った。そこまでさかのぼらなくとも、私が高校へ入った頃に日本の学生運動の余韻があったが、私たちが上級生になると、私の高校は受験一本やりの進学校として名をあげ、生徒会の役員すらなりてがなかった。日本の繁栄は政治的自由を謳歌しているからに違いないとハンガリー人から言われて、むしろ豊かさの中で個人生活が優先し、自分の世代は政治に関心が薄く、ハンガリーのように一人ひとりが国の将来を真剣に思いつめているような状態ではないと知る私は、返答につまったりしたのである。

我が家がハンガリーで暮らし始めた頃は新しい雑誌が次々に出版され、言論の自由がせきをきったように溢れ、「民主主義」が人びとの合言葉であった。民主主義の実現にはどうしたらよいか、政治家の誰がその担い手であるか、人びとは一刻もニュースから目を離せないでいた。

マリカは自分が買ったシトロエンから、亡命者の友人のバッグが盗まれたと、血相を変えて教えにきた。ルーマニアの秘密警察がブダペストまで追跡してきたのだろうと言う。シトロエンは目立つからねぇ、とは思いながらも、東欧における個々人の生活に政治の網の目が張り巡らされていたこと、少なくともそう感じて生きてきた人びとの気持ちを、私は改めて実感した。真相は分からない。単なる物盗りかもしれないのだ。

インフレの中でハンガリー人が亡命者に同情をよせつつも、大量の難民を抱えて負担を感じ始めたのも事実であった。日本より治安が良かったこの国で、最近は時おり誘拐や強盗のニュースが伝えられて夫が仰天することもあった。私は、自分の研究だけはしっかりやり遂げてねと言いながら、夫がマリカの活動に巻きこまれ過ぎないことを願った。

音楽家のエステル女史

このような次第で、ルーマニア行きを決めたのとほぼ同時期に、もうひとつのできごと

が始まりつつあった。
日常の物質生活では日本より不自由だとしても、ハンガリーには多くの優れた精神文化と伝統の厚みがある。例えば、ハンガリーの作曲家コダーイが子供の音楽教育に編み出したコダーイ方式は有名である。私は息子にハンガリー音楽を体験させたかった。
タカシの音楽の先生を探していると、マリカが、彼女の子供たちが教わったエステル女史は優れたコダーイ教育の実践家だからぜひ習いなさいと勧めてくれた。ただしエステルにはちょっとした家庭の問題があり、五人も男の子がいるのに、夫は家族を捨てて出奔したため、経済的にひどく困っているとのことだ。
マリカに連れられてブダペストから車で三十分の郊外、ビアトルバージュにこの家族を訪ねた。二十歳の長男は技術専門高校を今年卒業し、もうじき徴兵されるという。下の四人はいずれも音楽家をめざす。ビアトルバージュというこの農村は現在ブダペストのベッド・タウン化しつつある。
エステルの夫は村はずれに新しく家を建てた。家はまだ建てかけで、二階や細部はできていない。水道の配管も途中で、井戸水をくんでいる。それもこれも夫のラヨシュが家族を捨てたからだという。音楽専門学校の教師をしているエステルは過労が重なって、今は病気療養のため有給休暇をとっているのだそうだ。

しかしこの不幸なエステルを囲んで、子供たちはなんと美しくむつまじい家庭をはぐくんでいることだろう。気持ちの良いこの家族を支えているのは、すべてが信仰の力なのだと、マリカは説明した。家族全員が教会活動に熱心で、神様が彼らを守っているとしか思えないそうだ。エステルは、夫と喧嘩別れをしたわけではなく、画家である夫は制作に悩んで家を離れたが、必ず戻ってくることを信じて神に祈る日々だと言った。

確かにエステルはすばらしい音楽の教師であった。子供の心を自然に音楽にさそいこみ、ボールのなげっこでリズムをつかませたり、それを四人の息子たちが周りからおもしろおかしく手伝うので、タカシは夢みごこちで音楽の世界にひきこまれている。マリカの息子ゲルグと一緒にタカシはここへ毎週通うことになった。教会、水泳、体操教室、英語で忙しいゲルグは、音楽の授業をできるだけさぼりたいと考えていて、欠席が多い。自然と我が家だけでビアトルバージュへ通う日が多くなった。

うちとけた話をするようになると、エステルが食べざかりの息子たちのために、自分の昼食を抜いていることを知った。その息子たちは母が病院へ行っても特別な心づけができないために満足な治療を受けられず、病気がさっぱり良くならないと心配している。確かにこの国の医者は賃金が安く、病院を二つ三つかけもつか、自宅で時間外診療をしていることが多い。親身の治療を受けるには、医者への心づけが必要だと、他のハンガリー人か

らも聞いていた。あと少しで子供たちが成人し、独立するというエステルを見ながら、我われも心配でならなかった。

上の二人の息子たちは、アルバイトをして家に生活費を入れている。それでも楽器の部品や修理とか、学校行事の予定外の出費でエステルは途方にくれている様子なので、音楽に加えてタカシへのハンガリー語のてほどきを三番目の息子に頼むことにした。近所の小学生の悪ガキたちがタカシのおしゃべりをおもしろがって、きわめつきの汚い卑語を教えこんだので、あるとき夫がタカシの言葉づかいにまっさおになったのだ。自分が言ったことの意味など知らないタカシの方はきょとんとしている。幼稚園の保母さんたちも、友達には注意する必要がありますねと、婉曲に問題があることを話してくれたばかりだった。この美しい家族のもとで、タカシに正しいハンガリーの子供言葉を教えてもらえればなによりである。

また、私自身がエステルのグランド・ピアノを時々貸してもらって、お礼をすることにした。昔はハンガリーも現在の日本のように多くの家にピアノがあったが、今は順番待ちでしか新しいピアノは買えない。その新しいピアノとは東ドイツ製かポーランド製のきわめて質の悪い代物である。価格は日本円で十万円ほどだが、良いピアノは西側に売るため、社会主義圏で新しいピアノはとても買う気になれない。専門家になろうとする子供たちに

とってさえピアノ不足の状態である。エステルのピアノは戦前のオーストリア製であった。素人の私も異国の暮らしの中で、時おりピアノが弾きたいという衝動にかられていた。

エステルのために有能な医者を探したりしながら、我われはこの一家と知り合えたことに、当時はとても心をなぐさめられていた。ささやかな援助で、むしろ精神的に受けるものの方が多いと感謝もしていた。夫のラヨシュが必ず戻ってくると村の教会で予言されているという不思議な話や、昼食を抜いてまでがんばっているはずのエステルが、とてもふくよかなことに注意を払いもしなかったのである。

5——ルーマニア国境へ

キャンプ装い国境越え

先のトランシルヴァニア農民に電気コンロ等を届ける約束の日は近づいた。ルーマニアは西側の旅行者に愛想が良いとは聞いていたが、チャウシェスク政権の隠された部分に西側ジャーナリズムが探究を始めた頃から、西側の人間にも厳しい目が向けられるようになった。まして我われはハンガリーからトランシルヴァニアへ旅行に行くとあって、さまざまな可能性を覚悟せざるをえなくなっていた。

コンロや食料をできるだけ持ち込むために、夫はキャンプを装うことにした。多量の食料を見とがめられないよう、日本からブダペストへ留学している学生のT君と、オーースト

泊めてくれなかったオラデアのホテル

リアに留学中のマサコも同行してくれる手筈となった。皆、東欧の歴史を研究している仲間で、独裁制とか少数民族の根絶政策といったまさに歴史的な場面をこの目で見たいと意欲に燃えている。

私はハンガリー語中級クラスの授業が毎日あったし、ハンガリー語しか思うように話せなくなっている四歳の息子が国境でぺらぺらハンガリー語を話したりしたらどういう事態になるか心配であった。何より幼い息子を食料も乏しく危険かもしれない国へ連れていくことは気乗りがしない。夫と相談して私と息子はハンガリーに留まることにした。

しかし、いよいよ出発という朝になって、前夜マリカがどっさり持ち込んだ、亡命者たちからルーマニアに残した家族への手紙、写真、薬品、食品類をうまく隠して持ち込む用意がまだできていなかった。若い留学生たちと策士とはとても思えない夫のことが不安で、タカシをエステルのもとに送り、私もどたんばになって国境まで同行することにした。

ハンガリー国境は簡単に越えたが、ルーマニア国境には長い車の列が延びている。ルーマニア警備兵は微にいり細をうがって持ち物検査をし、車の下まで鏡で映して何者かが潜んでいないかと調べる。車のボンネットを開け、車内に秘密の隠し場所がないかと調べる。

こうした列に並びながら、夫はハンガリー語は絶対に話さず、日本語と英語でとおし、呑気な旅行者をひたすら装うべしと指示した。私はことづかった薬品の箱をハンガリー側

国境のごみ箱に投げ捨て、中身と説明書を魔法瓶に詰めた。手紙や写真類はバッグに入れ、わざとバッグの口を開けたままルーマニア側検問所の低い塀に座って、魔法瓶からお茶を飲むふりをしていた。周りの車からは、あおざめた顔の人びとがかたずをのんで検問を見守っている。彼らは家族に会うためこの辛い行列に何時間も耐えているのだ。移住した人が生活必需品のおみやげを満載して故郷を訪れる姿が多い。

さて我われの番となって、旅の目的と行き先を聞かれ、夫は美しいルーマニアにキャンプにきた、キャンプの場所は景色で決めるなどと答えている。車は容赦なく点検され、持ち物もくまなく調べられた。外にいた私のバッグや魔法瓶は調べられずに済んだ。「バイブルを持っていないか」と夫は聞かれる。ルーマニアに持ちこめない禁書の筆頭は聖書なのだ。「我われは日本の仏教徒ですよ」と夫が呆れた声で答える。思ったより我が夫は策略家らしい。

ようやく検問が終わり、車は国境の町オラデアへと向かう。

オラデアの夜

日は傾いている。国境を越えたとたん、道路の舗装がひどく悪くなったことに気づく。オラデアの入口には、巨大な工場がモクモクと煙をはいていて、空気が臭う。外貨とルー

マニア通貨の交換比率が極端に不公平で、旅の初めから資金ぐりが不安になった。外国人用のホテルへ行ったが、たそがれでも明かりがついていない。宿泊料だけは西側の一流ホテル並みだ。他をあたろうと外へ出た。ホテルを探して町をゆっくり進む。旧市街に並ぶのは、まぎれもなくハンガリー様式の前世紀の建物群だ。このオラデアはハンガリー語でナジュヴァーラド、ドイツ語ではグロスヴァルダインといった。

とりわけ美しく巨大なハンガリー様式の建物に、ホテルの看板がかかっている。ここにしよう、もし高くても、さっきの近代的なコンクリートのホテルよりずっとましということになった。しかし満員だと断られ、夫は戻ってきた。満員のはずはないのに。もう少し先に進む。日がとっぷり暮れてから、旧市街のまんなかで見つけたホテルに、我われは泊まることにした。

「今晩の夕食は用意できません」とフロントで言われる。しかし一級ホテルの看板にもかかわらず宿泊料が安いので、夕食は外でとることにして部屋へ向かった。我われが泊まるように快く手配してくれたホテルの男性が、車の中に荷物を残してはいけない、外から覗いても中に何もないと分かるようにしなさいと言って、車から荷物を運び出してくれた。

ついで彼は、我われと共に荷物を部屋まで運びこむと、ハンガリー語でコーヒーを持っていたら売ってくれと言った。見知らぬ他人に分ける余裕はないほど制限一杯まであずか

った荷物ばかりだったが、夫はひと包みのコーヒーとハンガリー・サラミのひとかけを彼の親切へのお礼として渡した。彼は何度も金を払うと言うが、我われは気楽な旅行者で別に不正にもうけるつもりはないと夫は固辞した。彼が去ると夫は、あの人のハンガリー語は上手だが母語としてのそれではない、用心にこしたことはないと説明した。

夕食をとりに、外へ出た。一級レストランが見え、明々(あかあか)とシャンデリアがともっている。しかし「食事はもう売り切れてしまい、ありません」と言われた。夜八時の町をぶらつく。街灯はほとんどなく真っ暗だが人の往来は多い。暗闇に銀座のような人混みが続くのは不思議と幻想的な眺めである。疲れた我われは、元気づけに小型カセットで音楽を低くかけながら暗い町を眺めた。ハンガリーで東洋人の我われは珍しそうに見られることに慣れていたが、ここでは誰も見ようともしない。音楽まで流しているのに不自然な気さえする。町じゅうに制服、私服の警官がいっぱいだと、ある亡命者から聞いていたが、警官の姿も見かけない。

その時、一方通行の道を逆むきに一台の車が走ってきた。たちまち、どこからともなく現れた警官たちに車は停止させられた。これほど多くの警官があたりにいることなど、我われにはまったく見えなかったのだが。

遠くを見にいったT君が、見知らぬ青年を連れて戻ってきた。青年はハンガリー南部の

町で医学を学ぶフランス人だと名乗り、ハンガリー語はまだできないと言う。我われの向かいのホテルに泊まっていると分かった。旅に同行させてもらえないかと言う。明日私はブダペストに戻るので、車にあきができる。彼を連れて次の町まで送る約束になった。明朝合流しようというフランス人と別れて、ホテルに戻った。

女性用と男性用に二部屋をとってあるが、ともかく男性の部屋へ集まった。食料はたくさんあってもすべて送り先を考えてあるので、食べる気にはなれない。サラミを少しみんなでかじりながら、明日はどうなることやらと語り合った。

それぞれの部屋へ戻る。マサコはベッドのほこりとシーツに洗った形跡がないことを発見して、黙ってしまった。清潔好きの若い女性が泊まれるような状態ではない。二人でほこりを払って、部屋の外を探検に行く。共同の浴室がある。シャワーが使えるはずだと覗き込むと、壁はかびだらけである。あわてて部屋へ戻り、これはどういうことなのかしらと話しながら眠りについた。真夜中に子供が走りまわるような音や声がする。悪い夢でも見そうな気がした。それでも、目がさめたら夜があけていた。

朝食のできごと

昨夜は寝つかれなかったマサコを部屋に残し、食堂が開くまで時間があるので、夫たち

と車の安全を確かめついでに朝の町へ出た。車は異常なし。六時頃で仕事に急ぐ人たちが多い。清掃員が道路をせっせと掃除している。町から受ける清潔感はハンガリー以上だ。向かいのホテルに行き、フランス人を呼んでもらおうとしたが、そういう宿泊客はいないと言われた。何か勘違いしているのだろうと、我われのホテルへ戻る。入れ違いにフランス人がここへきていて、朝食は済ませたから外で待つと、ソファに腰かけた。

朝食はあるだろうかと言いつつ食堂の戸を開けると、中は満員である。丸パンとソーセージの皿、紅茶が運ばれてきてほっとした。周りの雰囲気と朝食の内容は、とても一級ホテルのものではない。国内の旅行者ばかりで小学生の集団もいる。彼らが利用できるからには、ここは外国人用ホテルではないと分かった。我われにとって望ましいことではある。

周りのテーブルからさっそく、コーヒーか何か持っていたら売ってくれと声がいくつもかかった。夫は断り続け、隣人たちは交渉し続ける。最後までねばった子供づれのルーマニア人一家に、夫はささやかなプレゼントとして、チョコレートを渡した。金銭とひきかえではない純粋な贈り物と知って、それまではかなり押しの強そうだった父親が、ひどく内気な微笑みを返した。あたりにはハンガリー語もたくさん聞こえている。

マサコの元気ない姿が戸口に立ったので「こっちよ」と私は叫んだ。その時、近くの席で話しこんでいた年配の婦人が迷惑そうににらみ、顔をそむけた。食事をしながらも、婦

人の表情が心にかかった。周りの人びと全体に、どこか生気のない様子が漂っている。本日の非常用食料と称して、パンとソーセージでサンドイッチを作っている夫たちと離れ、思い切って婦人のそばへ行く。彼女は連れとハンガリー語で話している。「先ほどはうるさくしてごめんなさい」と言うと、彼女はまじまじと私を見つめた。「ハンガリー語を話すのですか」「私たちはブダペストに住んでいます。日本人です」。彼女は、自分は医者であり、さっきは気がめいっていたものだから失礼をしたと答えた。

席に戻り、我われも出発しようと立ち上がると、婦人の方から我われのテーブルにやってきた。夫が知人に薬や手紙を届けにいくと小声で説明すると、婦人は私の額に指で十字をかき、「あなたがたに神の御加護があるように」と言って立ち去っていった。

不可解なことばかり

チェックアウトまで町を見物に行く。フランス人は荷物をとってくるから、十時に会おうと言った。オラデアの町は古い建物がよく修復されていて、朽ちた廃墟のような建築も目につくブダペストよりはるかに美しい。「でも、近寄ってよく見てごらん。なんという雑な塗装だろう」と夫が注意をうながす。ブダペストでも建築の修復が盛んになっているが、足場をしっかり組んで、悠長ともいえる丹念な塗装をほどこす。これでは一区画の最後の

建物を修復した時に、最初に修復した建物はボロボロになっているのじゃないかと、よく冗談に言い合ったものだ。オラデアの建物は遠くからはすばらしく美しく、近寄れば確かに塗装の薄さと雑な仕上げに驚かされる。

ここから中庭へ行くのねと、マサコが建物の壁にあいているちいさな入口を通り抜けた。あとに続いた我われは息をのんだ。外壁のみかけの良さに比べて、内側の壁はまったく修復されずしみだらけである。中庭の荒れかたはすさまじい。あわててそこを離れ、いま見たのはどういうことかといぶかった。

食料品店が開いているので入ってみる。広い店内のあらゆる棚には、缶詰、瓶詰、酒ばかりである。ハンガリーの食料品店ならこうした保存食品の他に、肉類と卵、野菜とパンが必ず並んでいる。ここオラデアの店の商品は野菜と果物を煮たものだけだ。買う物もなく店を出た。何かが変だという気分が我われみんなの表情に現れている。

夫が通行人に呼び止められて話している。戻ってきて言った。「昨夜、車から荷物を出している時、うっかりアメリカ・タバコを車の屋根に置いたら、若者がそれをひったくって逃げた。嫌な気分にさせまいと話さなかったのだが、今、昨日の若者が向こうから寄ってきて、アメリカ・タバコを売ってくれ、金を払うというんだ。むろん断ったけど、驚いたなあ」

カフェの看板がある。中に入ると、コーヒーの香りがする。眠くてたまらぬ我われは半

信半疑で行列に並ぶと、本当に薄いインスタント・代用コーヒーのカップを渡された。席に座っても誰もこちらを向かない。隣の客たちに夫がつい、ハンガリーの習慣でポケットのアメリカ・タバコを差し出した。三人の客が一本ずつ無言で受け取り、二人はそれをすぐにポケットにしまった。もう一人はしばらくアメリカ・タバコを眺め、火をつけてゆっくりと吸いだした。皆、終始無言である。亡命者から、ルーマニア国民は外国人と話をするとあとで警察の取調べをうけると聞いていた。無言の相客が、つかのまでもアメリカ・タバコを楽しんでくれたならいいと、私たちは心で思った。

まだ眠い。こんな薄いコーヒーでも、もう一杯あれば目がさめるかしらと言う私に、夫はコーヒーを注文にいってくれたが「もう売り切れたそうだ」と戻ってきた。ブダペストに帰ればいくらでもコーヒーはあるのに、さっき飲んだ一杯さえ心ないことをしてしまった気がする。

ホテルではフランス人が待っていた。車に乗る。次の町コロジヴァールへ向かう途中、昨日の国境で私を降ろすことになっていたが、道が分からずちょっとまごついた。フランス人が多分こっちだろうと言う方向へ進むと、正しい道へと抜けられた。駅を見たが、売店にはルーマニア・タバコやジュース、菓子パンなどは売っている。ひどくすさんだ雰囲気があり、駅は汚れていて、人びとの服装も汚れている。ここでは声をかけてくる人はい

ない。線路の土手で寝ころがったり、酒瓶を囲んで車座に座ってしゃべる男たちの姿がある。何がなんだか分からない気分である。

ひとりハンガリーへ戻る

国境では私だけが降りた。あずかった手紙類のない今日のバッグは妙に軽い。荷物がこれだけなため検査はすぐに済んだ。「トラヴェラーズ・チェックを家に忘れてきたので、家族を代表して私だけとりに戻る」と英語で説明した。ハンガリー側検問所に行き、同じ理由を述べる私を、一人の検問員がハンガリー入国ヴィザ申請所へ連れていってくれた。

我が家が旅行した東欧諸国では、ハンガリー、ルーマニア、チェコスロヴァキアで入国にヴィザが必要だ。ルーマニアとチェコスロヴァキアではさらに強制交換というものがあって、あらかじめその国の通貨と西側外貨をいくらか交換する義務がある。ハンガリーは強制交換をしないだけ西側の外国人に対して開放的な感じがあるが、それでもヴィザは外貨をかせぐ良き収入源となっている。ユーゴスラヴィアにはヴィザも強制交換もなく、語学校の友人ラディチ氏は「我が国は自由の国だからね」と自慢していた。

私を見て、別の検問員がハンガリー語で「注意しろ」とかたわらの検問員に言った。「分かってる」と彼は答える。命が縮む思いがする。しかし優しい表情のこの検問員は、ヴィザ

受付の窓口で「お気をつけて」と言って去ってしまった。ハンガリーに亡命した知識人が、追ってきたルーマニア秘密警察に殺害されるという事件もおきて、ハンガリーとルーマニアの関係はいっそう悪化し、相互の疑心暗鬼は強まるばかりだった。私のような東洋人がバッグ一つで国境を越えようとすることすら、不信を招きかねない状況なのだなと思った。

ヴィザ受付窓口には中年の婦人がいる。彼女は書類をたどたどしい英語で説明し、つまるとハンガリー語がとびだすので、こちらもたどたどしいハンガリー語にきりかえる。ブダペストで幼い息子が待っているから列車にまにあいたいと私は言った。彼女は自分にも子供がいると話しながら、「あちらはどうでした」と聞くので、「食料品店は野菜と果物の瓶詰、缶詰ばかりよ」とささやく。だいたい長い冬に備えて東欧圏では野菜や果物の保存食を各家庭が自分で作るのだ。缶詰や瓶詰の味はとうてい自家製には及ばない。誰かあのまずそうな瓶詰類を買うルーマニア国民はいるのだろうか。

ようやくヴィザができた時、列車の出る音がした。次の汽車はいつになるのかとあおざめた私に、窓口の女性は「ちょっと待っていらっしゃい」と言うと、ヴィザの申請にきた人の中から車でブダペストへ行く人を見つけ、私を乗せるように手はずをつけてくれた。思いもかけない親切に胸が熱くなる。

ハンガリー人の独創性

私を乗せてくれたのは中年のイタリア男性である。英語で一生懸命に話してくれるが、「よく眠っていないのでひどく疲れています」と言われた。私は免許をとったこともなく、運転を交代してあげることができないので申しわけないと思いつつも、ブダペストまでの長い高速道路を大丈夫かしらと不安になった。高速道路は二百キロまでスピードを出すことができ、ハンガリー人の運転はなかなかものすごい。もっともソ連や東欧圏の車はあまり性能が良くないため、二百キロは無理かもしれない。イタリア人の車は乗り心地が良く、なかなかの高級車だと分かった。我が家のおんぼろ車とはおおちがい。

我が家がハンガリーで手にいれたのは、十二年ものの日本の中古車である。夫は日本で、維持費が捻出できないし、排気ガスは公害のもとだし、バスや電車の方が速いくらいの広島にいたから、車は買わないよといつも言っていた。しかしハンガリーの鉄道網は不便で、資料集めに地方をめぐる必要があるため、この中古車を買った。第一次世界大戦に敗れ、ルーマニア、ユーゴスラヴィア、チェコスロヴァキアに領土が分割されるまで、ハンガリーの鉄道網は健在だった。ハンガリーは優れた鉄道車両の輸出国でさえあった。それが領土の三分の二を近隣諸国に割譲して、地方の鉄道の拠点が外国領となってしまった。

ブダペストの我が家に夫が日本の中古車を買ってきた時、今の日本ではもう見かけないような古めかしいスタイルに、私は思わず笑ってしまった。それでも「日本の車だ」と、近所の子供がむらがったものである。オートマチックが珍しくて、若者たちは川原でこの車を運転させてくれと頼み、お礼に車を磨いてもらったこともある。

「僕たちの国も、テレビや地下鉄やいろんなものを発明したのになあ。今はすっかり駄目だね」と、子供たちが溜め息をついたことは忘れられない。しかし、ハンガリー人の発明や独創の才能が枯渇するはずはない。「いつか君たちの手ですばらしいものが生み出せるよ」と慰めたが、実際に西側では多くのハンガリー人が今もその才能を発揮し続けている。

夫が言うには、ハンガリー人は発明狂なのだそうだ。ヴィタミンCの発見も、イギリスに続いてヨーロッパ大陸初の地下鉄を走らせたのもハンガリー人の功績である。テレビやヘリコプターの開発、水爆製造の歴史にもハンガリー人が登場し、ハンガリー人の独創性や発明発見の才能は列挙にいとまがない。優秀な車両製造の技術は現在も地下鉄製造に生きている。ただしハンガリーはコメコンのおかげで電車はチェコスロヴァキア製品を買わされていた。ブダペストを走る地下鉄はソ連製である。ハンガリー製の地下鉄車両はソ連が買って、ソ連製のマークをつけ、西側に輸出していたというからややこしい。

さて、イタリア人は時々休んだり、神経が静まるという曲をカーステレオでかけながら奮闘している。彼はイタリアの自動車技師だそうだ。会社がルーマニアと技術提携をしたので、仕事を口実にルーマニアへきたが、自動車工場で知り合ったルーマニア女性と結婚しており、本当は彼女に会いにきたのだと言う。一年前に結婚してすべての書類を揃えたのに、彼女にはいまだに出国許可証がおりず、じりじりしているそうだ。彼女はイタリア語ができず、自分はルーマニア語ができないが、フランス語を媒介としてお互いの気持ちは通じると笑った。

ルーマニアはその国名が示すごとく、かつてこの地にあったローマ植民地の後裔を自認している。ルーマニア人はラテン民族であると主張しており、義務教育で習う外国語はフランス語である。現在のルーマニア人に古代ローマ人の血が直接流れ続けているかどうかは、学問的に大いに疑問とされるところだそうだが、東欧圏にあって古代ローマ人の子孫を名乗ることは、古代にさかのぼって自国のアイデンティティを確証づけようとすることである。四世紀頃始まった民族大移動以降にやってきた新参者のハンガリー人やスラヴ人の及ばぬ歴史に、この地における自分たちの根があると自負することでもある。

世界じゅうのナショナリズムには多かれ少なかれこうした発想がつきまとう。東欧でも

ルーマニアに限ったことではない。中世のヨーロッパにはラテン語とカトリック教会の世界、あるいはキリル文字やギリシャ語と東方正教会の世界が民族を超えて広がっていた。しかし近代にナショナリズムが政治的に重要な役割を果たし、民族国家の形成と民族語を国語として確立しようとする時代がヨーロッパに生まれると、東欧でもさまざまに歴史的権利というものが叫ばれた。

ハンガリー人には十一世紀の聖イシュトヴァーン王の王冠の地という概念があり、チェコ人にも十世紀の聖ヴァーツラフ王の王冠の地という概念がある。自分たちにとり最も輝かしい王様の時代にさかのぼって、その時の領土や主権を主張したのである。またハンガリー史上最大の名君といわれる十五世紀のマーチャーシュ王が生まれたのは、当時のハンガリー王国領トランシルヴァニアのコロジヴァールだが、この都市は今日のルーマニア領クルージ・ナポカであり、ハンガリー人はハンガリー王としてマーチャーシュを讃え、ルーマニア人はマーチャーシュが実はルーマニア人だったと言い張っている。

東欧の各国、各民族にはこうした王様や英雄の昔話がいっぱいある。伝説にいろどられた昔話はどこまでが真実でどこまでが虚構なのか境のはっきりしないものが多いし、こうした過去がいったい近代になんの意味を持つのかも判然としない。東欧のナショナリズムには理性的でない要素が色濃い。しかし不合理かもしれず、無意味かもしれないこうした

要素が、東欧の歴史の大いなる魅力となっていることも事実である。
西欧ではECによるヨーロッパの再統合と協調という思想が現実化されようとしているのに、東欧ではいま民族問題で各国間や国内が対立を深め、ばらばらになろうとしている。しかも東欧は民族がまじり合って住むため、西欧よりさらに民族問題が複雑で、民族ごとの境界線は実際上引きえない。西欧は将来を展望しながら国境という垣根をより低くし、窓を広く開けようとしているかに見える。自国内にさまざまな民族や言語があることを、むしろ隣人との交流における利点として活用しようとする発想の転換が生まれてもいる。
しかし東欧では、民族問題でいつも過去が現在におおいかぶさってくる。あくまで国境という線に人間の方をあわせようとして領土の修正を考えたり、垣根を高くして人材の流出を阻もうとしたり、逆に異質な少数者を排除しようとしているのが現状ではないか。次の世代に新たな民族問題の種をまくことにならなければいいがと心配になる。
社会主義のもとで、少数民族の権利がある程度まで保障されたのは事実である。同時に少数者を多数に同化させること、つまり少数者から民族性の抹消を試みていたのも事実である。東欧の改革とともに、民族問題もまた表面化した。なんの問題も解決されずにただくすぶり続けていただけだったのかと、東欧の研究者たちは愕然とさせられたものである。繰り返すが、どう試みても東欧にすっきりした民族の境界を引く可能性はないのだ。民族

が混住する東欧ならではの、優れた民族政策が生まれて欲しいと心から願う。
　私を乗せてブダペストへと向かうイタリア人が、今回はハンガリーを素通りしてボローニャの自宅へ徹夜で運転するので、ハンガリー名産のさくらんぼ焼酎（パーリンカ）をおみやげに買いたいと言う。途中の町でさくらんぼとすももの焼酎を買ってお礼にした。熱いエスプレッソコーヒーも急いでいるからカップごと売ってもらった。ハンガリーはこと食料品に関するかぎり、どこへいっても豊富に買える。ルーマニア国境を一歩越えるだけで別天地だ。
　今日は親切な人ばかりに出会ったと感謝しながら、イタリア人と別れ、ビアトルバージュのエステルと我が息子のもとへ急いだ。
　ルーマニアへ行ったせいで、ハンガリー語学校を続けて休んでしまった。優秀な中級クラスはすばらしい速度で進んでいることだろう。気が重い。夫がルーマニアから戻るまでタカシを幼稚園に送り迎えするのは私の役目となる。あと何回か学校を休まねばならない。夫は戻ってこれるのかしら。もし夫がルーマニアから日本へ強制送還され、私が高速道路で事故死でもしていたら、息子はどうなっただろう。外国で幼い子までつれて、我われ夫婦は少し思慮が足りない生活をしているのではないかという気さえしてくる。

6——トランシルヴァニアとハンガリー文化

婚礼の行列

村の結婚式

夫とマサコは三日後の予定日に無事、帰ってきた。T君は一人で旅行を続け、列車で戻るそうだ。

トランシルヴァニアの村の結婚式はすばらしかったと二人とも興奮している。後日できあがった写真を見て、私は溜め息が出た。花嫁花婿は花で編んだ冠をかぶり、村人は民族衣装の晴れ着を着ている。

村のおもしろい結婚式を、夫に話してもらうこととしよう。

婚礼の朝、花婿の先ぶれとして村の少年が二人、花嫁の家を訪ねる。続いて花婿と花嫁

の親族代表を先頭に花婿、次に未婚の少女と少年の一団、最後にジプシーの音楽師による演奏つきの行列が花嫁の家へ向かう。花婿は行列を送りだす両親に向かって、自分が一家を構える別れの挨拶をする。この「形式的な別れ」の挨拶は、昔から伝わる詩のような定型句である。沿道で村人はそれぞれの門口に出て行列に祝福を贈るのだが、行列からは瓶に入った焼酎が差し出され、それを一口ずつまわし飲んで、また瓶を行列に返す。

花嫁の家へ行列が到着すると、花嫁の親族代表だけがまず中に入って門を閉め、垣根の内と外で、これまた定型の問答を始める。花嫁側の親族が「何をしにきた」と尋ねると、垣根の外から花婿側の親族が「この家の娘を嫁にもらいにきた」と答える。「娘はやれない」とまず拒絶され、「お互い同士が好きあっているし、みんなが祝福しているから認めて欲しい」と花婿側が言う。それではまだ不十分であるとがんばる花嫁側に、花婿側も花婿の長所とこの縁組の美点を次々に述べる。十分ほどの押し問答が、昔ながらの形式にのっとって続けられるのである。韻をふんだ詩的な問答の響きと、おとぎ話のような村人の民族衣装の魅力を、想像でこの場面におぎなっていただきたい。

ついに花婿側の願いがかない、花婿一行も門の中に入ることが許される。客間では、自分の年齢と同じ数の種類のお菓子を作って花嫁が待っている。そこで花嫁を真ん中に、両横には花婿と、この場合は姉である花婿の最近親者が座って、花嫁を花婿側が囲む形にな

るのである。花嫁が作ったお菓子や、この時に食べると決められているロール・キャベツ料理が一行にふるまわれて、ひとやすみする。

一行は次に、花嫁を加えて再び行列をつくり、教会へ向かう。教会には村人が待っている。花婿の両親は、家で婚礼のしたくをしていて教会にはこない。教会で花嫁花婿は神の前で結婚を誓い、新郎新婦となる。本来なら、教会からまっすぐ花婿の両親が待つ花婿の実家に進むのだが、社会主義になってからは、行列が途中で村役場に立ち寄り、婚姻届けを出す。

こうして書類上も結婚が成立すると、いよいよ花婿の両親と対面である。花婿の実家の客間で、花嫁は花婿の両親から「おまえは私たちの娘となった」と迎え入れられ、客たちは御祝儀をさしだす。

ついで家の外に設けられた大きな宴席で、婚礼の食事が始まる。二百人ほども集まった村人と共に、食事は夜半まで続けられる。たっぷり食べ、酔いもまわって、夜半すぎから朝まで、こんどはジプシーの演奏にのせてダンスが繰り広げられる。新婦にダンスのお相手を頼んだ人は、お礼に御祝儀をかごや帽子に入れる。飲めや歌えやの大騒ぎが夜どおし続くのだ。昔はこの大宴会を一週間行うならわしだったが、現在の食料事情などで二日間に短縮し、それでも村人はふらふらになるまで飲み、食べ、踊り、ひとやすみしては、ま

たこれを最初から繰り返す。
春の種蒔きが終わり、収穫が始まる前の、春から初夏にかけた一ヵ月半に村の結婚式は集中する。花婿と花嫁の頭を飾る冠の花が咲く季節である。この期間、だから村人たちはいつも、村のどこかここかで行われる婚礼を祝いめぐるわけだ。

ハンガリーの原文化

チャウシェスク政権による農村の統合に、ハンガリー本国が反対の声をあげたのも、こうした村の伝統や習慣にはハンガリーの原文化というべきものが残されており、それを破壊されることは、自分の伝統文化を失うに等しいからである。
アジアからヨーロッパへ移動してきた遊牧民ハンガリー人はいくつかの流れに分かれて定住の地をみつけた。このトランシルヴァニアの村あたりはセーケイ人が定住し、民俗文化がいまもよく残された土地である。セーケイ人は本国のハンガリー人と別系統の部族だともいわれるが、親戚すじの近しい人びとであることはまちがいない。彼らはハンガリー語を母語とし、トランシルヴァニア山岳地帯の守備兵の役割を果たしていた。この農民たちの祖先は農耕にいそしむかたわら、いったんことがあれば武器を手に戦う、ハンガリー王につかえた半農半士だったのである。

また、カトリックが国教だったハンガリーで、ヨーロッパ初といわれる宗教寛容令を出した名君などをトランシルヴァニア地方は生みだし、農村だけでなくトランシルヴァニア諸都市もハンガリー文化にとって重要な地位を占めていた。トランシルヴァニアの中心地コロジヴァールの大学からは、多くの傑出した人材を輩出している。

本国のハンガリー人はトランシルヴァニアのハンガリー語が純粋で美しいと賞賛する。俗語がまじっておらず、発音がきれいなのだそうだ。近世以降ドイツ化が進み、ハンガリー語にはドイツ語の語彙が混入している。また現在では英語がハンガリー語に少しずつ影響を及ぼしつつある。トランシルヴァニアの言葉にはそうしたものが少ないという。人口が千百万たらずのハンガリー本国とはいえ、地方ごとにそれぞれの方言やアクセントもある。トランシルヴァニアのハンガリー語こそが最も正統でここちよい響きを持つのだと、しばしば本国のハンガリー人から聞いた。

自称フランス人の泥棒

先のトランシルヴァニア旅行の二日目に、T君、マサコ、夫の三人はコロジヴァールでまたホテル探しに苦労した。あるホテルでも断られて途方にくれていた時、受付の婦人がハンガリー系だと気づいた。ハンガリー語で話しかけると彼女の表情が一変し、普段は使

わない特別室へ案内してくれたそうだ。ルーマニアのハンガリー系住民から、ハンガリー文化を愛する異国の客人への心づくしであろう。「いいことばかりだったのねえ、こちらは心配していたのに」と言うと、とっておきのひどい話が残っていた。

オラデアから同行した例のフランス人の医者の卵が、コロジヴァールの病院へ着くと、友人の写真を撮ると言って、マサコの高価な日本製カメラを借りて中へ入っていった。いつまでも出てこないので病院の中へ捜しにいくと、フランス人は煙のように消えていたそうだ。病院はそんな人物に心あたりはないという。

結局彼は、日本人をかもに選んだルーマニア人だったというわけである。あとから考えれば、オラデアの道に詳しかったり、自称フランス人の行動にはおかしなことばかりであった。日本人の夫たちはルーマニアの奇怪な雰囲気におされて、西側からきたという連れにまで気がまわらなかったといえる。久し振りでフランス語をぼそぼそしゃべっては嬉しがっていた私の責任が大いにあった。ルーマニアの義務教育では、先に述べたようにフランス語を習うので、私の生半可なフランス語の相手は十分につとまったのである。

我われの旅行にいろいろと助言をしてくれたあるルーマニアからの亡命作家は、自分が盗みでも働いたかのようにこのできごとを恥じた。ハンガリーで暮らしながらも、いまだに彼の真の故郷はトランシルヴァニアであり、独裁制は憎むが一般のルーマニア人を憎む

わけではない。ルーマニア人の泥棒のことを、良くも悪くもつきはなして考えられないのである。

マサコは「いいのよ。彼はあのカメラで何かすばらしい、今まで決してかなわなかったこともできたのじゃないかしら。家族が病気だとか、よくよくの事情があるのかもしれないわ。悪い人だという印象がないのだもの」と言った。

マサコに感謝の目をむけながら、亡命作家は「しかしね、ルーマニアで外国人にむこうから声をかけてくるなんて、まず用心しなくちゃいけない。悲しいことに外国人との関係だけではない。僕の妻は気心のしれた友人の家で話していたら、あとで警察に呼びだされ、こういうことをおまえは言っただろうと会話をそっくり再現された。これが今のルーマニアなのさ。十人に一人が警察の手先だといわれている。こんな状況になったのは最近のことなんだよ。チャウシェスクに何かが起こったのだろう。今度は僕が一緒にトランシルヴァニアへ行って、ルーマニアのすばらしさをしっかり案内するからね」と言った。

亡命作家の苦難

この亡命作家はトランシルヴァニアのハンガリー語大学を卒業していた。二十年前にはそれができた。しかし彼はその後、職を転々としなければならず、長いあいだ肉体労働も

経験した。作家としての活動は停止させられた。しかも学生時代に書いた小説は、彼が中年になってからルーマニア批判の隠喩がこめられているといいがかりをつけられ、警察の取調べを受けた身である。仕事が終わると警察に出頭しなければならない。夕食も与えられず午前三時まで取調べが続く。帰宅してまどろむと仕事に行き、仕事のあとはまた警察へ。これが三ヵ月も続けられたそうだ。

彼の娘はすばらしい秀才で、ハンガリー語と同じようにルーマニア語も母語としてできるし、全科目の優等生である。社会に有益な職業につきたいと、医者を志望している。しかし、ハンガリー語大学はすでに閉ざされ、医者になりたい彼女がルーマニアの大学に入学できるみこみはないという。我が家がハンガリーに着いてまもなくこの一家はルーマニアから移住してきたのだった。

ルーマニア政府にハンガリーへの移住許可を申請した彼らは、その時点で職を失った。友人の幾人かも以来、関わりを恐れて、彼ら一家との交際を絶った。不安な中で許可がおりるのを待ち、いよいよ出国という段階で、ハンガリーへ持っていく家財について下着の一枚一枚までリストを作らされ、許されたものだけを持ち出せた。住んでいた家や財産の大半を没収され、身のまわりの品と家具のいくつかを積んでハンガリーへきたのである。

ブダペストでの職探しや住居確保に、マリカがとびまわった。現在は、作家としての仕

事を続けられるようになった。作家は不安定な職業だし、彼の妻はきわめて有能な法律家であるため、能力にみあうとはいえないまでも法律関係の職場で彼女も働いている。彼らのハンガリー生活はなんとか軌道にのりはじめたところだ。

しかしこの作家夫妻には、それぞれに歳老いた両親がルーマニアにいる。作家夫妻がハンガリー国籍を取得すれば、入国ヴィザを申請してルーマニアに旅行することは可能である。ハンガリー国籍の人間の入国を、社会社義同胞国のルーマニアが拒否することはできない。実際、歳老いた両親の病気が心配で、亡命作家夫妻は難しい算段をしながらルーマニア旅行の費用を捻出している。合法的にルーマニアへ行くことはできるが、非合法の手段で闇から闇へと人を葬るルーマニア秘密警察があった。

もしかしたら帰ってこられないかもしれないと覚悟をしながら、彼らはできる限り両親と会うためにルーマニア国境を越えるのであった。一度は亡命作家が「息子危篤」の電報を打ってルーマニアから病気の父を呼び寄せ、ハンガリーの病院でみてもらった。両親をハンガリー本国へ招くために、また何か別な手を考えると言っている。

チャウシェスク政権がいつ終わりをむかえるか、たとえその時がきても、ルーマニアの体制が次にどのような形で続くか、誰にも予想はつかなかった。チャウシェスク一門の結束の固さは有名であった。亡命作家夫妻は両親をハンガリーに移住させたいと幾度も考え

たが、歳老いた両親は、生まれて育ち、人生のすべてを印した土地を離れる意志はない。彼らはハンガリー王国のトランシルヴァニアに生まれたハンガリー人であり、そこがルーマニア領となったからといって、自分の文化も故郷も捨てるわけにはいかないのだ。

T君は帰りの汽車で散々な目にあった。持ち物をすべて調べられ、身体検査で見つかった手紙を没収された。その手紙は、ルーマニアのハンガリー系住民から、ハンガリー本国へ渡った亡命家族に渡すようことづかったものである。T君と一緒にいたハンガリー人乗客も一晩じゅう、取り調べられたそうだ。それでも無事に帰ってこられてよかった。

独裁の裏表

ルーマニア旅行はこのような結果となった。少なくとも運んだ手紙や写真、食料は目的地に届き、そこからハンガリー系住民が手分けしてそれぞれの宛先へ配ってくれたことに我われもほっとしていた頃、またルーマニアから一人の婦人がブダペストへやってきた。彼女もハンガリー系で、有名な学者の妻だったが、数年前に離婚し、夫だった学者だけがブダペストへ亡命している。

この学者がルーマニア政府へ移住許可を申請した時、ルーマニア人の同僚が「ドイツ人、ユダヤ人は既に去った。君たちハンガリー系知識人も去るとしたら、ルーマニアの知的分

野はすっかり崩壊するではないか。行かないで欲しい」と訴えたそうだ。「気持ちを変えることはできなかったが、それでもルーマニア人にこう言われて、僕も胸にこみあげるものがあったなあ」とこの学者は言った。

ルーマニアは資源も豊富で海もあり、国土にはすばらしい可能性が宿されている。しかしドイツ系、ユダヤ系、ハンガリー系の知識人はもとより、ルーマニア系知識人に対しても独裁者は聞く耳をとざした。知識人は最も独裁の批判者となりやすい。チャウシェスク政権におもねる素人にすぎない自称専門家たちが、高層ビルの建設や、土木工事などあらゆる事業に采配をふるう状況となっていた。このため、巨費を投じながら十分な調査もせず建造したダムには水がさっぱりたまらなかったり、高層アパートのエレヴェーターが頻繁に止まって住民は空中に何時間もつりさげられ、恐怖から階段しか信用しない……こんな話がルーマニアの「社会主義の勝利と未来建設」には溢れている。

独裁を批判することは簡単だが、どんな体制にしろそれを支える基盤は必ず存在する。チャウシェスク大統領が、若き日に優れた外交路線で国内外の支持を集めたことは事実であった。しかし若き指導者はじきに民族の英雄となり、個人崇拝を集める独裁者となっていった。チャウシェスク夫妻がにこやかに演台に立ち、いつものように国民の歓呼で始まった日が国民の罵声で終わり、夫妻があっというまに処刑されたニュースを日本の方がた

はどう受け止められたであろうか。

我われは、チャウシェスク氏が最後までこの歴史的な日の意味を理解できずに落命したと思う。彼は既に国民から遠く離れたところにあり、国民の実情を正直に語る人材はそのまわりにいなかった。権力者に率直な提言をする人がおしのけられ、へつらう者だけが彼のまわりをとり囲んだとしたら、そこには独裁を支える社会基盤が存在したということである。

さて、亡命学者の妻だった婦人は、ブダペストに短期滞在許可がおり、別れた夫をはじめ、共通の友人である亡命作家夫妻やマリカ、亡命者サークルを訪ね、私の夫とも旧交を暖めた。

ある日、私の夫が駅で彼女と偶然すれ違い、ルーマニアへ帰るというのを見送った。数日後、亡命作家にこの話をすると作家夫妻の顔色が変わった。彼女は私の夫が見送った数日前にルーマニアへ帰国しているはずだという。ルーマニアからハンガリーへの出国許可をとるのはきわめて難しくなっており、ことに亡命した係累がブダペストにいるハンガリー系知識人が出国できたのは奇跡的なできごとだったそうだ。滞在許可が延長されるはずもないという。「彼女は亡命者たちの様子を探りに、ルーマニア政府の手先としてきたに違いない」と亡命作家は言った。状況をつきあわせてみたが、その疑いが濃厚だということ

になった。ルーマニアで生きるハンガリー系住民にも生きる手だてが必要である。子供を抱えた彼女がそうした立場を選んだとしても信じがたいことではなかった。

暗い話ばかりが続いてしまった。我が家は一年後にもう一度トランシルヴァニアの地を訪れるのだが、ここで少し息ぬきが必要であろう。エステル一家はどうなったか心配してくださっているかもしれない。エステル一家の話には、素敵なマサコさんが大活躍する。しかしこの一家とのいきさつこそ、ハンガリーでの最も苦痛に満ちた思い出となった。

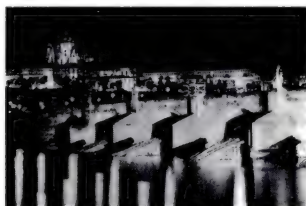
ここでしばらく気ばらしに、美しいブダペストの町へ散策にいくことにしよう。

7——美しき都ブダペスト、ウィーン、プラハ

プラハの夜景 一王宮とカレル橋

ハプスブルクの三都

ドナウ河をはさんで丘陵地帯のブダと平地のペストが対峙するさまは、自然の造化の不思議と魅力を余すところなく発揮している。本来、別個に発達したブダとペストが七本の橋で結ばれ、十九世紀後半にパリにならった都市計画をもとにブダペストは首都としての威容を整えた。十九世紀後半に生まれた首都というのはヨーロッパでは新しい町といえるが、ブダペストにはヨーロッパの良き時代を反映したみごとな建築が溢れている。

中世末にはオスマン・トルコがヨーロッパへ侵入し、ハンガリーの大部分がトルコに占拠されたし、それまでにもそれ以降にも首都はしばしば遷都していた。近世にはポジョニ

ユに首都が置かれたこともある。ポジョニュなんてどこにあるのだろうと首をかしげておられるかもしれない。ブラチスラヴァと言い換えれば、むろん聞いたことがおありだろう。チェコ・スロヴァキア共和国連邦のスロヴァキア共和国の首都がブラチスラヴァである。

九世紀末にアジアからハンガリー人がやってきて、スラヴ人の暮らしていた土地にくさびをうちこむ形で定住し、スロヴァキアは以降千年にわたってハンガリー王国の領土となった。だからブラチスラヴァはハンガリー王国のポジョニュでもあった。第一次世界大戦のオーストリア・ハンガリー二重王国の敗北により、スロヴァキアは千年ぶりで、スラヴの兄弟チェコ人とチェコスロヴァキア共和国をつくったわけだ。

トルコをヨーロッパから追い出すにあたって、ハプスブルク家という王朝のもとに中部ヨーロッパの国々は結束し、十六世紀から第一次世界大戦末までハンガリー、チェコ＝ボヘミア、ポーランドの一部、ユーゴスラヴィアの一部、イタリアの北部がウィーンを首都とするハプスブルク帝国の領土だったといったら、話はこんぐらかってしまうだろうか。

ハプスブルク家はまた、婚姻によって十五世紀にスペイン王位を得た。スペイン・ハプスブルク家は十六世紀にポルトガル王位をも兼ねて、その領土は海外植民地を含め「太陽の没することなき帝国」を実現したのであった。スペイン・ハプスブルク家は一七〇〇年に断絶したが、オーストリア・ハプスブルク家は一九一八年末まで、ヨーロッパの最も由

緒ある王家として中欧に君臨したのである。
フランスのブルボン王家とか、ロシアのロマノフ王朝とか、貴族の華やかな文化が彷彿とする王家を思い浮かべていただきたい。オーストリア・ハプスブルク家こそはヨーロッパの十一民族をしたがえた大王朝であり、優雅な貴族文化は帝都ウィーンに溢れていた。ハプスブルク帝国の版図であるボヘミアの首都プラハやハンガリーの首都ブダペストなどにも、ハプスブルク貴族の世界があった。
実際に、ウィーンから車で面倒な国境の手続きさえなければ、三時間ほどでプラハやブダペストに着き、これらゲルマン、スラヴ、マジャール(ハンガリー)の三都があまりにも近い存在であることを実感するのである。ブラチスラヴァ、ウィーン間は車で一時間とかからない。しかし鉄のカーテンがおりてから、この隣りあった都どうしの生活はたいそう異なったものとなった。

三都三様

現在は永世中立国となったオーストリアの首都ウィーンは、ヨーロッパで最も物価が高い都市の一つである。ハプスブルク帝国の帝都たる威容を物語る建築に、有名な世紀末ウィーンの建築も加わって、街並みはよく保存されている。その古風な街にも西側企業の広

告が溢れ、高級車が走る。ウィーン子が誇りとする歴史的な街には西側の高い生活水準がゆきわたっている。アラブ世界やアジア圏からの出稼ぎ労働者の姿も多い。そしてウィーンの街角で時おり、頭の先から足の先までオートクチュールの華麗なファッションに身をつつんだ婦人とすれ違う。手袋や帽子、傘にいたるまで完璧に入念な装いは、金満日本でもみかけぬ豪華絢爛である。また夜のウィーンはオペラ座や劇場に、タキシードやイヴニングドレスの姿が花ひらく世界である。

いっぽうプラハは、十三世紀からの建築が街を飾り、二度の大戦でも爆撃を受けなかったため、街全体がヨーロッパ建築の博物館といわれる美しさである。プラハの街を走るさえない電車や、日本では二十年前に流行だったような東欧圏の車、ハンガリーから輸入するバス、人びとの服装などでここが鉄のカーテンの内側だと気づくものの、プラハの歴史の重みと美しさはヨーロッパ諸都市の中でも最高度に完成されたものである。

チェコスロヴァキアは二つの世界大戦の間、優れた工業国であり、有名なボヘミア・グラスやピルゼン・ビール、砂糖に限らず、繊維製品、シュコダの自動車と武器、バチャの靴などを世界じゅうに輸出していた。社会主義圏でも、東ドイツと並んで最も生活水準の高い国がチェコスロヴァキアであった。しかしウィーンの華麗さは、プラハの日常生活に留められてはいない。

プラハの丘にそびえる王宮は夏の夜に照明され、夜空に幻想的に浮かびあがる。丘の下を流れるブルタヴァ河にかかる有名なカレル橋もぼうっと川面に浮かびあがって、暗い水面には白鳥が静かに泳いでいく。スラヴ舞曲の哀愁に満ちたメロディーが自然と心にわいてくるたたずまいである。

ブダペストの夏の夜もまた観光客で溢れる。ブダの丘にある王宮や教会は明々と照明され、闇の中に夢のような王都が出現する。王宮の下のドナウ河にかかる鎖橋の欄干には無数の電球がともされ、光の橋と化す。あちこちでジプシーが観光客にかなでるメロディーには、ハンガリー舞曲風の躍動的なリズムが息づいている。

〝優等生〟チェコスロヴァキア

明るくきらびやかなブダペストの夏の夜景は、憂いを帯びしっとりとしたプラハの夜景となんと違っていることだろう。チェコスロヴァキアは東欧の改革において、ハンガリーやポーランドよりはるかに遅れをとった。ハンガリーやポーランドは改革のゆくえが定まらないうちから、社会主義とソ連の束縛から身をふりほどこうと、活発な動きを始めていた。チェコスロヴァキアは東欧の地震にゆさぶられながらも、我が家が滞在していた頃に社会主義の堅持を改めてかかげ、旅行者の耳には改革の胎動を聞くことができなかった。

ハンガリー人やポーランド人は、ハプスブルクというドイツ人の王朝に対しても、幾度も反抗を試み、失敗の連続の中で英雄が続々と生まれてきた。チェコスロヴァキアという国は、一九一八年までヨーロッパの地図には存在しない。スロヴァキア人はハンガリー人の領主や上・中流階級のもと、山岳や農地で農耕にいそしんでいた。チェコ人は聖ヴァーツラフの王冠の地ボヘミア、モラヴィア、シレジアをあわせたチェコ地方がハプスブルク帝国内で自治をとり戻すことを願い、活発な言論活動を展開していたが、ハンガリー人やポーランド人のように独立運動で繰り返し血を流したわけではなかった。

第一次世界大戦後、スロヴァキアをめぐって取った、取られたと仲の悪かったチェコスロヴァキア、ハンガリー両国であるが、第二次世界大戦後は、社会主義のもとに一つの東欧ブロックに共存することとなった。チェコ、ポーランド間にも領土問題があった。ポーランドに始まり、一九五六年にハンガリー動乱として流血の収拾をみたソ連への反抗にも、チェコスロヴァキアは社会主義の優等生ぶりを発揮した。プラハの春でチェコスロヴァキアに改革が起きたのは、それから十年以上ものちのことである。

ポーランド人やハンガリー人はチェコ人に対して、いつもおとなしく周囲をうかがっていて、結果のおいしいところだけをさらっていく、ずる賢い、嫌な奴だというイメージをどこかで抱いている。

私はチェコスロヴァキアが専門だし、ハヴェル大統領やビロード革命を尊重している。ポーランド人やハンガリー人が流血を辞さない熱血主義に燃えるなかで、チェコスロヴァキアが冷静かつ沈着に東欧改革の列に加わり、しかも東欧圏の中では、今後の成果が最も期待される歩みを続けていることに、ほっとしたりもしているのだ。

それにしても、夏の夜のプラハとブダペストのたたずまいの違いはおもしろい印象であった。今世紀初めの、つまりハプスブルク帝国がまだ健在だった頃のプラハとブダペストの写真を見ると、この二つの都市が、現在とまったく同じように照明されていたことが分かる。二都のたたずまいには、二つの民族性の違いが反映されているような気がする。

ただ一つ付け加えなければならないのは、プラハがまったく爆撃をうけなかったのに対して、ブダペストは第二次世界大戦末にソ連軍とドイツ軍の戦場となり、ドナウ河にかかる多くの橋がことごとく撤退するドイツ軍によって爆破され、王宮も七割が空爆で破壊されたことである。現在のブダペストの街並みからその破壊のひどさを知ることはできない。ハンガリー人はがれきの中からレンガを積み、この街をこつこつと修復した。「ドナウの女王」といわれる美しいブダペストはハンガリー人全体の誇りである。

ブダペストも一歩内側に入ると、老朽化し、朽ち果てた古い建物が並ぶ。現在、それを懸命に修復している。一九五六年のハンガリー動乱でソ連の戦車に再び荒らされたこの街は、銃撃戦の跡などを意識的に保存し、残してある。いずれこの銃弾の跡には、当時のことを体験したハンガリー人がいなくなったのちも、この場所の意味を後世に伝えるために、説明板がとりつけられるに違いない。

我われがハンガリーを去る直前に、ブダペストのラジオ局へ行った。改革によって局の壁には動乱の犠牲者たちの名を刻んだ真新しい大理石の板がはめこまれたばかりで、おびただしい花輪と国旗が飾られていた。ハンガリー動乱の時に、ここから国外に向けて救援を求める放送が流され続けたのである。

ハンガリー人は共産党時代に歴史的建造物の修復を怠ったせいで、ハンガリーの各都市がすさんだ姿になりはてたと怒る。国庫がからっぽで外国に巨大な借金を抱えた今日も、ハンガリー人は歴史的建造物の修復に執念をもやす。

ルーマニア旅行で述べたが、一見すると、トランシルヴァニア諸都市の方が美しく見える。故チャウシェスク氏は美しい建物を愛した。彼はチャウシェスク宮殿といわれる豪華な建物を造営したが、完成を前に政権が崩壊し、処刑されたのである。チャウシェスク氏

が視察するルーマニアの町や農村の外観は、大急ぎで見栄えを整えたのであった。
これに比べ、ハンガリー人の修復作業はなんと念入りなことか。歴史的建造物の保存と修理には事前に精密な調査が必要であり、外壁を塗るだけでなく、今後数百年先まで建物を保存するための技術と資金も必要なのだ。
ある時、日本から二組のお客様がブダペストを訪れた。一方の夫妻は、有名なブダペストの文人カフェで絢爛豪華な前世紀の装飾に囲まれてお茶を飲みながらも、このカフェでうかつなことを言ったら、社会主義の監視の目に見とがめられはしまいかといたく心配される。夫が今のハンガリーでは何を言っても心配することなどありませんと力説し、観光客が日本語で話す内容になど誰も気をとめるいわれはないことを懸命に説明したのだが、共産圏にいる不安がぬぐえないらしい。ブダペストに一軒だけある日本料理店は、日本人の板前さんがやめて、ろくな日本食は出さないのだが、どうしてもということでブダペスト観光後に日本料理店へ入って、やっと夫妻はくつろがれたようであった。夫妻はブダペストで見るもの、触れるもののすべてが、みすぼらしく恐ろしく感じられるようなので、我われもガイド失格の思いを味わっていた。
翌日もうひとかたの客人を加えた夕食で、新しい客人は教会や城と旧市内を歩いてみたが、この都に残る文化遺産の華麗さはなんと驚嘆すべきか、日本が安易に破壊してしまっ

た歴史的建造物がブダペストではなんと見事に保存されていることかと熱をこめて語られた。
「この街の美しさだけは、どんなに日本がお金をつんでも、二度と手にできない歴史の重みを後世に伝える財産ですねえ」という言葉が、我われの心にも深く響いた。
同じ時に同じ場所を訪れても、見る人の目はその人なりの関心でその土地を理解する。先の夫妻の印象が誤りだと決めつけることはできない。ハンガリー人と話せなければ、今のハンガリーでは何でも言えるという状況がつかめないであろうし、歴史を知らなければ、ハンガリー人がどんなに抑圧されても黙った時などないと分かるすべもないであろう。
とはいえ、貧しげな社会主義の生活と言い切るには、町ゆくブダペスト子のおしゃれで粋な服装とか夜のオペラ座、劇場の華やぎなどは、意識しなくても目にとびこんでくるはずだ。ウィーンに留学中のマサコはブダペストへくるたびに、この街には活気があるのね、若い人はおしゃれね、ウィーンの華麗さは老人のものという気がするわと、いつも言っている。
ブダペストの若者は気にいった服装をするために、自分でドレスを作ったり、西側製衣類を売る店でふんぱつしたり、安い物でもカジュアルに着こなしてみせる。ある日本の真面目な留学生が、ハンガリーの若者は着飾ってばかりいて軽薄だと酷評したほどである。

しかし、ポーランドから日本の友人がきた時、ワルシャワ子のおしゃれのセンスは、ブダペストをまたはるかにしのぐのだと教えてくれた。

パリに憧れ続けたポーランド娘の着道楽、王国時代のブダペストの衣装くらべの伝統と雰囲気は今も生きている。

伝統と可能性

四十年の社会主義の歴史と千年余りの王国の歴史と、どちらが人びとの生活に根をはっているだろうか。どんなに体制や社会の変化が急激でも、繰り返し生活の底からよみがえり、わきあがってくる伝統文化の力を信じられないほど、我われ日本の変貌ぶりの方がめまぐるしいと言うべきなのであろうか。日本にきた欧米人は、なぜ日本の古い美しさを残しておかないの、城下町などとてもすばらしいのにと残念がる。近代化には外圧もかかっていたし、空襲や敗戦の混乱もあったし、それでも日常生活に日本の伝統がさまざまに生きてはいると言ってみても、私の中には寂しさが残る。消えていった歴史の街の美しさだけは、もうとり戻すすべがないのだから。

また日本へ帰って、日本は世界一豊かになったでしょう、もうどこへいっても、日本ほどいい国はないですよという意見を聞くたびに、住宅事情の悪さや、単身赴任の増大、家

庭生活を犠牲にせざるをえない日本の労働状況などを見て、本当にこれで豊かかしらと私は首をかしげる。父親とゆったり旅行をした思い出のない子供たち、過労死に脅かされる熟年労働者など、日本の人間の権利は真剣に考えねばならない問題で溢れている。もし経済大国という言葉にのっかって、自分たちの姿を幻想でくるんでしまったら、これは不幸なことというべきではないだろうか。

同時に、日本を卑下することにも私は反対である。ヨーロッパの豊かさが植民地や非ヨーロッパ世界からの富の流入によって築かれたこと、美しい街並みを整えるのにヨーロッパが幾世紀もかけたことを忘れてはならない。人権や、福祉や、労働条件の整備といったヨーロッパが先に始めたことを、日本も取り組んでいる。あとからきた者には先に習いつついっそうすぐれた機構や制度を生み出す可能性すら秘められている。日本の躍進の原因にはこのあとからきた者の創意工夫や、日本なりの律儀な努力があったのではないか。私は現在の日本人が慢心におちいらなければ、将来によりよい社会を築く才能を持っていると信じるし、そうしなければならないと自分の宿題にもしている。

働きすぎの日本人という番組がハンガリーのテレビで放送され、豊かな日本のイメージがすっかり狂ってしまったとハンガリー人から言われたことがある。日本人に東欧のことを話すと、社会主義圏に貧しさと後進的なイメージを強く抱いていることに気づくが、東

欧各国の生活水準は多様で、一括して語ることはできない。また社会主義が機能していた時の方が労働条件や福祉厚生面については充実していたのであり、日本より優れた制度の国もあった。今後の東欧の動向を見るうえでも、こうした事実に留意する必要がある。

ユーゴスラヴィア大使館のラディチ氏は、日本の大使館員は休日でも仕事に駆けまわっているね、社交の中で外交官が得がたい情報をつかむことが多いのは常識だが、日本大使館は本国の時間にふりまわされているようで妙だと思うよ、と言った。

西欧は人権や言論の自由などで東欧を批判はするものの、東欧にもいわばヨーロッパの生活時間は根づいている。週休二日制や一ヵ月の夏休みをとることなど、インフレがおしよせるまで東欧でもあたりまえのことであった。現在の東欧では副業や兼業が増え、これもままならなくなってはきているが。

ともかくも、ハンガリー人が世代を越えて残さねばならぬと信ずる歴史的な街並みは、今も健在である。これからそれを探訪しにいくこととしよう。

8——ブダの丘とハンガリー料理

ドナウ河をはさんで手前がブダ　対岸はペスト

ブダの丘とペスト側からの絶景

ブダペストを訪れる人はみな、まずブダの丘に登り、ハプスブルク皇帝の居城であった王宮と、それに連なる歴史的な家並みが続く石畳の道を散策し、マーチャーシュ教会と漁夫の砦からドナウ河をはさんだペスト側をみおろす。ここからは、対岸に華麗な国会議事堂がのぞまれ、教会の尖塔が林立するペストの眺望がひらける。

このうるわしいたたずまいに不協和音をかもしだしているのが、ペスト河岸に並ぶ、外資系の近代的なホテル群である。かつてはここにも街としっくり調和するたたずまいのホテルが並んでいた。ではなぜ外資系ホテルの近代建築群がこの一角を占めてしまったかと

いうと、ここペスト河岸からの対岸ブダの丘の眺めこそが、まことにヨーロッパでも極めつきの美しさだからである。今は図書館や博物館として利用され、市民に開放されている王宮をはじめ、先ほどのマーチャーシュ教会や古文書館など、王国時代の建造物が丘の緑にそびえている。起伏を生かしてドナウ河の両岸を舞台とするブダペストの景観は、平たいウィーンよりはるかに劇的な効果をかもしだす。

このブダの丘には、外資系のハンガリーで最高級のヒルトンホテルが建っている。ヒルトンは初め現代的な高層ホテルとなる予定だったが、ハンガリー人の強い反対にあい、幾度も図面をひき直して、丘の景観と調和する館風の建築となった。ここには本来、修道院の廃墟があったが、その一部がヒルトンの中に保存されている。ヒルトンの窓は鏡のように周囲を映す特殊ガラスとなっており、高い吹き抜けの全面もこのガラスでおおわれて横のマーチャーシュ教会や漁夫の砦を映しだす。自らの建築美を際立たせるのをやめ、周囲の歴史的景観をひきたてることで、ヒルトンはヨーロッパの現代ホテルのあり方に一つの優れた模範を提示した。丘にホテルが建ったのはいやだが、修道院の廃墟まで保存し景観を最大限にいかす工夫がこらされたことで、ハンガリー人はヒルトンの存在を許容している。これに比べ、ペスト側の近代ホテルの醜さはなんだ、あの一角はブダペストの恥だと外国人の無礼に怒っている。

だが今日のハンガリーは観光立国をめざし、外資系のホテルがきてくれることを歓迎している。現代ホテルに必要な電化設備が古いハンガリーのホテルには備わっていない。由緒あるホテルアストリアやホテルロイヤルなどは、駐車場がない、プールがない、等々の理由で等級を表す星の数をしだいに減らされてしまった。目下、改装と生き残りに必死である。アストリアはどうせ新しい設備では外資系にかなわないのだからと、思いきり復古調で統一し、これまた風格のあるみごとなよみがえりを果たしている。

ホテルですら国内電話は不便である。むろんこれは、ホテル自体の責任ではない。ハンガリーは電話に関して、かなり立ち遅れている。一本の電話線をいくつもの家が共有するため、知人にかけてもなかなかつながらない。話し中の発信音が聞こえて誰かと喋っているのかと思ったら、別な家が電話を使っていただけだということも多い。ユーゴスラヴィアのラディチ氏が腹をたてたり笑ったりするありさまである。

もっとも北と南の貧富の差が激しいユーゴスラヴィアでは、国全体で比べると電話の普及率はハンガリーに劣る。東欧圏の電話普及率は、チェコスロヴァキアを筆頭に旧東ドイツ、ブルガリア、ハンガリー、ユーゴスラヴィア、ポーランド、アルバニア、ルーマニアの順になる。ただし都市と地方の差や地域格差がはなはだしいから、この順位がそのまま東欧各国における電話事情の実感を反映するわけではないのだろう。

ハンガリーでは電話のない家もまだ多く、近所に電話を借りにいく人もいる。こうした状況は、日本の年配の方なら懐かしく思い出されることだろう。ブダペスト十一区の我が家にも電話がない。夫が急用で友人に計画変更の電報を打ったり、車で電話がない友人の家へ伝言を残しに駆け巡るのを見て、つくづく電話のない不便さを知った。ハンガリー人は一般に律儀であり、よほどの事情がなければ約束をすっぽかしたりしない。我が家の戸口にも、しばしば伝言の紙がピンでとめてあるのを帰宅して見つけたものだ。新しく電話をひくのに、三年以上待たされる。

楽しい歴史的街並み

ブダの丘のてっぺんを通る石畳の道の両側には、少なくとも十六世紀にさかのぼる二、三階建ての低い建築が並ぶ。壁のところどころには、現在の建物の前にそこにあった建築の一部を上手に残してみせてあったりする。歴史の重みを巧みに感じさせる工夫である。現在の街並みの中に、幾世紀も幾時代も昔の街が顔をのぞかせているようで、これはほんとうに楽しい眺めだ。道の両方の出入口は車の進入を禁止し、車両が許可なくこの歴史的な保存地区を通れないようにもしてある。かつてこの道沿いの家々には、王様の使用人たちの姿があった。王宮からの使者が馬をつないで休んだ場所が、家の門口に今も保存され

ている。ドイツ語がこの区域の主な言葉であった。建築にもドイツ様式が多い。
　それに比べ、ハンガリー民族精神の象徴というべきマーチャーシュ王の名にちなむマーチャーシュ教会の内側は、ハンガリー民族の色彩を使った伝統的文様がびっしりと描かれている。キリスト教を受け入れることでヨーロッパの仲間入りを果たしたハンガリー人が、国王の戴冠式などを行う最高位の教会の内側をしっかりとアジア起源のハンガリー文様で飾りたてたのである。マーチャーシュ教会はトルコ占領時代にイスラム寺院として使われた。だからマーチャーシュ教会の内装にはイスラム・トルコでもなく、純粋なヨーロッパでもないというハンガリーの複雑な民族意識がこめられているのであろう。ブダペストにはヴィガドーという劇場など、他にもアジア風ハンガリー文様で飾った建築がある。
「我われはアジアの血と文化を忘れはしない」とハンガリー人は言う。だが彼らのいうアジアとは、ウラル地方の、どこだか今でははっきりしないハンガリー人の原住地であり、遊牧民の世界だったから、日本人にも親しみがあるでしょうと言われても首をふるしかない。極東の農耕民日本人の末裔には馴染みのない色と文様の世界である。正倉院でも訪ねれば、日本に到来したシルクロード遺物の中に近しいものが見つかるのかもしれないが。
　私は王宮にあるセーチェーニ図書館に通っていた。セーチェーニとはハンガリーの大貴族の家名で、政治上の人材も輩出し、ハンガリー文化への啓蒙的な貢献でも有名な一族で

ある。ドイツ文化に侵食されつつあったハンガリー文化を高揚させることに尽くし、近代的な国語としてのハンガリー語再建にも功績があった。ブダの丘とペストを結ぶブダペストで最も美しい古橋も「セーチェーニ鎖橋」と呼ばれる。
ハンガリー人はこの国の文化に尽力したセーチェーニ一族への感謝を忘れない。社会主義政権下でも民族の誇る文化功労者として、多くの貴族とは違ってセーチェーニの名が抹消されることはなかった。
セーチェーニ図書館では外国人も簡単に入館証を作ってもらえ、よく整備された館内で自由に本を閲覧することができる。私の入館証は一般用の緑色で、社会主義批判の類の本を貸し出してもらうことはできなかった。夫の入館証は専門研究者用のピンク色で、これを見せれば、まずどんな本でも見せてもらえる。私ひとりでハンガリーに行ったとしても、知りあいの研究者に頼めば、閲覧不許可の図書は読める。社会主義の制約の中でも、便宜や抜け道が作ってある。図書目録カードに赤字で書かれた「閲覧不許可」の文字は、改革が進む中で次々に消されていった。
図書館の中は、空襲で壊された王宮の家具調度はもう残っていないが、大理石で飾り、絨毯をしき、銅張りの扉をもつコンサート・ホールを備え、ソファは革ばりである。これを社会主義による公共施設の充実とみるべきであろうか。それとも、一度造ったら先の世

代に引き継がれ、歴史の評価に耐えうるものであらねばならぬという、建造物への身にしみた理念の表現とみるべきであろうか。

この図書館で不便なのは、コピー機が古くて故障ばかりしていることだ。コピー係のおばさんは日本製の古いコピー機をいつもなだめつすかしつ動かしている。せっかくコピーできても不鮮明だったり、字が粉のようになって消えてしまったりする。

ハンガリーの図書館、大学、研究所などに中古でいいからコピー機を寄贈する日本人は現れないだろうか。こういうことが、日本への信頼と友好を生む最も着実で確実な方法のひとつである。

我が家がハンガリーに出発する前に、対ココム規制とかで、アメリカからの苦情もあって、日本の先端技術機械をソ連・東欧圏に輸出することを日本政府が禁止した。チャバ君の奥さんも日本の研究機関から申し出があった日本への再留学を、この時期に日本側から取り消され、理解に苦しむと言っていた。

日本がこのようにぎこちないことをしている間にも、隣のウィーンや西ドイツからはアメリカ製、西ドイツ製のコンピューターや先端機械がハンガリーにどんどん流れこみ、ブダペストの真ん中にアメリカの電気製品ショップが堂々と店を開いて、ハンガリー人の人気を集めたのである。日本の外交技術というのはいったいどうなっているのか、我が家で

も首をかしげたものであった。

食いしんぼうのハンガリー人

ある日、ブダの丘の下からセーチェーニ図書館がある王宮へ運んでくれるエレヴェーターの中で、外国人とエレヴェーター係のおじさんがもめている。図書館の利用者はエレヴェーターが無料だが、王宮見物にいく観光客は五フォリント、日本の感覚でいえば五十円ほどを払うのだ。外国の二人づれは、おじさんが使用料を払ってくれと説明しても、何を言っているか分からず、英語で必死に聞き返す。年配のハンガリー人にはドイツ語なら分かる人もいるが、英語はまず通じない。

みかねた私が使用料のことを説明すると、ついでに丘の上の有名なハンガリー料理レストランを知っているかと、外国人が聞く。エレヴェーター係のおじさんに相談すると、丘の上のレストランになんか行くものじゃない、本物のうまくて安いハンガリー料理店を教えてあげると言う。外国人のカップルにそれを伝え、こういう情報をハンガリー人から教えてもらえるのはまったくの幸運で、その店はすばらしいに決まっているからぜひ行ってごらんなさいと私も勧めた。でも有名な丘が見たいとためらうカップルに、丘の上のレストランなんてやめろやめろと、私とおじさんは熱をこめて説得し、それならという気にな

った二人は、エレヴェーターでそのまま下へおりていった。往復、一人十フォリントのエレヴェーター料を払いながら。

あとで私は、少なくとも丘を見物させてから下のハンガリー料理店へおろしてあげればよかったと、申し訳ない気分にとりつかれた。王宮を見物し、ドナウ河畔におりる登山電車に乗るのも楽しい。この登山電車はハプスブルク皇帝フランツ・ヨーゼフ一世が作らせたもので、ブダペストには産業革命に拍車をかけられた、ハンガリー人の発明狂を証明するおもしろい機械じかけがたくさん残っている。外国のカップルに悪いことをしたが、丘の上のレストランをあきらめさせたのは間違いではなかったろうと気をとり直した。

丘には有名なハンガリー料理の一級レストランがたくさんある。観光シーズンに、このレストランの一つで、いつもは豊富にあるメニューがどれもこれもありませんと言われた。大丈夫がこんなことは初めてだよとウェイターに文句を言うと、彼はウィンクしながら観光客で忙しいから二、三種類の料理だけ大量に用意してしのいでいるんです、観光客がいなくなってからきた方がいいですよ、と教えてくれた。

ハンガリーのレストランは、一級から三級までの等級がつけられている。最高級はヒルトンなど外資系ホテルのレストランで、普通のハンガリー人は行かない世界である。以前は政治家や西側の要人が利用する外資系の最高級ホテルに、一般のハンガリー人は自由に

出入りできなかった。ある種のハンガリー女性が仕事場としてここを利用していたそうではあるが。一級レストランの多くも、現在は西側の観光客で溢れている。十年ぶりのハンガリーで、夫はこの光景に驚いた。十年前ならハンガリー人がふんぱつして、家族や友人たちと食事を一級レストランで楽しむ姿がたくさんみられたそうである。

一級の認定は味はむろんだが店内の装飾や食器、音楽等のサーヴィスでも決まる。だから一級が必ずしも二級、三級よりおいしいわけではない。二級だったレストランが室内装飾を修復して一級に昇格したり、観光客で混み合う先ほどの一級レストランのようにシーズン中、手をぬいたりもするからだ。最近はハンガリー人も使える三級の値段で三級レストランの認可をとり、味はハンガリー人が一級のおりがみをつけるナーンチ・ネーニといった店がちらほらでてきている。ナーンチ・ネーニは農家を改装したかわいらしいレストランである。一級レストランにはむろん良い店が多いが、調理場の熱気が食卓にまで漂ってきて、ウエイトレスが馴染みのお客に「今日はこれがお薦め」と声をかける二級、三級のレストランにもすばらしい店がある。それでもインフレに苦しむハンガリー人の姿は、レストランにめっきりみられなくなった。何級にしろ、料理の熱さは給仕のその日の気分しだいである。

一級レストランでさえ、給仕がのんびりと冷めたスープを運んできたりして、熱い料理

を味わうこともままならない。「味も一定しないし、ほんとに社会主義はハンガリー料理までだめにした」と知人たちは怒る。

ハンガリー人は実に食いしんぼうだ。一日の一人あたり肉の消費量は三百グラムという。子供や老人は食が細いから、成人男子なら四百グラムは軽く肉料理を平らげるのではないかと思う。朝はパンとコーヒーくらい。夜もパンとソーセージ程度の簡単なものですませるからには、昼食に三百グラムを一挙にかたづけるのである。香辛料のパプリカを使った赤い色のあざやかなハンガリー料理はヨーロッパでも有名である。豚の脂でパプリカと肉を長時間煮込んだ料理が多く、塩のきついこってりした古いヨーロッパの味覚の一つだ。

最近は健康に留意して豚の脂をやめ、サラダ油を使おうとする動きが若い世代にあるが、中年のハンガリー人はサラダ油はにおいが嫌だ、本物のこくがないと断固これを拒否する。確かに、中年以上のハンガリー人にはでっぷりと太った人が多い。日本では普通サイズの服がまにあわない私や夫も、ハンガリーでは肩身の狭い思いをふりすてられる。ハンガリーには成人病も多い。豚の脂をこってり使った料理が冷えて運ばれてきたりしたら、レストランから足が遠のくのも無理ないところである。

一日の主な食事は伝統的に昼食だが、現代の社会生活では昼食を家に帰ってとることはまずないし、女性も対等に働くこの国では、大人から子供まで平日の昼食を職場付近のレ

ストランや学校給食でとる。これもハンガリー料理衰退の原因となっている。腕自慢の友人が食事に我われを招いてくれて、手料理をほめると「私のおばあさんはもっと料理上手だった」と決まって言われる。だから本物のハンガリー料理を味わう方法は、料理ずきで元気なおばあさんのいる友人を獲得することである。それがかなわぬなら、ハンガリー人で混みあう安いレストランを探すといい。

丘の上にも、ハンガリー人で溢れる三級のセルフサーヴィス・レストランがある。ここの料理は量も多く、味も一級レストランとさして変わらない。自分で料理をとるカフェ・テリア方式で、食器はそっけない白陶器とアルマイトのナイフ、フォーク、スプーンである。テーブルクロスもないが、高いお金を出して冷めた料理を音楽にのって呑み込むよりましであろう。ハンガリーじゅうにこのようなセルフサーヴィス・レストランがあって、企業から助成をもらって定食を安く提供する。セルフサーヴィス・レストランの難点は、地域によってはちょっとうらぶれた感じの店も多いこと、また、働いているおばさんの中に、客をどなりつける乱暴者がいる恐れのあることだ。

9——年金生活者たちの暮らし

公設市場

チョコロン

私の夫は十年前の独身留学生時代に、あるハンガリーの未亡人の家に下宿した。この老婦人はハンガリーの家庭料理を作って毎日、御馳走してくださったのだという。食費はおいくらですかと夫がたずねると、あなたは私の日本人の息子よ、と婦人はお金を受け取らなかったそうだ。年金をもらっているから、生活には困りませんよと言いながら。

料理ばかりでなく、旧知識人であるこの婦人から、夫は正しく美しいハンガリー語をも習ったのである。身分社会だったハンガリーの言葉には、より正しい言い方、より美しく上品な言い方というものがたくさんある。

夫が息子のタカシに一番最初に教えたのが「チョコロン」であった。この言葉は、あなたのお手に接吻いたしますという意味で、王国時代の紳士の作法の名残りである。成人男子が御婦人がたに使うと丁寧な響きとなるし、子供は男の子でも女の子でも大人に対して使える。お手に接吻しますの意味である以上、女性から男性には使わない。また私のような中年の女性が、高齢の女性に使うことは不可能ではないが、それでもあなたより私は若いのよといわんばかりの状況になるので、女性はとにかく使わない方がいいそうだ。

タカシがチョコロンひとことで、どれほど多くのハンガリー人から微笑みをもらったことか。語学校の教科書にはこの身分社会の言葉は現れないが、普通のこんにちは、さようならではなくチョコロンと使っただけで、躾の良い、良家の子供だとみなしてもらえる。しかしポーランドに留学中の友人がブダペストにきた時、ハンガリー人はチョコロンと言うだけだけれど、ポーランド紳士は今もきちんと女性の手に接吻するのだと教えてくれた。

ハンガリー歴史界の重鎮ニーデルハウゼル博士は六十歳をややすぎた方だが、文字どおりのチョコロンをなさる数少ないハンガリー紳士である。ニーデルハウゼル博士はまた、愛弟子がタバコの包みをびりびり破ったりすると、それは紳士のやり方ではないとポケットから専用の小型ナイフをとりだして、正しいタバコの開け方をみごとに実演なさる。歴史学者の博士自身が、失われた紳士階級のたしなみを伝える生きた歴史なのである。

私自身は時おり、若いハンガリー女性からチョコロンと言われてとまどった。これは現在のハンガリー語が乱れに乱れ、なんとか丁寧な言い方をしたいものだという機運がもりあがっている中で、丁寧語を知らない若者が、こうした間違った言い方で私に尊重している気持ちを伝えようとしたのだと、旧ハンガリー知識人が説明してくれた。

社会主義のおかげで料理も言葉づかいもめちゃくちゃだ、というおきまりの結論がハンガリー人の口からとびだすわけであるが、日本だって、グルメ・ブームの一方で手づくりの家庭料理はなかなか安直な状況においこんでいるし、言葉づかいに関しては、ハンガリー人に自慢できるほど我われの混乱ぶりもめざましいのではないだろうか。

外来語の混入

丁寧な言い回しはどの言語にもある。言葉づかいは学校教育で教えるのは難しく、やはり家庭の中で身につく部分の方が圧倒的に多い。しかも身分だとか上下のしきたりといった社会そのものが変動する中で、言葉もまた生きて変化しつづける。

経済で世界をリードする日本が、なぜ日本語をカタカナ外来語に侵食されているのですか、とある知日派のハンガリー人に尋ねられた。いま使ったグルメ・ブームとかリードというような言葉を、現在の日本語がむしろ積極的に呑み込んでいくことへの疑問である。

日本語におけるカタカナ言葉の氾濫には、さまざまな原因があげられる。ここで一つだけとりあげるなら、外来語が混入する原因として、その外来語の発祥国の文化が非常に魅力を持っている場合が考えられる。現在のハンガリーでも、英語の「ヘロー」「シュトップ」「シューペル」「ドッラール」「ハンブルゲル」「マクドゥネルドゥ」などが盛んに使われる。ブダペストにいるアメリカ人留学生たちは、これを聞くと、笑えてしょうがないらしい。ちなみにこれを日本製カタカナ言葉になおすと「ハロー」「ストップ」「スーパー」「ドル」「ハンバーガー」「マクドナルド」であって、アメリカ人にとっては、これだっておかしいことに変わりはないのである。

ハンガリー人のアメリカ文化への憧れはものすごい。英語がハンガリー語にまじりこむことは当分つづくであろう。

ところでハンガリー人の知っている日本語といったら、ショーグン、サムライ、ゲイシャ、ハラキリ、カミカゼ、ヒロシマ、それにソニー、シャニヨー、ミチュビチ、ヤマハ、ニッシャンやトシバなどである。夫の解説によると、ハンガリーの郵便番号自動読み取り機に東芝の機械が導入されて以来、ハンガリー人にとってトシバは郵便番号を連想するものとなっているそうだ。ハンガリー人は日本にも大変な親近感を抱いているが、今後、ハンガリー語にどのような日本語が浸透していくのであろうか。

年金生活者を圧迫するインフレ

夫の大恩人である下宿の未亡人は、我われがハンガリーを訪れる前に亡くなっていた。これは我が家にとって最も残念なことであった。しかし現在のハンガリーの経済的な混乱に巻き込まれることなく亡くなられたのは、この婦人の思い出にそえるせめてもの慰めである。

インフレで一番困っているのが、年金生活者である。十年前のハンガリー人は、年金生活に入ったら、自分の好きなことにうちこめると、誰もかれも定年を待ち望んでいたという。定年までにハンガリー人はまず家を持ち、できれば別荘も持ち、さらにがんばれば車が持てた。年金は住まいのある老人になら十分な額で、夫婦で旅行したり、孫に何かと贈り物もできた。しかしこの十年間で、年金の額は凍結されたまま、物価は三倍になったといわれる。そこへ改革によって、国も生活物資の国庫補助を次々と打ち切りはじめた。自由の名のもとに、価格競争も始まった。日本で考える価格競争との違いは、物がしだいに勝手な値段で高く高くつりあがっていくのである。

ハンガリーに着いたばかりの頃、夫はどの店で買っても値段は同じだと言った。生活物資の多くはそうだったが、手工品や工場製の民芸品などは、店によってすでに値段が違っ

ていた。同じ工場の同じ製品の売値が少しずつ違う状況が始まっていたのだ。

いちおう物不足はないといわれたハンガリーだが、それでもある時にはトイレットペーパーが店の棚に溢れかえり、翌月にはまったくこれが姿を消して、どこそこで見たと我が家も知人と情報を交換した。「計画経済」のおかげで時おり物が一挙にでまわったり、突然どこにもなくなったりする。生活必需品をハンガリー人はみつけた時に多めに買いたしておく。

急なお客さまの頼みで、私は黒の靴クリームをブダペストじゅうさがしまわり、他の色ならあるのに、黒だけがどうしてもないので、二日目にあきらめたこともある。ハンガリー人に聞いても、彼らも半年ほど見かけないという。後日、ぱっとしない店の奥の棚ふたつに、ほこりをかぶった黒の靴クリームが山のように積みあげてあるのを見て、店頭に並べればたちまち売り切れるでしょうにと、おかしかった思い出がある。

「自由価格」が始まってからは、他の店にない物なら持っている店は、割高の値段をおおらかに付けて店頭へ並べるようになった。同じ物が店によって値段が違うなんて本当にくたびれるわとある知人に言うと、日本に行った経験があるその人物は、日本でも値段がまちまちで、ハンガリーの統制価格に慣れていたからびっくりしたよと答えた。それもそうかと思ったが、やはり違うのである。

日本の場合、生活用品には定価があって、消費者はそれを頭にいれたうえで定価どおりか安いかという判断がつく。しかしハンガリーの「自由価格」には上限がない。日用品もソ連、中国、東欧圏からの輸入品に加えて、最近は西側製品も豊富になってきたので、定価がないも同然である。定価の見当がつかぬまま、馬鹿に高い買物をしたハンガリー人が店に返品にきたりする姿を幾度も見かけた。夫もこのありさまを目撃して「ノート一冊にこの値段はなんだ」と怒る客に「あるだけいいと思いなさいよ」と店主が答えたと教えてくれた。統制価格で生きてきた人びとにとって、インフレばかりでなくこの「自由価格」もまた生活を脅かす精神的疲労の元凶となっている。

一九八八年にはバス、電車料金が一挙に二倍、新聞代は三倍になった。つづいて食肉類が三割値上げされた。翌年はあらゆる物資について漸進的に価格統制を撤廃するという広報が流され、とりわけ年金生活者は驚愕したのである。ハンガリーの物価は日本人である我われにとって安いはずであったが、靴や衣類などハンガリー人があまりの高さに音を上げる商品を検討してみると、日本のバーゲンで我が家が買う目玉商品の値段とまったく同じなことに気づいて愕然とした。

ハンガリー人の月収は当時、一世帯あたり夫婦で働いて二万フォリントあれば不自由しないといわれた。日本円に公式換算すると五万円から六万円である。この月収で日本人と

同じ額の靴や服を買うのは大変な事態だとお分かりであろう。しかも品質は日本のものに及ばない。しょっちゅう服を破く育ちざかりの息子をかかえて、我が家も古物屋を覗くようになった。ハンガリーじゅうにこうした古物屋があって、日用品ならほぼ揃い、値段はきわめて安い。インフレとともに、こうした店がますます繁盛するようになった。

困窮する老人

ブダの丘を王宮と逆の方へおりていくと、モスクワ広場に出る。ここは地下鉄と電車のターミナルで、老人たちが花や野菜を売る姿が必ずみられる。昔から農家のおばさんたちが街角で行商をする姿は、ハンガリーの都市の風物詩だったそうだが、今は生活を脅かされた都市の年金生活者が庭の花や果物を売る姿も現れた。我が家の近所でも、義足をつけた紳士が品位を保って微笑みながら、ダリアの花束を売っていた。ブダペストにはいたる所、こうしたやむにやまれぬ必要にせまられた素人の行商が増える一方である。

ブダの丘の下の郵便局へいく途中、盲目の老婆が物乞いに立っていた。とりわけ寒い日だった。私はこれで今日は家に帰ってもらえたらと思い、百フォリント紙幣をその手に置いたが、「あなたの善意を神様が祝福してくださるように」と言う老婆は、郵便局から私が戻る時にも寒風の中に立ちつくしていた。社会主義の福祉は崩れ去っていた。社会主義国

に乞食はいないはずであった。
現在のハンガリーにとって、老人の困窮は最も憂うべき社会問題であり、誰もが率直にそれを認める。街角に立つ貧窮老人の姿に中年、若者をとわず道ゆく人はみな明日の我が身を重ねる。老人から花や野菜を買ったり、声をかけて慰めたり、一緒にインフレを嘆く姿がハンガリー全体に広がっている。
冬に一部屋を暖房するのは月額千フォリントかかった。年金の最低月額は四千フォリント余りであった。身を切るように寒いハンガリーの冬に、公園の日だまりにうずくまる老人や、暖かいデパートを一日じゅう徘徊する老人が目だつようになった。
ハンガリー人は普通、冬は深夜も暖房をとめない。我が家のガスストーブも自動制御になっていて、電化や自動化が遅れたハンガリーでも、冬の暖房に関しては実にゆきとどいた工夫がなされていると感心したものであった。厳しい冬の中から生まれた中・北部ヨーロッパの知恵の産物である。古い建築には壁全体を暖める暖炉が備わっている。冬の夜にハンガリー人は一晩じゅう、部屋を暖め、羽ぶとんにくるまってやすむのがあたりまえの暮らしぶりだった。
しかし今や、老人たちは凍え、飢え始めている。
夫の恩人である未亡人が、生きていらしたらどんなに辛い生活を味あわれたかしらと私

が言うと「彼女のような知識人は決して物乞いになれない」と夫は答えた。現在ブダペストの古本屋や骨董品店は品揃えが豊富で、西側の旅行者がこの街を訪れる楽しみの一つにもなっている。飢えないため、凍えないため、知識人の年金生活者が大事に守ってきた家具や書籍を売り始めたのだ。

古本屋で夫は、王国時代の有名な歴史全集を見つけた。真実のハンガリー史として、社会主義政権下で知識人たちが自分と子孫のために書棚にしっかりかくまってきた全集である。夫が棚からとって開いていると、最前から本探しをしていた立派な紳士が「この全集はぜひお買いなさい。めったに見つかるものではありません。私も持っています。値打ちは保証します」と語りかけてきた。名刺を交換し、楽しげに二人は話をかわして別れたが、買った全集を家に運びながら夫は「やがてこうした稀少価値のある本がぞくぞく古本屋に並ぶようになるよ」と言った。はたして半年もたたないうちに、王国時代のみごとな書物が古本屋に溢れるようになったのである。

古本屋で歴史全集をすすめてくれたあの紳士が、古書、稀覯本のたぐいを手ばなすような境遇にいたりませんようにと、繰り返し思い出されたしだいであった。知識人は子供をしっかり教育して、できれば西側で活躍できるようにする場合が多い。あの紳士にもそうした子供たちがいればいいがと思った。技術者は西側から割安で仕事を請け負うため、知

人の中には、そうして生計をたてている人がたくさんいた。技術者、芸術家、専門職などはどんどん西側へ出稼ぎに出ている。そしてハンガリー社会は地縁、血縁でしっかりと結ばれた社会であり、親おもい親族おもいは日本以上かもしれない。

ハンガリー人によるブダペスト紹介

せっかく気ばらしにブダペスト散歩へでかけたはずなのに、またしてもせつない話になってしまった。我われが見た改革のありさまは、実際のところこうした話題に溢れていたのである。しかしブダペストの魅力はなんとしても読者に味わっていただきたい。

ここに、ハンガリー人によるブダペスト紹介の本をあげよう。

ブダペストのコルヴィン出版が出した『BUDAPEST ANNO』という本は、古い写真の復刻集である。ハンガリー語、英語、ドイツ語版がある。往時のブダペストにあった華やかな上流の生活、市民生活、街角の様子を知ることができる。ブダペストを散歩すれば、今でも歴史的な街並みに昔をしのぶことができるが、この本とつきあわせると、ああこの建物は当時そのままだとか、少し手を加えたのかとか、散歩がいっそう楽しくなる。建物と一緒に当時そこで生きていた人びとの姿が写っており、ひげをはやした紳士や、日傘をさした御婦人、市場のおばさん、兵士、売り子の少年など、街にこのうえもなく似合った

姿を現在のブダペストに重ねることもできる。
この本はハンガリー人も大好きで、増刷するたびに売りきれてしまうようだが、繰り返し増刷され、古本屋でもみつけられる。
もう一冊、私にハンガリー語を教えて下さったトゥルク・アンドラーシュ先生の一九八九年にブダペストで出版された『BUDAPEST』という英語の本をあげよう。外国人に自分の足でブダペストを歩いてもらいたいという趣旨で、おすすめのコースをいくつかあげて紹介してある。ハンガリー人は独創的だといったが、この本はその優れた証拠となろう。歴史や建物の見取り図もふんだんに盛り込まれていて、単なる観光案内とはひとあじもふたあじも違っている。
トゥルク先生はその姓が示すところによれば、トルコの血が流れている可能性が大いにある。自慢のひげをたくわえ、ちょっとトルコ的な風貌がある。しかし、先生が古都ブダペストに捧げる愛情はハンガリーで一番のおりがみをつけていいに違いない。先生自身が楽しんでブダペストを歩きまわり、この街の魅力を伝えたくてたまらないという気持ちから生まれた本である。
実際に先生は、我われ外国人の生徒を連れてブダペストの小道、路地を散策し、壁のしみから弾丸のあとから詳しく説明してくださったものだ。英語が専門の先生はブダペスト

の経済大学でアメリカ人留学生にハンガリー語も教えておられる。私は例のハンガリー語学校とはまた別に、夫のつてでこのクラスにまぜてもらったのである。

開講日に私を連れていった夫へ、先生はちょっと残って授業に出てほしいと言われた。アメリカの若者たちの前で夫とハンガリー語で話し、「君たちもがんばればこんなふうにハンガリー語が上達できるのだよ。お手本にしなさい」と夫を紹介されたのであった。あとで私に「ああは言ったけれど、望みはないんだよ。あのアメリカ人たちは、ろくにハンガリー語をおぼえぬうちに留学を終えて戻ってしまうんだ」と笑って、大学では、ハンガリーの学生たちがアメリカ人とつきあおうとして夢中で彼らをとり囲み、英語の練習相手にするからアメリカ人はちっともハンガリー語に上達しない、僕の仕事はむなしいと溜め息をもらされた。

この本の初めの方に、私はハンガリー語学校中級クラスで優秀な西側の級友に出会ったと書いたが、確かに経済大学にきているアメリカ人は、これに比べてちっとも進歩のない集団だった。みな若く、奨学金をたまたまもらったとか、交換留学生制度のおかげでハンガリーにいるアメリカ人ばかりなので、ハンガリー社会に肉迫しようという意欲が乏しい。

それでも、先生と一緒にブダペスト散歩をする授業では、みんな大喜びでくりだした。先生は、次回にとびきりのハンガリー料理店を紹介すると予告された。そして我われは翌

週、ハンガリー人でごったがえす三級レストランへ入った。ところが先生ががっくりされたことに、アメリカの学生たちはスープかサラダをそれぞれ一品注文しただけ。「ダイエットしています」「菜食主義なの」「ハンガリー料理はコレステロールが心配です」等々の理由を述べる。こってりした塩辛いハンガリー料理に彼らは閉口しているのだ。生の野菜を食べる習慣もハンガリーにはなく、外資系ホテルにだけサラダ・バーを見かける。

私は先生が気の毒だったこともあり、先生のお勧めというガチョウの煮込みを注文した。アメリカ人たちは運ばれたスープから丁寧に脂をすくいのけたり、ハンガリーのサラダとは野菜の漬物だと知って「本物のグリーン・サラダはどこそこのホテルで食べたよ」などと言い合っている。先生は根っからの愛国者であり、私とガチョウを食べながら、聞こえないふりをしている。あとで「これだから、彼らはハンガリー社会のことは分からないんだ。あなたは日本人として、ハンガリー語に上達してひとあわふかせてやりなさいよ」と言われた。一皿五十六フォリントのこのガチョウ料理に味をしめて、後日、ほかの一級レストランのメニューを探すと、三百フォリントの値がついていた。ハンガリーは奥の深いところだと痛感し、ますます裏通りや小道を散策する意欲もわいてきたものである。先生の著書『BUDAPEST』には、本物のハンガリー料理店もたくさん紹介されている。

以上、私の乏しい知識をおぎなうブダペスト紹介の好著をあげたが、機会があったらぜ

ひ東欧を自分の目で見ていただきたい。東欧の文化的な豊かさは、必ずや日本人の心を魅了するに違いないし、簡単な歴史を知っておけば、旅はすばらしく味わいのあるものとなることであろう。

我われは次にブダの丘のとなりにある、ゲッレールトの丘に登ろう。

10──ゲッレールトの丘の聖人像と女神像

ゲッレールトの丘の女神像がデザインされた10フォリント硬貨

自然あふれるゲッレールトの丘

私が初めてブダペストに着いた日は、十二月の雨に暗くたれこめ、黒ずんだ街も枯れ木におおわれたブダの丘も、沈鬱きわまりない姿でうずくまっていた。ブダの丘の横に並ぶゲッレールトの丘は、水墨画を思いおこさせる無彩色の岩山で、首都の真ん中に荒々しい禿山がそそりたつ光景に驚かされたものである。

しかし、やがて喜ばしい春のおとずれを、このゲッレールトの丘は全身をもってブダペスト子に告げるのだ。灰色の岩の厳しさがなんとはなしに和らいで見え始めると、じきに岩のかげから芽吹いた草木がみるみるうちに丘をおおい、死のイメージが生へと劇的に転

換する。ブダペストは花で溢れ、ブダの丘もゲッレールトの丘も緑につつまれて、それは愛らしく魅力に満ちた表情をみせる。
東京や西南日本の冬に、多くのヨーロッパ人は感嘆する。空は青く澄んで、窓辺にいると日差しの暖かさに心がなごむという。中・北部ヨーロッパの冬景色は暗くて重い。復活祭の文字どおりの意味を、ここではまさに生活の実感として知るのである。
王朝時代の華やかな歴史を伝えるブダの丘には、人工の美がここちよく配置されている。これに対しゲッレールトの丘は一見、自然そのものである。花の咲き始めから暑い夏にかけて、都会人たちはこの丘に自然を求めて散策にくる。落ち葉の舞う秋の風情も、格別に美しい。
ハンガリーは全国にさくらんぼや桃、梨、りんご、プラムの木が植えられ、公道に実る果物は誰がとって食べてもよい。我が家から息子の幼稚園に行く道にもさくらんぼ、ついでプラムがなり、秋のりんごまで、我われもたくさんもいで味わったものだ。ゲッレールトの丘でもさくらんぼ狩りをした。リスや野鳥、飼い主と散歩するたくさんの犬たちなど、ゲッレールトの丘で息子は自然と遊ぶ動物の姿にも喜びの声をあげた。

新しい金持ち

あくまで自然が主でありながら、ゲッレールトの丘にも人間の歴史が深く刻まれている。戦前ここに家を構えた持ち主はもう去ったであろう広大な邸宅が点在し、旧貴族の館もある。美しく修復された館や朽ちたままの邸宅を眺めることは、ゲッレールトの散歩に重い味わいを添える。

現在のブダペストでは、二区のばらが丘に新興の高級住宅街が出現し、ここには高級官吏、党幹部、外国人にまじってハンガリーの新しい金持ちが競って家を建てる。ガレージにはベンツが並び、住宅事情の悪いハンガリーでは優雅な広さの家々が装いを凝らす。社会主義圏でハンガリーは経済改革にいち早く着手したのだが、さまざまな制約の目をくぐりぬけて、西側との格差を有利に働かせ、財をなした人も多い。近所の労働者の子たちが、ばらが丘なんて泥棒の住むところよ、まじめに働く自分の両親みたいな人間は報われないと、我われに言ったものである。

ある時、道でヒッチハイクの若い女性を乗せた。彼女は小学校の教師をめざして教員免許もとったが、教師の給料があまりに安いため、ばらが丘の大金持ちの家で家庭教師をしているという。小学校教師の月給は五千フォリント弱だった当時、この家では一万フォリントもらえた。大学講師が月給八千フォリントだったから高給である。この家にはベンツはむろん庭やプールがあり、庭師、運転手、門番までいるそうだ。しかし、彼女はこうい

うことはなにかおかしいという気持ちがぬぐえず、他の勤め口を探しているところだった。

我われの知人にも、かつての上流階級出身の人がたくさんいる。ゲッレールトの丘に点在する邸宅のように広大な家を持っていた階級である。彼らは社会主義政権下で財産を失い、残されたのは教育だけという身のうえとなった。自分と家族に不正が行われたという思いを抱かぬ人はいない。いっぽう新しい金持ちたちもまた、自分の生活を豊かに飾り、財産を未来の子孫に伝えることを信じつついっそうの富を貯えようとする。

王国時代の上流階級は、この国にとって必要とされる存在であった。支配機構を司っただけでなく、セーチェーニ一族のように文化の擁護や福利厚生の分野でも、私財を国民のために生かそうとする姿勢がこの階級にはあった。現在の新しい金持ちがそうした活動に貢献し始めたという話はまだ聞かない。今後にそういう現象が生まれるとしても、現在の新しい金持ちは、社会主義の平等のすきまに我が身一代の才覚で私財を築いたばかりである。

丘陵地帯ブダには、ドナウ河に面してばらが丘、ブダの丘、ゲッレールトの丘が続く。ばらが丘の新しい高級住宅街を眺め、王様がいなくなったブダの丘を眺め、さらにゲッレールトの丘にかつての富める階級の廃墟を見るのは不思議な気分のものであった。

丘の周辺

ブダの丘やゲッレールトの丘には、古くは対トルコ戦争の歴史も刻まれている。十六世紀にオスマン・トルコがブダにまでせめよせ、ここは激しい戦場となった。ゲッレールトの丘の上には、チッタデーラという対トルコ戦、対ハプスブルク戦、二つの世界大戦にも使われた要塞がある。現在チッタデーラはレストランになっているが、石を積んだ壁に砲弾の跡がなまなましく残っている。

チッタデーラから丘を抜けて隣のブダの丘に通じる長い抜け穴が掘ってあった。この抜け穴は現在分断され、ワイン蔵などにも利用されている。チッタデーラやブダの丘の抜け穴を改装したレストランで食事をしながら、ここにも人の血が流されたのではないかと、しみじみあたりを眺めまわした。

チッタデーラの前からは、ドナウ河や隣のブダの丘と王宮がみはらせるため、観光の名所となっている。家族三人でここから景色を眺めていた時、二人の婦人が近寄ってきた。婦人の一人が日本の方でしょうと、我われに声をかけた。もう一方の婦人は、よく東洋人の国籍に見分けがつくのねと驚いている。話をしてみると、声をかけた婦人は夫君が外交官だった時、日本に駐在したことがあるそうだ。日本人だけは区別がつきます、私は日本びいきなのよと微笑むこの婦人は現在、西ドイツに移住しているという。「いろいろ事情が

ありました」とのひとことに、一九五六年のハンガリー動乱か、その後の社会情勢によってハンガリーを去る決心をした人であろうと思った。

我われの方が驚いたことに、この二人は姉妹だという。もと外交官夫人は高価なドレスがよく似合う初老の美人であり、妹はお化粧もせず、身なりは典型的なハンガリー中年婦人の質素さである。妹の方があでやかな姉よりよほど老けこんで見える。「祖国ハンガリーも自由をとり戻そうとしています。三十年ぶりの帰国なのです」と姉の婦人が答えた。妹はずっとハンガリーで暮らしてきたそうだ。姉は時によって美しさに磨きがかけられ、妹は時にすりへらされたような風情であった。立ち去っていく姉妹を眺めつつ、同じ家族に生まれながら西と東に別れて暮らした二人に、歳月がなんと違うおもむきを刻んだことかと思わずにはいられなかった。

ハンガリーが自由化を進め、観光にも力をいれる中で、西側へ亡命した人びとの祖国を訪ねる姿が目だつようになった。身なりの美しい初老以上の人がブダペストの街を眺める表情や、ハンガリー語をつかえつかえ話すようす、また、かたわらに質素な服装の肉親が案内をしていることで、それと見分けがつく。

ハンガリー人は祖国愛の強い民族である。西側にいても亡命者たちはお互いに助けあい、祖国の動向には常に注意を払ってきた。今日の改革の背景として、改革を物心ともに国外

から支援し続ける亡命者の力を抜きには考えられない。

ゲッレールトの丘を下っていくと、ふもとに古いゲッレールトホテルがある。第二次世界大戦末にソ連軍が丘を解放したおり、このホテルは接収され司令部が置かれていた。ホテル自体は外資系におされて超一流の座をおりたが、ここのプールは今も有名である。プールの周囲が陶器で飾られ美術的な意匠をこらしてある。ブダペストが誇る名所のひとつだ。三十フォリントの入場料はハンガリー人も利用できる値段であった。夏に七十フォリントに値上げされると、ハンガリー人の姿はぐっと減る。大胆な値上げに驚いていると、冬にはまた値下げされて二度驚かされた。西側観光客のために夏はがまんしてくださいというわけだが、プールそのものが温泉であるほか湯治用の温泉風呂もあって、ここでハンガリー庶民が病気の療養をするのである。

ブダペストには、あちこちに温泉が湧いている。特にこのゲッレールト温泉には、丘の名前の由来である聖人ゲッレールトが、杖で打った所から温泉が湧き出したという霊験あらたかな伝説がある。ゲッレールトはキリスト教をうけいれた聖イシュトヴァーン王の重臣で、キリスト教を憎む敵に暗殺されたといわれる。ハンガリー人の心の中で、死後もゲッレールトはキリスト教とハンガリーを守り続けている。

丘の中腹には、聖人ゲッレールトの風格ある石像が立ち、民族的な祝日には、この像が

必ず照明される。社会主義に関する祝日には照明されないから、我われはよく祝日の性格をこの像の明かりで判断したものだ。

解放者?……ソ連

聖人ゲッレールトでさえ中腹にまつられているというのに、丘の頂上にはブダペストを解放したソ連軍を記念する巨大な女神像がそびえ、ハンガリー人の怒りをかっている。勝利を象徴する月桂樹の葉をかかげた女神の巨像は、空中高くそそり立ち、市内のいたる所で視界にとびこんでくる。なんと目ざわりな、とブダペスト子は腹をたて、あれは月桂樹じゃなく魚を売っているように見えるでしょうが、とわざわざ解説してくれる。台座にはソ連軍兵士の像も刻まれ、ここで戦死した兵士の名がロシア語で彫りこまれている。

ある日、女神像横の展望台にいると、ソ連のバスがとまり、花束を手に戦没者遺族団が降りてきた。花束を像に捧げ、たくさんの人が涙を流したのだ。この光景に私ははっとさせられた。よく知られた歴史とはいえ、第二次世界大戦末にソ連の若者がここで血を流し、倒れ、多くの屍が祖国に戻れなかったことを、今さらのように実感したのである。

ナチス・ドイツと組んだハンガリーを、ソ連軍は打ち破り、ナチズムからハンガリーを解放したことになっている。しかしハンガリー人は、これを解放とは呼ばない。マリカの

夫ペーテルは当時まだ子供だったが、三日間ブダペスト市内であらゆる行為を許すという正式の許可のもとに、ソ連軍が働いた乱暴狼藉の数々を、悪夢のように思い出すと言った。空爆と市街戦で破壊されたブダペストも疲弊していたが、ソ連軍の兵士も命がけの長い闘いで極限状態の心理から解放されたばかりであった。ソ連軍がブダペストを解放したのは一九四五年の初めであり、東欧諸国がスターリン型社会主義のもとソ連の衛星国として編成されたのは一九四八年である。ソ連軍による解放が、ただちにハンガリーの社会主義成立となったわけではない。しかしハンガリー人は、ソ連が解放と呼ぶものを、今もソ連による「占領」の始まりと称している。

私が茫然と眺めるソ連遺族団の悲しみの姿に対して、周囲のハンガリー人たちは、冷たい目でさげすむように背をむけただけであった。

一人ひとりのロシア人は気さくで暖かく善良な人びとなのに、集団としてのロシア人は官僚的で教条主義的になるということをよく聞く。語学校でロシアのおばさんたちの不遜さが強く印象に残ったことを前に書いたが、ソ連の人にとっては、自分たちが命がけでハンガリーを救ったという気持ちは強いのであろう。そうでなければ、ソ連軍の若者が流した血はむくわれない。まして語学校のおばさんがたは、普通の庶民ではなく、時に応じてソ連を代表する特別な立場の人びとであった。日常の生活水準では西欧やアメリカに遠く

およばぬソ連の国民が、理念としての大国意識と、社会主義ひいては世界に対するソ連の貢献という使命感を鼓舞され続けてきたという指摘を、私はハンガリー語学校の初級クラスでしばしば考えさせられた。初級クラスのロシア人のおばさんたちも、何かにつけて大国ソ連とか、東欧の主人ソ連という態度をみせたのだ。

これは、ハンガリー人である教師のカティにとって、たまらないことであった。ソ連に留学していたボリビア人に「あそこで何を勉強していたの」と尋ね、相手が「コンピューターです」と答えると、「まさか。ソ連に科学なんかあるものですか」とカティはあざ笑った。「いやコンピューター技術はありますよ」とボリビア人が言っても、「本当にいいのはアメリカと西ドイツ、それに日本ね」とカティは、私に微笑んでみせる。「ソ連はハンガリーから略奪するだけよ。今も我が国のアルミニウム資源を盗んでいく。お返しにくれるのは、ろくでもないものばっかり」とカティはゆずらない。

ボリビア青年の父は熱烈なコミュニストで、父の意志でソ連に留学させられたそうだ。彼は祖国ボリビアに帰るのをなんだかんだと言っては遅らせ、今はブダペストに留まっている。あと数年かけてヨーロッパ全体を見たいという。親には内緒でハンガリー娘と結婚してしまった彼は、確かに生活はブダペストの方が豊かだし、ハンガリーが大好きだけど、ロシア人の親切や気さくさにも良い思い出がたくさんあると口ごもった。

語学校のロシア人のおばさんたちも、休憩時に一人ずつと話すと、故郷の思い出とか、家族のことをうちとけた様子で話す、飾らぬ人たちであった。それがソ連代表としての権威を刺激されると、たちまち大国意識をもやす集団になるのである。教科書にゲッレールトの丘にある女神像が出てくると、口ぐちにソ連の功績とかファシズムのあやまちなどを語り始め、そこをとばして教科書をすすめようとするカティと一戦まじえたりもした。

ロシア人がファシズム批判を口にする時、ナチスと組んだハンガリーへの批判、および日本への批判もこめられていた。

チェコスロヴァキアへ行った時、ある都市に広報の掲示板があり、我われの目には東南アジアの人としか思えない顔の兵士がなま首を持って笑う写真とともに、ファシズムを許すなというスローガンが掲げてあった。軍国時代の日本の蛮行を衝撃的な証拠写真とともに糾弾したわけなのだろうが、夫と私にはどうしても日本人の顔には見えない。肉親に写真マニアの多い夫はしげしげと眺めて、しかもこれは合成写真で、くつろいで笑っている兵士の姿になま首をつけ加えたものだろうと言った。

日本の歴史を書き換えるつもりはないが、こうした宣伝がどれほど説得力をもったかは疑問である。東欧圏で民主主義を発達させていたチェコスロヴァキアに侵入し、この国を直接崩壊させたのはナチス・ドイツであった。チェコスロヴァキアの土地には歴史の始ま

りから今日までドイツ人との深い関わりがあるし、東西ドイツと微妙な関係にあったこの国にとって、反ファシズム宣伝に遠い日本を選ぶのが最も無難だったのであろう。だが現在のチェコスロヴァキアの人びとは、ハンガリー人と同じように日本にむしろ好感を抱いているのだ。釈然とはしなかったが、反ファシズム宣伝に他ならぬ旧日本軍が使われ続けていることを重い気持ちで眺めた。ロシア人のおばさんたちも本国ソ連で、同様の宣伝を見ていたかもしれない。

ロシア人のおばさんたちがハンガリーのファシズム時代を非難する気持ちは、ソ連の略奪を非難するカティとかみあうわけはなかった。ハンガリーのどこへ行っても、ソ連解放軍による略奪の昔話を聞かされた。ドイツ軍も物資調達を行ったが、ドイツ人は代金を払ったといきまく人もいた。ナチズムからの解放にしても、ハンガリーは第一次世界大戦で失われた領土を回復するために、第二次世界大戦でナチス・ドイツと組んだのであり、やはりソ連流の解釈とはかみ合わないのである。

嫌われるソ連の親分意識

こうした過去のいきさつ以上に、ハンガリー人がソ連をさげすむ理由のひとつには、ソ連による経済的しめつけへの嫌悪とともに、ハンガリー駐留ソ連軍の貧しさがあった。

ソ連の青年は五年の徴兵を課せられるという。ハンガリーの青年にとっても徴兵は怨嗟の的だが、ハンガリーの徴兵は一年半である。月額二百フォリントに満たぬ手当てを支給されるソ連兵たちが、ハンガリー民間人の家で食べ物をくれと頼んだなどという話は各地で聞かされた。実際に夫も、知人とドライヴしていると、道ばたでソ連兵の若者が軍用コートを買わないかと合図したのを目撃している。知人は四百フォリント(約千円)で軍用コートを買った。このソ連兵はあとで軍の支給品をなくした罰を受けるのだろうが、そんなにしてでも四百フォリントが欲しかったわけである。

ハンガリー人の多くは、トラックに詰めこまれて運ばれるソ連兵の若者を見て、まるで動物のように扱われている、かわいそうにと同情する。徴兵されたソ連兵にとって、物資の豊かなハンガリーは憧れの駐留地なのだそうだ。こうした貧しい兵士の姿と、社会主義の指導者といういたけだかな親分意識は、ソ連に対するハンガリー人の嫌悪感をさそうばかりのようであった。

しかしゴルバチョフの出現によって、それ以前に始まっていたハンガリーの改革にはいっそう拍車がかかった。改革の実現は夢物語ではないという確信が、ハンガリー人をおおいに励ました。我が家が滞在していた頃に、ハンガリーにおけるゴルバチョフの支持率は八十パーセントを超えた。ハンガリー自体の改革を担うべき政治家や政党については意見

が分かれ、混迷が続いていたにもかかわらず、ゴルバチョフ人気は安定していた。

ゴルバチョフ政権下で、ソ連軍がすみやかにアフガニスタンから撤兵したことを、我われもハンガリー人と共に驚きをもって受け止めた。ハンガリー駐留のソ連軍も撤兵を始め、私がゆっくりとこの東欧の回想を書いている間にも、一九九一年六月にソ連軍はさっさと撤退を完了してしまった。ハンガリー自体の徴兵年限も短縮されるという。

夫がブダペストの道で、エンコして困っていたソ連ナンバーの車を手助けしたことがある。車に乗っていた家族は、なんとカルパチアに住むハンガリー系住民だった。一九四七年のパリ講和条約で敗戦国ハンガリーは、十五万人以上のハンガリー人が住むカルパチア地方をソ連に割譲した。ブダペストのハンガリー人たちはこの車のソ連ナンバーを見て冷淡に通りすぎていったが、乗っていたのはソ連領に住むハンガリー人同胞だったのである。

ゴルバチョフの改革によって、このカルパチアのハンガリー人一家は、第二次世界大戦で分断されて以来、初めて母国ハンガリーの地を訪ねることができるようになった。カルパチアの彼らが住む地方には、ペレストロイカでロシア語のほかにハンガリー語の表記も町によみがえったのである。

ハンガリー人の社会主義批判は、ソ連の抑圧に対する憤懣と渾然一体となっていた。が、ハンガリー社会の抱える問題を、ひたすらソ連のせいにするのはあまりにも安易な考えで

はないかと私はいつも感じた。ハンガリー製の子供服が一回の洗濯で破れること、店員の無愛想や非能率、コネ社会、こうしたいわばハンガリー人のハンガリー社会に対する姿勢の問題が、ソ連の抑圧という悪にすべて還元されてしまっていたのである。ハンガリー人が他ならぬ自分たち自身の問題を直視するべく、ベールは剥がされ始めていた。

ソ連批判の話題がハンガリー人との語らいで続く時、でもロシア文学をはじめ音楽やバレエ、演劇等、ロシア文化にはすばらしいものがあるとこちらが言うと、ハンガリー人もそれにはまったく同意する。日本人にも、根づよいソ連嫌いとロシア芸術への憧憬が同居している。この複雑なソ連という国が、率直に援助や交流を求めているいま、本物の相互理解の生まれる可能性が準備されたと言えるのではないだろうか。私自身も、ソ連と素顔のロシア人、およびそこに暮らすたくさんの民族のことを、とても知りたいと思っている。

11――ひたすらにノスタルギア

古き良き時代のカフェ(1896年)

王冠復活

チェコスロヴァキアの都市で広報の掲示板にたじろいだことを書いたが、ブダペストでこのような政府のイデオロギー広報類はまずみつからなかった。それに比べ、当時改革前のチェコスロヴァキアには掲示板どころか、道の要所、建物の入口、町中のいたるところに、社会主義建設をうたうシンボルマークや看板が目についた。

「ハンガリーでも十年前なら少しはあったが、チェコスロヴァキアはまだ宣伝文句がびっしり飾られているんだなあ。ルーマニアに負けないくらいだ」と夫が言う。チェコスロヴァキアびいきの私としては「チェコスロヴァキアの人は、何をするにも律儀だからでしょ

う。まあこの飾りは、本当にみっともないけどね。それよりハンガリー人の、見とおしもつけないうちになんでも一挙にやろうとするせっかちの方がよほど危なっかしくはないかしら。改革といっても、とりわけ目だつのは、後ろむきの回顧趣味に思えるけど」としぶしぶ答えた。

ハンガリーでも、祝日をはじめ国賓の来訪など特別な日には、街に国旗とともに赤旗が飾られ、ドナウ河にかかる橋にもおびただしい赤旗がたなびいていた。それが我われの滞在中に赤旗が撤去され、国旗だけとなった。赤い星と麦穂にハンガリー国旗の赤、白、緑を配した国章もやりだまにあげられた。一九八八年末から、国章の新しいデザインを求める議論が始まり、十字架と自然を象徴する山、国土を象徴するしまもようを配した一八四八年の独立革命時の国章が、赤い星に代わる有力候補として浮かびあがった。

さらにこの上に王冠をつけた、歴史の長いより伝統的な国章が話題の中心となった。王冠を復活させるべきか否か、実に真剣に議論されたものである。ハンガリー人民共和国の国名はハンガリー共和国に変更されたが、王冠というすでに存在しない王国時代のものに現在のハンガリーを象徴させるかどうか、おおいにもめたのである。

国章議論が活発化したのは一九八九年だが、一九八七年末に我が家がハンガリーで暮らしはじめた時、夫がすでにドナウ河にかかる「自由橋」の飾りに、社会主義政権下ではず

された王冠の国章がしっかりと復活しているのを見つけ「おや、いったいハンガリー人は何をはじめたんだろう」と驚いたものだ。この王冠の下を、ハンガリー軍ばかりでなくソ連軍のトラックも盛んに行き来していたのである。

熱烈な議論のすえ、国民投票により、現在のハンガリー国章は王冠を復活させた。ハンガリーの民族王朝アールパード朝は十四世紀初めにはすでに断絶していたが、国章を飾る王冠は、アールパード朝初期の聖イシュトヴァーン王が、東西のキリスト教会から王位を承認された時に授けられたものだと一般に信じられている。ブダペストの博物館に行けば、このみごとな王冠の実物といわれる物を見ることができる。これが本物かどうかは定かでない。しかしアジア起源のハンガリー人が、ヨーロッパ国家として西と東の教会から授けられた王冠の象徴する意味は大きい。

ハプスブルク帝国下のナショナリズム

十六世紀になってオスマン・トルコに国土の大半を占領されたハンガリーは、オーストリアのハプスブルク家やヨーロッパのキリスト教諸民族とともに戦い、ヨーロッパ世界に復帰したわけだが、この過程もつぶさに見ていけば、ひどく複雑なものである。キリスト教ヨーロッパ世界の内部にはカトリックとプロテスタントの争いがあったし、キリスト教

徒がオスマン・トルコと常に敵対したわけではなく、必要に応じてトルコの存在を牽制や緩衝のついたてともしたのである。また同じ国家の中で、支配民族と被支配民族の利害が対立したり、同じ民族内の支配階級と被支配階級間の対立などが錯綜して、東欧の近世史をいろどっている。

したがって、キリスト教対トルコ世界の単純な図式でこの時代をわりきることはできないのだが、現実としてハプスブルク家はキリスト教社会の守護者を自任し、ハンガリーなど中・東欧諸民族の支配者となった。そしてハンガリー人の中に、今度はこのドイツ人王朝支配下で、ハンガリー王国の復活と独立を願う動きが生まれた。

一八四八年にヨーロッパじゅうを自由主義革命の嵐が吹き荒れた時、コシュート率いるハンガリー革命軍は自治独立を求めて戦い、ハプスブルク家に敗れた。このコシュートらの掲げた国章が、先にふれた王冠のない国章である。勇敢なハンガリー人は軍事的にはハプスブルク家に勝利していたし、共和制を宣言して翌年まで革命政権を維持したのに、王朝の威信をかけてハプスブルク家が救援を求めたロシア皇帝の軍に敗れたのである。ハンガリー人のロシア嫌いは、この時すでに根をおろしていたのだった。

ハンガリー人ばかりでなく、十一の多民族を抱えたハプスブルク王朝内の諸民族は以降、独立や自治を求めて、第一次世界大戦の終わりまで、激しい民族運動をくすぶらせていく。

西欧は啓蒙主義、市民革命、ナポレオン時代を経て、近代民主主義と国民国家形成の時代にはいっていた。ついで産業革命が進展していった。しかし中央ヨーロッパのハプスブルク王朝は、新絶対主義といわれる体制のもとで、国家の中央集権化と近代化をはかろうとした。ハプスブルク皇帝は領内諸民族にあまねく「臣民」とよびかけたが、民族意識に目覚めた臣民は自分をハンガリー人、チェコ人、ルーマニア人などとして意識し始めたのだ。

貴族はヨーロッパの諸王家や貴族と縁組で結ばれ、どちらかといえばコスモポリタンな性格を持っていた。しかしハプスブルク貴族として皇帝に忠誠を誓いつつも、貴族もまた自分の属する民族の指導者として、コスモポリタニズムとナショナリズムの二つの顔を持つようになっていった。ハプスブルク帝国が国家基盤を強化しようとする中央集権主義に封建的特権を脅かされた大貴族は、ナショナリズムの旗手となってオーストリア支配に挑むことで、自らの地位の保全もはかろうとした。新絶対主義を誇ろうとするハプスブルク帝国が、西欧の近代国民国家にくらべて産業化にたち遅れていくという危機感を抱く中小貴族層や新興諸階層もあった。

フランツ・ヨーゼフ一世の試行錯誤

諸民族の中でも、とりわけハンガリー貴族はハンガリー王国の復興をかけ、民族運動の

指導者として先頭に立った。一八六七年にハプスブルク皇帝フランツ・ヨーゼフ一世は、ハンガリー人を味方にひきいれるべく妥協して「アウスグライヒ」というものを成立させた。ハプスブルク帝国をオーストリアとハンガリーの二重王国体制に改組し、ハンガリーには内政の主権を認め、ただ外交、軍事、財政だけはオーストリア・ハンガリーの共通議会で取り決めるという和約である。

ハンガリーは独立をとり戻し、フランツ・ヨーゼフ一世はハンガリー国王フェレンツ・ヨージェフとしてブダの丘のマーチャーシュ教会で戴冠式を行った。日本人にはぴんとこないかもしれないが、ハンガリー人は王家の血筋ではなく、教会に承認されたハンガリー王国の国権に基づく主権とその領土を承認させることを問題にしたのであり、それがハンガリー国家の独立であった。こうしてオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフは、ハンガリー国王フェレンツ・ヨージェフともなったわけである。

しかしこのアウスグライヒは、さらに民族問題の火種をかきたてることになった。ハンガリー人に独立を認めたことで、かつて同じように自民族の王朝を誇っていたチェコ人、ポーランド人、クロアティア人などがいよいよ黙っていられなくなったのである。自民族の王冠に象徴される国権と自治も認めよと、帝国を分裂させかねない勢いで各民族は主張しだした。また「歴史なき民族」などと気の毒な名で呼ばれた南スラヴ人やルーマニア人

の中にも、ひとたび芽ぶいた民族意識と民族的権利への要求は、拡大の一途をたどった。一八四八年に即位し、第一次世界大戦さなかの一九一六年に死去したフランツ・ヨーゼフ一世の長い治世は、領内各民族に対する威圧と妥協、試行錯誤の連続であった。

彼はスラヴ民族が半数を占める広大な帝国を、もう半数のドイツ人とハンガリー人という支配民族によって統治しようと試みる一方で、スラヴ人の処遇にも苦慮した。例えば、チェコ人にも王朝の復活を認めると公言したり、チェコ人の多い地方でチェコ語にドイツ語と同等の権利を与える政令を出したりしたが、これをドイツ人やハンガリー人の反対にあって取り消した。またオーストリア・ハンガリー二重王国を、クロアティアを加えた三重王国に、あるいはポーランド王国を復活させた三重王国に変えようとする構想などがハプスブルク帝国末期を揺るがした。

まれにみる複雑な民族構成を持つこの帝国の皇帝は、王朝の威信という骨の髄まで染み込んだ自己の信念と、臣民たちの要求する民族的権利というよく理解のできない主張の間で右往左往したのである。

強い復古趣味

ゲッレールトの丘とペストの間のドナウ河には二本の橋がかかっている。

一方は、先に述べた「自由橋」で、この橋は社会主義成立前まで「フェレンツ・ヨージエフ橋」という名であった。重々しい緑色の鉄橋は、ヨーロッパに機械文明が進展した当時の時代を反映して、その頃としては新しい様式をとりいれたデザインである。古さと新しさの入りまじる巨大なフェレンツ・ヨージェフ橋には、頂点にハンガリーの民族王聖イシュトヴァーンの王冠を配した国章が掲げられ、橋を見下ろしていたのだから、フランツ・ヨーゼフの心にも複雑なものが去来したことであろう。

ゲッレールトの丘からのびるもう一方の橋は、白い現代的な鉄橋で「エルジェーベト橋」という。古いたたずまいのブダペストにはそぐわないような流線型のモダンな橋だ。橋の名はフランツ・ヨーゼフの妻、エルジェーベト皇后に由来する。ドイツ読みならエリザベート皇后である。

第二次世界大戦末に、撤退するドイツ軍は、ばらが丘からのびるマルギット橋や、ブダの丘からのびる鎖橋、ゲッレールトの丘からのびるフェレンツ・ヨージェフ橋、エルジェーベト橋などをことごとく破壊していった。ハンガリー人はこれらを修復する時、エルジェーベト橋以外はほぼ原型にならって復元した。ハンガリー人の説明によれば、エルジェーベト橋を修復する時にはお金もなかったし、近代工法を試みようという意図もあって、現在のような流線型の橋を造ったのだそうだ。

昔のエルジェーベト橋は、写真でみると石の橋脚を持つ優美な姿であった。しかし姿は変わっても、エルジェーベトの名は残り、社会主義政権下にあってすら橋の名は変更されなかった。なぜならこの美貌の王妃エルジェーベトは、ハンガリー人の人気のまとだったからだそうである。

宮廷生活を嫌ったエルジェーベトは、宮廷を逃れてヨーロッパじゅうを旅しつづける孤独な麗人であった。ハンガリー王妃として戴冠式に臨んだエルジェーベトの肖像画は美しく、橋のたもとには今も、ハンガリー王妃の衣装をまとったエルジェーベトのブロンズ像が静かに座っている。王妃はハンガリーを愛したという逸話もハンガリー人に語り継がれている。ドナウ河によりそって並んでいたエルジェーベト橋とフェレンツ・ヨージェフ橋だったのに、皇后の名は今も残り、夫の皇帝の名は、社会主義政権下で「自由橋」と書き換えられたのであった。

フランツ・ヨーゼフの長い治世は、近づくハプスブルク家の終焉を予告するかのように、この王家の悲劇にいろどられていた。

皇太子ルドルフが貴族の婦人と心中した。日本でも「うたかたの恋」という古い映画で知られている恋物語には、ハプスブルクの各民族に同情をよせつつも、皇位と私情の間で板ばさみになった皇太子ルドルフの苦悩が背景にあった。息子を失った皇帝はまた、最愛

の妻エリザベートがイタリアで無政府主義者の手によって暗殺されるという二重の悲劇を味わった。ヴィスコンティの映画「ルードヴィヒ・神々の黄昏」は日本でも話題になったが、主人公のバイエルン国王ルードヴィヒが慕ったいとこ、映画ではロミー・シュナイダーが演じたオーストリア皇后がこのエリザベートである。

ウィーンでも現在、復古趣味が蔓延し、ハプスブルク家の歴史が盛んに回顧されている。オーストリア人が愛する悲劇の皇后、美貌のエリザベートの思い出は、ハンガリー人にとってもエルジェーベト王妃への思慕となって生きつづけているわけである。

一九五六年のハンガリー動乱で、ブダペストの民衆はマルクス・レーニン通りに、その通りの旧名である「テレーズ通り」と書いた板を張りつけた。動乱の失敗とともにこの板もはずされたが、現在の改革で通りの名はまたもとのテレーズ通りに戻された。

テレーズとはハプスブルクの名君、女帝マリア・テレジアのことである。ヨーロッパ列強が拮抗する中で、若くして帝位についたマリア・テレジアは、治世の始まりにハンガリー議会の支持をとりつけ、誇り高いハンガリー貴族文化を好んでいたことで知られる。マリア・テレジアの玄孫フランツ・ヨーゼフの存命中は何かにつけて反抗したハンガリー人であったが、フェレンツ・ヨージェフ橋の名もいずれ復活するかもしれない。

現在のハンガリーにおける復古趣味は大変なものがあり、なんでもかんでも王国時代は

よかったという気分に満ちあふれているのだ。これは歴史を考えれば、私にはかなり馬鹿げたことに映った。

ハプスブルク崩壊

フランツ・ヨーゼフを最後に襲った家庭の悲劇は、皇太子ルドルフの自殺後、甥のフランツ・フェルディナントを皇位継承者にしたことでとどめとなった。この甥は老皇帝の気に入らず、またその妻もボヘミア貴族の出で皇后にふさわしい家柄ではないため、老皇帝は皇位継承にあたりフランツ・フェルディナントの子に皇位を伝えてはならないという条件をつけた。

フランツ・フェルディナント夫妻がサライエヴォでセルビアの民族主義者に暗殺され、ハプスブルク帝国はセルビアに宣戦を布告したが、ここから第一次世界大戦へと拡大していった。大戦の原因となったサライエヴォ事件には、当時から疑惑が持たれていた。皇位継承者夫妻が反ハプスブルク民族運動の高まっている時と場所に行啓したにしては警備があまりにも簡略だったため、フランツ・フェルディナント夫妻はもしかしたら民族主義者に投げられたえじきだったのではないかという疑惑である。フランツ・フェルディナント夫妻暗殺事件は、これを利用して、一挙に反ハプスブルク民族主義者を弾圧するためにし

くまれた芝居ではなかったかという憶測は、今も続いている。憶測にすぎぬとしても、当時の人びとがこんなことを噂するような下地があった。

帝国に何がしかの改革を試みようとする急進的なフランツ・フェルディナントの姿勢は、老皇帝フランツ・ヨーゼフと対立するものであった。当時ハンガリーは、スラヴ人とも協調しようとするハプスブルク帝国の試みにことごとく反対し、帝国改革の足をひっぱっていた。一方、フランツ・フェルディナントは独立を獲得したハンガリーを牽制したがった。フランツ・フェルディナント自身は決してスラヴ人に同情を抱くような人物ではなかったといわれるが、彼のハンガリー嫌いに勝手な期待をかけたスラヴ民族主義者もいたくらいで、王朝の権威や伝統を破壊しかねない乱暴者としてフランツ・フェルディナントはハプスブルク宮廷の中で孤立していた。

フランツ・フェルディナント夫妻の柩が安置されたウィーンの宮廷では、ハプスブルク貴族として家柄の劣る妻の柩には花も贈られず、子供たちからの白バラだけがさみしく飾られたという逸話もある。

ハプスブルク貴族はかくも冷淡であり、正式に非を認めて謝罪するセルビアに対して、あえて宣戦布告をするほどに高飛車でもあった。しかし結局、この大戦でハプスブルク帝国が崩壊してしまったことは歴史の皮肉というべきであろうか。しかもハンガリーは第一

次世界大戦において、オーストリアへ食糧の供給をしぶり、思わぬほど戦争が長期化して泥沼に陥ったこの帝国に、いわば背後からとどめを刺したのである。ハンガリーが食糧とひきかえに政治的要求を通そうとした結果、オーストリアが飢え、ハプスブルク帝国が弱体化した歴史を、オーストリア人が簡単に忘れてくれるかどうかは怪しいものである。

王制復活待望論

しかし現在のハンガリー人が王国時代を懐かしむ気持ちには、聖イシュトヴァーン王など自民族の王朝史を懐かしむことだけではなく、ハプスブルク時代のハンガリーの方が良かったという追慕が確かに存在している。豊かな日本の方の目に現在のハンガリーはどう映るのでしょうかと、ハンガリー人に尋ねられるたびに、私はまずハンガリー各地の歴史的建造物のみごとさなどを讃えたのであるが、ハンガリー人の多くは、良いものはすべてモナルヒア(王国)時代のものであり、それ以降にできたものでろくなものはありませんと嘆く。そして、かつてのブダペストには、ウィーンに負けない文化があったことを、悲しみをこめて振り返るのである。

観光シーズンにはブダペストに、ノスタルギア(ノスタルジー)電車というかわいらしい王国時代の電車が、チェコスロヴァキア製のがたごと電車の間をぬって走るようになった。

大道芸人たちは、中世風の衣装をまとって王宮や道で楽器を演奏する。国章には王冠が復活した。一九八八年には皇后エルジェーベト没後九十周年の特集がハンガリーの活字をにぎわした。社会主義の次は王国に戻りたいかのようである。

現実に、王制の復活を望む声が改革の中からとびだしている。

一九八九年には、ハプスブルク最後の皇后ジタ（ドイツ語ではツィタ）がその長い人生に終止符をうち、ハンガリーの王党派がしょんぼりと喪に服した。ジタはフランツ・ヨーゼフ亡き後に皇位についたカール一世の妻である。カールは退位させられてからもハンガリーの王党派に望みを託し、幾度も復位を試みたのであった。妻のジタは「王族は退位させられることはあっても、自ら王位をおりることなど決してあってはなりません」と、カールを励まし続けた気丈な皇后であったといわれる。カール亡きあとも、ハプスブルクの誇りを掲げてジタは生きた。

その息子オットー・ハプスブルクは優れた外交手腕をもつことでも知られ、ヨーロッパ議会で活躍している。オットー・ハプスブルクがブダペストを訪れると知って、ハンガリーは熱気につつまれた。この知的な政治家に賞賛が集まり、彼の肖像を掲げた歴史映画のポスターが街に溢れ、ハプスブルクの歴史が盛んに回顧されたのである。

ハンガリーの王国復活待望論は少数派の主張に留まり、実現の可能性は薄いといえるだ

ろうが、改革に揺れる現在の東欧において、ルーマニアやブルガリア、アルバニアなどでも王国の復活が議論されている。社会主義の次に王制が復活されるとしたら、人類の歴史にまったく新しい一章を東欧世界が書き加えることになるだろう。たとえ王制復活が机上の空論で終わるとしても、東欧を考える人はみな、この事態を真剣に考える必要はある。近代の西欧は、王や支配者の恣意的支配の弊害を克服する手段として、議会制民主主義というものを発達させてきたはずである。しかし東欧の民衆の中に、王様の時代の方が人びとは幸福であったという思いが存在するなら、そこには西欧と異なる何かがあり、東欧なりの精神風土があると考えざるをえない。

今までもっぱら社会主義という関心からとらえられてきた東欧世界を、専門家を含めて改めて見つめなおすべきであろう。

私は日本へ帰ってから、しばしば「赤い国で暮らしていたのですか」に始まって、そんなところへ行くからには、政治的にどんな立場ですかと遠回しに探られたりして、おおいに驚いた。日本人が東欧でまず思い浮かべるのが、冷たく硬直化した赤い国々なのだろうか。実際のハンガリーは果てしのないほどに自由で活発な議論と、民主化への意欲にわいており、しかも王国時代への憧れも渦巻いている社会だったというのに。東欧が日本人にとってあまりにも遠い世界だったことを改めて痛感した次第であった。

12――ハンガリー改革のはざまで

ドナウ河岸のハンガリー国会議事堂

民衆の熱しやすさ、冷めやすさ

ハンガリー人の口からモナルヒア時代は良かったという言葉がとびだすたびに、私が妙な気持ちになったもう一つの理由は、王国時代のハンガリーには、おびただしい赤貧の民がいたからである。社会主義政権下で、普通の庶民が別荘を持ったり、福祉厚生制度の充実を手にしたのも事実ではなかったのか。改革をになう多くの知識人にとって、社会主義時代の弊害は明らかだろうが、大多数の庶民が方向を見失ったり、取り残されてしまうなら、改革そのものが新たな不満を生み出しかねない。

我われがハンガリーに着いた頃、既にカーダール政権の凋落は予期されていた。テレビ

や新聞で目にするカーダールの姿は精彩を欠き、この指導者は廃人同様だと噂されていた。翌一九八八年五月にカーダールは失脚した。退陣後まもなく、カーダールが家に十字架をまつり、神に許しを乞う毎日を送っているという話を、夫が歴史学研究所で聞いてきた。

社会主義圏で経済改革をさっそうと掲げたカーダールは、インフレが押し寄せる以前のハンガリー民衆にとって、優れた自慢の指導者だったのである。しかし失脚したカーダールを、ハンガリー国民は鞭打った。ハンガリー動乱の責任者として処刑されたナジュ・イムレが名誉を回復されると同時に、カーダールにはナジュ・イムレ派を粛清した殺人者の罪が科せられたのである。

西側の認識では、ソ連軍の戦車と共にカーダールがハンガリーの政権の座についたのは周知の事実であった。しかし我が家の近所に住む労働者の子供たちは、こうした背景をまったく知らなかった。「カーダールおじさん」と親しみをこめて呼んできたこの指導者が殺人者だったとは驚いたと、親も子も口々にののしるようになったのだ。

むろんハンガリー知識人は、動乱の経緯を知っていた。動乱の収拾にあたってカーダールが自国の秩序回復に厳罰主義ではなく和解と寛容をもってのぞんだことは、それなりに国内外で評価もされていたのである。ハンガリー群衆対ハンガリー共産党員の流血の内乱は、ソ連の軍事介入によってさらに希望のない袋小路へつき進んだかに思われたが、カー

ダールが内乱を収拾しつつ、ソ連に対してはハンガリーの国益を守り、三十余年にわたる政権下で、ハンガリーに安定と活気を生み出したことが評価されていたのではなかったか。

ただしハンガリー知識人、ことに反体制派は、カーダール政権が内実は密かに国内の反対者たちを圧迫し続けていたことを事実として知っていた。マリカをはじめ反体制派の知人は、カーダール政権下でハンガリーが自由化を進めながらも、例えば署名活動をするなら左遷は覚悟せざるをえないとか、デモを企画した仲間が拘留されたとか、反体制派は要職につけない、という状況を、我が夫にも説明してくれた。だからマリカたちは、チャウシェスクと共にカーダールに対しても、独裁者という表現を用いていたのである。

こうした生粋の反体制派知識人が、カーダールを公然と非難するのは納得できたし、ハンガリーのために必要なことでもあるが、カーダールが健在な時に彼を支持していたはずの大衆までが、カーダールを殺人鬼よばわりする風潮を、私は重苦しい気持ちで眺めていた。

日本も辛い敗戦の中で、戦争の責任を一部の人だけの罪にしようとしていたことはなかったろうか。さらに私の子供時代には、いわば戦後の日本コンプレックスといったものが濃厚であった。何かにつけて「西側先進国では」という言い方がされ、日本はすべてが劣っているかのような風潮があった。現在の日本にみなぎる大国意識と、なんと違っていた

ことだろう。こんな子供時代に、私は声高な人より静かに日本を考える人に惹かれていた。日本の子供として、自分の国の価値を探し求めていたといっても言い過ぎではない。歴史はあと戻りしない。あとから都合よく書きかえることもできない。人間は自分の生きる時代に対し、自己の姿勢という責任を負っているといえるだろう。

私はハンガリーで、民衆の熱しやすさと冷めやすさを目のあたりにして、この中からいったい何が生まれてくるのかと注目していた。昨日の社会主義と今日の改革という、自国の歴史的経緯をハンガリー人はどう結びつけていくのだろう。

党……教会……

ハンガリー改革のゆくえは混沌としていた。現在も混沌は続いている。民主化がおもうように達成されなければ、王国の復活ばかりでなく、いつでもまた共産党時代の安定に戻ろうと望む声が高まる可能性も続いていた。一九八八年のハンガリー社会は、改革への期待に渦巻いていた。翌一九八九年には、希望をふきとばしかねない勢いで経済的混乱が日常生活に押し寄せ、人びとは改革諸派の政争に対して、「いつまで議論ばかりしているんだ」と言うようにすらなっていたのである。

夫の旧友ラツィには、ことさら辛い時である。彼は社会主義の理想に燃えた労働者であ

った。社会主義の成立を平等な社会実現への機会到来と喜び、筋金いりのコミュニストとして活動した。彼は誠実一点張りの労働者だった。しかし現在の改革が始まると、コミュニストは激しい非難の対象となった。確かに特権的な党の腐敗はあった。だがラツィは自分の利益のために社会主義を利用したことはない。党の腐敗に対しては敢然と内部批判を恐れなかった。頑固な職人気質を持つラツィにはまた、ハンガリーの新しい知識人というべき労働者出身の知的な妻がいる。子供たちはそれぞれ適性をいかして職人と学生になっている。ラツィ一家は我われにとっても信頼すべきハンガリー人に思える。

しかしラツィは今、苦しんでいる。ラツィの苦悩は、他人からコミュニストとののしられ始めたことよりも、自分が信じて人生をかけてきたことがなんだったのかという困惑である。

我が家にきていた音楽家のことも述べておこう。

二十五歳のヴェドレシュ君という青年である。ヴェドレシュ君の両親は、二人ともコミュニストであった。父親はすでに亡くなっていたが、理想家肌の人物で、党員に対する特典を拒否し続けたという。いっぽう彼の母は現職の小学校教頭である。党員になる前は純朴な農民だった。美声をいかして音楽教師となった彼女は入党し、党員の特典として教頭の役職に抜擢された。未亡人となっても生活は安定していた。それが突然、改革とともに

非難と混乱の中に放りだされたのである。信念に燃えたコミュニストでなかった彼女は、改革と同時にたちまち何を頼ったらいいか途方にくれたのであった。

ヴェドレシュ君自身は母の影響もあって、ひどいコミュニズム不信におちいっている。自分の才能を信じ、作曲家兼ピアニストとして活動しているが、現在のハンガリーでは政府が音楽家に対する助成を行っていない。ヴェドレシュ君は国内で得る収入だけではとても暮らしていけず、時々西側に招かれて演奏費用を稼いでいる。昼は作曲家、夜はビルの掃除夫という毎日である。独立したいが、乏しい収入のもとで、母と別の住居を持つことは不可能だ。住居が確保できないのでは、結婚もおぼつかない。現在のハンガリーでは、年金生活者とともに、住居と仕事を持てない青年層の赤貧が、大きな社会問題となっている。

ヴェドレシュ君は農民である祖父母にならい、カトリック信仰を支えとするようになった。教会はかつて、貧しい家の子供たちに身分社会の壁を越える道を開いていた。貧しくても有能な若者には、教会が教育や出世の機会を与えた。「昔は教会が僕たちのような貧しい音楽家を保護してくれた。社会主義が教会を弾圧し、教会財産を没収したことを、僕は心から憎む」と、このコミュニストの倅(せがれ)は言ったものである。

私はヴェドレシュ君にしばしば「教会から、過去にどれほどの芸術家が理解されなかっ

たことか。あなたの独創的な作曲が今日の教会にだって受け入れてもらえるとは限らないでしょう。歴史にうとい音楽家はとっぴょうしもないことばかり考えるのね」と言い、議論ばかりしていた。ヴェドレシュ君とのつきあいは相当くたびれるものだったが、彼を通じて、ハンガリー社会に流れる素朴で根づよい思考形態をみる思いがしていた。その意味で、彼もまた貴重な友人であった。

民主主義への迷い

彼は知り合ってかなりたってから「僕は音楽家になる前は、大学で歴史学を専攻していたんだ。ナチズムに興味があって図書館でナチズム関係の本ばかり借り出したから、図書館員は脅えたように僕をみたものさ。僕は黒が好きで、何からなにまで黒ずくめの姿で大学へ通っていたからね」と打ち明けて苦笑いした。彼はハンガリーにおける社会主義成立の遠因をナチズム時代に始まると考え、歴史の中にハンガリーのゆくえを探し求めた。しかし歴史は自分に道しるべを与えてくれないと失望して、音楽高校に再入学したそうだ。

話していても、この青年は十分に知的な素養をもちあわせていた。ハンガリーでは党員の子弟がコネで大学に入学するため、コネのない秀才が不合格になることは稀でなかった。例えば夫の大学の同僚も、優秀な娘が大学入学に失敗したことを納得できずに大学に抗議

したところ、彼女は最高点をとっていたと判明し、改めて入学を許可された。
ヴェドレシュ君はおそらく党員の子の特典としてではなく、自力で大学へ進んだのであろう。ただ彼の場合、知性は文句なしにあるとしても、ものを論理的に構築する訓練ができていなかった。それは彼自身のせいだけとは思えない。彼は歴史に関して、事柄と年代については年表のように正確な知識を持っているが、そのおびただしい事実をどう解釈するかという、歴史学の本質的な訓練を受けたことがなかったのだ。これに比べ、伝統的なハンガリー知識人の家庭では、親が子供に、教科書に書かれている歴史とは違った歴史を教え続けてきた。教科書にはこう書いてあるけど、それは本当はこう読みとるのだよという具合に。
コミュニストの家庭に生まれたヴェドレシュ君は結局、社会主義の歴史教科書も信じられなかったし、だからといって違う視点で歴史を眺めることもできずに、大学を出奔したわけである。大学ではいつも孤立していたそうだ。さらに音楽高校では先生たちから「君は大作曲家になる素質がある」と太鼓判を押されたにもかかわらず、ジャズにひかれて、ハンガリーにおけるクラシック音楽の最高峰であるリスト音楽院への進学をけったのである。
キリストに捧げたヴェドレシュ君のミサ曲は、中世から現代音楽までのあらゆる様式を

凝縮した独創的なものだが、リスト音楽院の先生たちは、様式の混乱に眉をひそめたそうだ。ヴェドレシュ君に言わせれば、音楽院の方が権威主義的で旧弊だという結論になる。

彼のことを考える時、一人の中国青年の姿が私の中で重なる。H君というこの中国青年は、文盲の貧しい両親の子であった。しかしH君には作家の才能があり、みごと大学に進んだ。出自に関係なく能力ひとつで高等教育を受けられたのは共産党時代に生まれたおかげじゃないの、と私が聞くと、H君はまったくそうではないと否定した。

「大学は知識人の子ばかりだ。彼らは幼い頃から親に教育され、初めから僕たち貧民の子とは知識の豊富さが違う。だから僕は、知識人の子の何倍も独学しなければならなかった。大学の文学部で文盲の両親を持つ労働者の子は、僕ともう一人いただけだよ。昔の中国には科挙試験制度があって、能力さえあれば、どんなに貧しくても教育をうけ、高位高官にだってなれた。僕は皇帝がいた昔の中国に生まれたかった」と彼は言ったものだ。

国籍は違っても、中国とハンガリーのこの二人の青年には、溢れるような才気と、伝統的な知識人に対する気おくれが共通している。そして創作と生活苦のはざまで、王様や皇帝、教会や大貴族など、いにしえの芸術家の保護者に憧れる、一足とびの歴史解釈も共通していた。

またヴェドレシュ君は「大学には好きな先生もいた。その人は民主主義者で、あらゆる学

生に平等であろうとして気をつかっていたが、時にはそれで収拾がつかなくなることもあった。民主主義はハンガリーになんの意味を持つんだ。大衆の意思はその時々で変化する。多数の意見に従うという民主主義とは、つまるところ衆愚政治に陥るものではないだろうか。それより僕は、カトリック時代のハンガリー社会の方がすばらしかったと確信しているよ。カトリックのヒエラルヒーの中で個々人は自分の位置がはっきりしており、何を信じるべきかもはっきりしていた。何より人が謙虚だったからね」と述べたものである。

民主主義は衆愚政治につながるという懸念や、超人的な政治家の出現を望む気持ちは、案外ハンガリー人の心中に強いように思われる。

ハンガリー人が民主化を模索する中で、たとえばマリカのような直情径行の知識人は、どの政治家が「民主主義の担い手として信じられるか」という考えかたをした。これだと思うとひたすら信じ、その政治家や政党がゆきづまると、がっかりしながら次の信仰の対象を探すのである。

隣国チェコスロヴァキアの初代大統領マサリクは、「民主主義とは健全な批判精神をもつことである」と建国の理想に掲げた。マリカたちを見ながら、私はこのマサリクの言葉をしばしば思い出した。

人間は完全無欠というわけにはいかない。民主主義とは、結果そのものだけでなく、そ

れを生み出す経緯の中にも存在する。多数の意見に従うというルールがないとはいわないが、結論を出すまでにどれほど多様な意見を尊重し、議論をつくすかという過程が大事ではないのか。また、結論を出したのちも、過ちを正す機能があるかどうかは、民主主義の重大な試金石である。

改革の中でハンガリーには、あっというまにおびただしい新政党が誕生した。一党独裁体制以前にあった旧政党もいくつか復活した。日本からの報道陣を迎えて、夫もハンガリー諸野党を探訪した。「これからは民主的にすべてを語りあおう。なんでも率直に述べてください」と始まったある党の結成式が、閉会時には党員の幾人かを少数意見の反対分子として除名したという嘘のような話がある。また、最も有力視されていた野党「民主フォーラム」を取材した夫は、同党には誠実な知識人や芸術家が多いが、現実の政治にどれほど実行力があるかは疑問だと首をかしげた。

この「民主フォーラム」が改革でハンガリーの第一政党になったわけだが、民主フォーラムは「自由民主同盟」とその若手組織「青年民主同盟」を、ユダヤ人組織として暗に非難し続けている。夫が最も注目した改革派の若手研究者たちはこの自由民主同盟であった。彼らは西欧型の議会制民主主義と市民社会をめざし、その緻密な論理は国外にも普遍的な説得力を持ちうるもののように思われる。夫に彼らの活動を紹介したのは、ハンガリーの

名門出の知識人であってユダヤ系ではない。民主同盟はこうした多くの知識人に支えられている。しかしユダヤ的というレッテルを貼られるだけで、ハンガリーでは民衆の支持が後退するほどの影響力をもつのである。

私には現在のハンガリー政治情勢を判断するような知識も能力もないが、正面きっての政治論争ではなく、ユダヤ的などという批判がまかりとおる状況は、健全なものとは思えない。

ハンガリー人で溢れるウィーン

正直いって、ハンガリーの改革は一寸先が見えにくい状況にある。しかし改革が実際に生んだ成果の一つに、旧宗主国オーストリアとの関係がある。永世中立国オーストリアは、ハンガリーがまっさきに門戸を開くことができた国であった。

我が家はオーストリアへ出かけ、首都ウィーンがハンガリー人に占領されているありさまを見て仰天したのである。

一九八七年のクリスマス間近、ウィーンの街は買い出しのハンガリー人で溢れていた。ハンガリー生活に慣れ始めた息子が隣のオーストリアはドイツ語の世界だと聞き、例によって「言葉の通じないところへは行きたくないよ」を繰り返したのであるが、ウィーンの

繁華街マリア・ヒルファー通りにハンガリー語が飛び交うのを耳にして「なんだ、ここはハンガリーの町じゃないか」と安心したものである。

クリスマスでキリスト教世界の人びとの財布のひもがゆるむ頃、ハンガリー人が続々オーストリアにくりだした。ヨーロッパで最も物価が高いはずのウィーンですら、コーヒーやビール、洗剤や衣類、靴など、ハンガリーよりも安く買える物があることにハンガリー人は気づき始めたのだ。

そしてオーストリアには、憧れのバナナやオレンジもある。食料は豊富なハンガリーでも、年に数回しかバナナを見かけず、長い行列ができた。オレンジは社会主義国キューバから輸入する青い未熟なものだった。オーストリアの店頭に並ぶのは赤く熟したオレンジと黄金色のバナナである。ハンガリーのおばあちゃんたちの切ない願いの一つは、孫にバナナを食べさせてやりたいというものだった。

ウィーンをはじめ、ハンガリー国境に近いオーストリアの町や村には、ハンガリー人相手の店があっというまに増えた。電気製品に衣類や靴、コーヒーとバナナなどを店頭に飾るなんでも屋さんが並び、「ハンガリー語でお買物できます」という看板だらけになったオーストリアの町や村に我われも笑いを禁じえなかったものである。高級車がめだつウィーンにはハンガリーナンバーの東欧圏の車が渋滞をつくり、黒い排気ガスをまきちらした。

ウィーンに住むマサコが、ウィーン子はハンガリー人に町が占領されたようで、この現象を必ずしも快くは思っていないみたいと言った。オーストリア政府も迅速に手をうった。国境近くに巨大なスーパーマーケットの開店を認可し、混雑を緩和したのである。店員にハンガリー人を雇ったオーストリアの店も多い。

またウィーンのある市場では、そこに働くアラブ人たちがにわかじこみのハンガリー語を話すまでになった。「ハンガリー人たち、やすいーよ、やすいーよ」というアラブ人のかけ声に、息子は「あれれ、変なハンガリー語しゃべってるよ」と吹き出した。アラブ人の店員たちはハンガリー人の欲しいものをよく知っており、ハンガリー語のかけひきも巧みに、手際よく売りさばいていたのである。

以前から、ハンガリーの物価の安さに目をつけたオーストリア人や西ドイツ人がハンガリー国境の町にきて散髪をし、ハンガリー料理に舌つづみをうち、安いガソリンで車を満タンにして帰る姿がたくさん見られたそうだ。これはオーストリアへ自由に行けなかった当時のハンガリー人にとって腹だたしいことだった。今はハンガリー人も自由にオーストリアへ買い出しに行ける。両者の関係が互恵的になったのである。

我が家の場合、夫はハンガリーの研究所から正式の招待をもらってハンガリーに滞在していたが、私と息子はめんどうな滞在許可を申請するよりはと観光ヴィザでハンガリーに

入国し、観光ヴィザによる滞在許可の一ヵ月がきれるたびに、ウィーンのハンガリー大使館へ行って観光ヴィザを更新するという生活であった。

ブダペストを朝に出発すると、昼前にはオーストリア国境に着く。オーストリアに近いハンガリーの町はドイツ人相手の民宿やレストラン、おみやげもの屋さんがたち並び、ドイツ語の看板や標識が目立つ。

国境にはハンガリー人の買い出しの車が行列している。ハンガリー国境警備兵が車両ごとに全員のパスポートを調べ、ハンガリー人にはオーストリアへ出国する際の条件となっていた必要な西側外貨の提示を求める。西側の人間には、ハンガリーの通貨フォリントを多量に国外へ持ち出さないか調べた。ハンガリー人の買物熱が最高潮に達する時期には、ハンガリー国境の列で最低三時間は待たされた。

数時間後に、くたびれはてて目前のオーストリア国境へ進むと、パスポートの中身も調べず、さっさと行って下さいという顔でオーストリア国境警備兵は国境を通してくれる。社会主義国と中立国ではこれほど国境の高さが違うのかと痛感したものである。

国境を越える人、物、金

ドイツ語の看板で溢れる国境沿いのハンガリーの村を過ぎ、ようやく国境を抜けると、

今度はオーストリアにハンガリー語の看板が広がるのだから、おもしろいことこのうえなかった。
　また、ウィーンの店に東洋の扇が飾られているので懐かしく眺めると、数ヵ月後にはブダペストに同じ扇飾りの店が現れた。ウィーンの扇は本物、ブダペストのは紙をたたんだ本物ふうの手作りというぐあいで、ウィーンの流行を盛んにハンガリー人がまねしはじめたのだ。西側外貨を潤沢に入手でき、オーストリアへ頻繁にくりだせるような立場のハンガリー人にとっては、ひともうけのチャンス到来である。ウィーンの流行を複製したり、安い西側製品を買ってハンガリーで高く売りつけることができた。
　こうした状況の中で、若者たちは西側の装飾、服飾品や電気製品をなんとしても手にいれたかった。またハンガリーの子供たちも、「これはウィーンで買ったおもちゃだぜ」と友達にみせびらかしたりしはじめた。国境が開かれたのは喜ぶべきことだが、必ずしも人間の心に良い変化ばかりをもたらしたわけではなかったのだ。
　忘れられないのは、ウィーンでチェコスロヴァキア製の自転車を買ってもらった子の話である。その子の父親は、よくめはしのきく人で、東欧圏諸国を旅行しては、各国の優れた製品を上手に買っていた。これは、東欧圏の庶民がかなり一般的に行う方法であった。チェコスロヴァキアや東ドイツの子供用品、工業製品、ハンガリーの食品などは、東欧圏

の各国民を相互にひきつけあっていたのである。
しかしこのハンガリー人一家が、安くて高品質のチェコスロヴァキア製自転車を手にいれたのはウィーンであった。チェコスロヴァキア本国へ行っても自転車が安いという印象はなかったし、だいいちこれほどしっかりした製品を店に置いてなかったそうだ。またあるスロヴァキアの婦人は、ウィーンからきた客人が見たこともないほど美しいスカーフをしているのでうっとり眺めると、裏にチェコスロヴァキア製と書いてあって、びっくり仰天したという。
東欧圏ではこれまで、国内用や社会主義圏用とは別に、西側に向けて、とりわけ念をいれた質の良い製品を作って輸出していた。その結果である。オーストリアへの国境が開かれたことによって、ハンガリー庶民は不平等な現実を改めて直視させられることとなった。またハンガリー政府が国内の需要を抑えるためにかけていた高額の関税についても、不満をつのらせる結果となった。
ハンガリー人がオーストリアへ出国する際に、従来は持ち出せる西側外貨に制限があった。ハンガリー人は三年間に百ドルまでハンガリー通貨フォリントを西側外貨と交換する権利があった。逆に西側の人間は、ハンガリー国内に入ってからしかフォリントと両替できなかったうえ、ハンガリーを出国する時点で三百フォリント以上は国外に持ち出せない

しくみであった。改革が進む中で、ハンガリー人はさまざまな手段で西側外貨を手にいれ、懐にしのばせてオーストリアへ買い出しに行くようになった。

いわゆる闇ドル市場というものがあり、我われもよく道で「有利に両替しますよ」と声をかけられた。ハンガリーは自国の通貨開放を進めていたため、闇ドル市場は他の東欧諸国より小規模だったが、市場を支配するのはポーランド人とアラブ人だと言われていた。人種的な偏見もまざっていたろうが、ハンガリー人は、とりわけアラブ人が、公的な留学生のくせに闇市場を牛耳っていると非難していた。

このような状況を見て、私は戦後の日本にもあったという外貨持ち出し制限や闇ドル市場とはどのようであったのかと、歴史を逆もどしに見ている気分を味わった。

夫がウィーンの銀行で、ある時、旅行者がフォリントを買っている光景に驚いた。フォリントが国際市場で自由に売買できるようになる直前のことであったが、オーストリアの銀行で、ハンガリー国内で両替するより有利な交換率でフォリントが売られたのである。客にフォリントを渡す時、銀行員が「ハンガリー側の規則では、こうしたフォリントを持ち込めないということをお忘れなく」と注意していた。銀行としては需要があればフォリントを売るが、おおっぴらにハンガリーへ持ち込まないで欲しいというわけである。

その後、オーストリアの両替商や銀行で、ハンガリー人が持ち出せないはずの多額のフ

ォリントを、堂々と売っている姿をたくさん目にした。オーストリアの金融機関は平然とフォリントをうけとり、ハンガリーへ行く西側旅行者に有利な率でそれを売った。むろんこれはハンガリー国家にとっては違法なことだったのだが、国家間のとりきめより先に、人びとの意志が国境を越えて活躍するありさまに、地つづきのヨーロッパを実感させられたものである。

13——チェロをもらった話

ブダペストのオペラ座

徴兵をまつアッティラ

読者はエステル一家のことを覚えて下さっているだろうか。夫に出奔され、五人の子をかかえて病に倒れた音楽教師のエステルである。我が家がトランシルヴァニアやオーストリアへ行ったり、マリカとのやりとりで右往左往している間も、ビアトルバージュではエステル一家が夫の帰りを待ちわびる日が続いていた。

長男のアッティラは専門学校の最終授業を終え、徴兵までの数ヵ月を暗い気持ちで待機していた。徴兵に息子を送るハンガリーの家庭はいずこも不安な気持ちでこの時期を過ごす。現実の戦争が予期されるわけではなかったが、軍隊では思わぬ事故が起こるという噂

があった。防水布にくるまって野営中のハンガリー兵士が、夜間訓練中のハンガリー戦車に間違って轢き殺されたという事件などが実際にあったのである。ただでさえ軍隊生活は過酷なものだと言われていた。

アッティラは信仰の厚い、澄んだ目の青年だった。それが徴兵をひかえた数ヵ月で、別人のように太り始めた。近づきつつある恐怖をまぎらすために、彼はやたらと食べ始めたのである。

アッティラの過食の原因は、肉体労働のせいもあった。家に少しでも多くお金を入れるため、アッティラは工事現場のアルバイトをしばしば見つけていた。またアッティラは家で、父が放り出していった水道の配管と二階の建築を手がけていた。そのうえ病気の母をいたわりながら、エプロンをかけて家事にも精を出した。

私がエステルを見舞ったある日、痛む足をひきずりながら、エステルが山のような洗濯ものと一人で悪戦苦闘していた。井戸から水をくんで浴槽とたらいに満たし、洗濯する。濡れて重い洗濯物を、今度は手回し脱水機にかけるのである。手伝いながら、子供たちにも自分のものくらい自分で洗わせたらどうかと私が言うと、エステルはこれは女の仕事であって、男の子にはやらせられないと答えたのである。

一般にハンガリーの男性は家の補修や庭仕事、買物などをよくやるが、料理、洗濯、育

児、掃除は主婦の分担である。主婦といっても、男性と対等に職場で働くハンガリー女性にとって、これはかなりきついことに思われる。毎日の掃除の他に、ハンガリーの主婦の多くは週に一回、徹底的に住居を磨きあげる。インスタント食品や半調理食品は普及していない。肉も野菜もキロ単位で売られるため、買物かごはいつもずしりと重い。日用品や食品の宅配制度というものはない。

美しいハンガリー娘が、中年以降は身なりもかまわず、ぐっと老け込んだ感じになるのは、こんな事情が原因となっているのかもしれない。

音楽家をめざす四人の息子にはまったく家事をさせないエステルが、長男のアッティラにだけは家事をすすんでまかせた。アッティラは母のために喜んで家事をやっているようにも見えたが、反面、どこかで女の仕事をすることを恥じており、他の兄弟たちをけわしい目で眺めることに、我われも気づかずにはいられなかった。マリカの説明によると、父のラヨシュは強い男に育てるため息子たちに手仕事をしこもうとしたそうである。しかしエステルは、音楽家には繊細な手が必要であると言って、力仕事をなんとかやめさせようとした。

エステルは早くに長男アッティラの音楽的才能にみきりをつけていた。アッティラだけは父と一緒に力仕事をすすんでやり、いつも父にまとわりついていたそうだ。だから父の

ラヨシュが出奔した時、最も痛手をうけたのがアッティラであった。十五歳だったアッティラは、幼い弟たちが事情をのみこめないでいる時に父を捜して放浪し、親類にひきとられていたそうである。

庭に水道設備を作るアッティラの姿を見て、我われはこのたくましい青年の心には何があるのだろうかと胸を痛めた。アッティラがトロッコで粘土質の重い土を掘っては運ぶ姿が孤独に映り、我われもトロッコを一緒にひっぱった。すると下の弟たちも庭に出て手伝い始めた。音楽家はよしなさいと言うと、こんなことはなんでもない、お母さんが許してくれれば毎日だってやりたいんだと弟たちは答え、エステルの考えは古めかしくて、男と女の仕事を峻別することに内心は反発を感じていると言った。

アッティラ自身はこういう技術的な手仕事が好きで、いろいろと自分で工夫をこらす特別な才能にも恵まれている。彼には、兵役が終わったら専門学校で学んだ技術を生かして技師になりたい気持ちと、養護施設で子供の世話をする職につきたい気持ちがあいなかばしていた。寂しい子供の身になって働きたいからだ、とアッティラは言った。徴兵前にハンガリー青年が確保しておくガールフレンドも、彼にはいなかった。

アッティラ、西ドイツへ

徴兵が近づくにつれアッティラは別人のように精彩を失っていった。弟たちとも喧嘩をするようになり、家族の中で孤立を深めていったのである。そうしたおり、アッティラは卒業の最終試験がまだ残っていて、数学が合格できないかもしれないと打ち明けた。そこで、家庭教師には腕に覚えのある夫が、数学を教えてあげると申しでた。二人で数学の教科書に取り組んでいる姿は微笑ましかった。アッティラの目が輝いている様子、夫に頼っている様子を見ると、アッティラがどこかで父ラヨシュの姿を夫に重ねているのが伝わってきた。

最終試験に合格したアッティラは、青年らしいはつらつとした美しさをとりもどしたかに見え、お礼にタカシの世話をさせて欲しいと言いにきた。ハンガリーではベビー・シッターの制度がなかった。やむをえぬ事情でタカシを家に残して外出する時は、大学の学生会に連絡したが、学生会の方も条件や人選に手探りの状態だった。そこでアッティラは、我われ夫婦が留守にする夜など、タカシの子守をしにきてくれるようになったのである。

私自身も、エステル一家に自分の役割をみつけていた。三番目の息子、十七歳のジュリが、トランシルヴァニア救援のチャリティーコンサートで、彼が弾くチェロの伴奏を私に頼んだのである。今までは子供たちの伴奏をエステルがやっていたが、エステルは病気で

練習ができないと言う。小さなコンサートで小曲を二分ほど伴奏するだけだから息子のためにお願い、とエステルは説明した。私が耳にするエステルのピアノ演奏は、とても上手とはいえない状態だった。音楽家をめざす息子たちは、母が療養している間にも、刻一刻と専門家への道を進んでいる。私は練習まではつきあうが、本番には本物の伴奏者を見つけてあげようと申し出た。先にふれた、コミュニストの息子であるヴェドレシュ君のことが念頭にあった。近所の子たちに誘われて小・中学校の学芸会に行った時、コーラスの伴奏をするこの青年の際立って美しい音色に目をつけていたのである。

こんな具合に、エステル一家との交流は日増しに深まっていった。一人っ子のタカシはおにいちゃんたちが大好きだった。しかしエステル一家との関係が無残にこわれたのは、それから間もなくであった。そのいきさつを次に語るが、完全に疎遠となったエステル一家について、アッティラの消息だけは確かなことを耳にした。

彼は徴兵に行く直前に、西ドイツに住む親類からの招きで徴兵をまぬかれ、西ドイツへ働きに行ったのである。その親戚が経営する家内工場で跡継ぎの息子が大けがをしたため、ハンガリーのアッティラに声がかかったという。ハンガリーからの出稼ぎ労働者はドイツ人より安い賃金でも喜んで働く。おそらくはそればかりでなく、身内同士が助けあうというハンガリー人の特別に深い肉親の情が、国境を越えてアッティラに白羽の矢を立てさせ

たのであろう。
家族の中で一番目だたぬ役割を当てられ、かすんでいたアッティラがこれで、西側外貨を一家にもたらす大きな存在となったわけだ。それを知って我われは、遠くからアッティラの幸福を願ったのであった。

「弦が切れそうだ!」

エステルの次男はアンドラーシュといい、ミシュコルッという町の親戚のもとで音楽高校へ通っていた。アンドラーシュはヴィオラ奏者である。
ある日、アンドラーシュからエステルに手紙がきた。高校の卒業試験が迫っているのに、ヴィオラの弦がすっかりすりきれて、このままでは試験を受けられないというのである。我われは事情がよく理解できなかったのだが、現在のハンガリーでは、弦楽器の弦を手にいれるのが至難のわざだとエステルが説明してくれた。楽器店に売っている弦は質が悪くて、専門家が使える代物ではないのだそうだ。
我が家は毎月オーストリアへヴィザを更新に行くので、ついでにウィーンで弦を買ってきてあげる約束になった。早朝にブダペストを出発し、ウィーンで弦とヴィザを手にして夕方ビアトルバージュへ着くと、アンドラーシュから「弦がもう切れそうだ」という悲鳴

にも似た手紙が届いたばかりだった。夫はすぐさま車で二時間のミシュコルツへ向かい、その夜、アンドラーシュに弦を渡すことができた。

三男ジュリはチェロを、四男ラースローはヴィオラを専攻しており、彼らもまた試験をひかえて弦が必要になった。我われも二度、三度とウィーンの楽器店へ買い出しに行ったのだが、一度はまちがえてヴァイオリンの弦を買ってしまった。エステルの息子たちは、ウィーン製の弦なら音楽高校でヴァイオリン科の友人が喜んで買ってくれると言う。だけど普段はいったいみんなどうやって弦を調達しているのと、我われがたずねると、彼らはこう説明してくれた。

専門家用の弦は西側製なので、ドルか西ドイツ・マルクもしくはオーストリア・シリングを持っていけば、ハンガリーでも楽器店によっては奥から西側製の弦を出してきて売ってくれる。ただしその値段は法外に高い。また音楽家は知識人が多いので、西側で働いている親戚に頼んで、弦を手にいれる子もいるそうだ。音楽家になるためには、能力以外に、こうした種々の制約を克服しなければならないのだという。

ハンガリーからコチシュ、ラーンキ、シフという天才的なピアニストを一挙に輩出して、世界に冠たるハンガリー音楽の実力を示した時期がある。しかしその後、ハンガリー政府が音楽家養成に対する助成を停止したので、多くの才能ある音楽家たちが悪戦苦闘してい

る。
弦楽器の弦についてはこのようなありさまだし、ピアノの絶対数も不足している。ヴェドレシュ君はハンガリーでおこなった五十回のコンサートのうち四十八回まで、コンサート・ホールのピアノがこわれかけた代物だったと嘆いている。むろん有名な演奏会場には立派なピアノがある。しかしそこで演奏できるような名声を博すまで、音楽家をめざすハンガリーの子供たちは、劣悪な条件の中で練習を続けている。
これがハンガリー音楽界の悲しむべき内実である。かつてハンガリーの大貴族エステルハージー家は、音楽家ハイドンのパトロンであり、ベートーベンを援助したことでも音楽史に名を残しているというのに。

演奏会もいま一歩

良い音楽会の切符を手にいれることも難しい。ハンガリーに限らず社会主義圏では、コンサートや劇場の切符が西側より安いことで知られていた。以前のハンガリーでは五十フォリント、日本の感覚でいえば五百円ほどで切符が手に入った。現在では、有名な演奏家の切符は二百フォリントはする。しかも西側からくる一流演奏家の切符は、事前に買い占められて、ダフ屋が千フォリントという法外な値段でさばくのである。音楽高校でも、切符

を横流しして商売に精をだす学生がいるそうだ。
ウィーンには、日本の音楽留学生の一群がいる。日本の経済力は、日本の音楽家の卵たちを、本場へどんどん私費留学させることができるようになった。ハンガリーのリスト音楽院やコダーイ音楽院にも日本人留学生の姿が多くなってきている。現在の日本ではプロの演奏家に限らず、アマチュアの音楽愛好家も世界の超一流といわれる楽器を入手することが稀ではない。
一方、リスト、コダーイ、バルトークなどを生んで、世界の音楽界にその名も高いハンガリーの内実はこのようなありさまだ。ハンガリーの演奏家にとっては、西側の仕事を獲得するのがきわめて真剣な生きる手段となっている。西側で演奏することはハンガリーの音楽家にとって、経済面だけではなく、さらに大きな意味を持っているような気がする。
近代化以降の日本の知識人にとって、西洋音楽は教養の一部であった。しかしヨーロッパ人にとって、ヨーロッパのクラシック音楽を聞くことは何より楽しむためである。見事な演奏には聴衆が身をのりだし、熱狂的な拍手が自然とわきおこる。しかし現在のハンガリーの音楽会には最高の聴衆というべき伝統的な音楽愛好家が少なくなり、会場が一種の社交の場と化している。むろん王様の時代に音楽会は社交の場でもあった。
しかし、本当に音楽が聞きたくて切符を買う市民がハンガリー音楽を支えた時代は揺ら

いでいる。ハンガリーで最初に行った音楽会では、絶え間なくおしゃべりする少女たちに悩まされた。静かにしてと合図したら、鼻先であしらわれた。この話に同情したマリカが、ハンガリーの誇るコチシュの演奏会の切符をくれたが、その演奏会は大きな会議場で行われて、音楽家にとって納得のいく場とは思えなかった。

有名な演奏会の多くが、この会議場で行われる。音楽会の採算をとるには、この大会議場がむいているのだ。ここには、目もあやなドレスの婦人たちが行き交う。新しいハンガリーの金持ちにとって、この会議場は恰好の社交の場となっている。タキシードに身をかためた父子が、緊張しきって隣に座っていたこともある。息子の方は蝶ネクタイが苦しいようとうめき続け、父親はがまんせよと演奏のあいだじゅうささやき続けた。

我われが、心から音楽を楽しむ聴衆ばかりの演奏会にであったのは、小さなホールで五十フォリントの入場料を払った時など数えるほどしかない。音楽家にとって、良い聴衆の確かな批判で鍛えられることも必要であるが、現在のハンガリーでは、本物の聴衆が演奏会の切符を手に入れにくくなっており、むしろ成金や観光客が有名な会場に溢れるようになっている。

ハンガリーの新しいタイプの聴衆が、音楽会のマナーや良い耳を獲得するまで、少し時間がかかりそうな気がする。

ジュリのチェロがこわれた

ハンガリー音楽の内情に驚きながらも、私はジュリとチャリティーコンサートの準備を続けていた。次男のアンドラーシュは卒業試験にみごと最優秀で合格し、ブダペストのリスト音楽院へ通うこととなった。ジュリと四男ラースローもリスト音楽院をめざす。

毎年ごくわずかしか生徒をとらないこの音楽院に入学することは至難のわざであり、またハンガリーにおける音楽家の登竜門となっている。音楽院には演奏家部門と教員養成部門があり、エステルは若き日に教員養成部門で学んだが、ラヨシュと熱烈な恋愛におちて、卒業を前に音楽院を退学したのだった。それでも、リスト音楽院に在籍したことは彼女の誇りである。

だがエステルは専門家をめざす息子たちの伴奏者として、すでに力不足ではないかと私は感じた。音楽院の教員養成部門は、あくまで学校教師を訓練するものだ。息子たちはより高度な演奏家の道を歩み始めている。エステルは幼児の音楽教育には天才的な教師だが、しばしば伴奏者として息子たちの足をひっぱる状態になっていた。ヴェドレシュ君という優れた演奏家と知り合うことで、エステルの子供たちみんなが飛躍するのではないか、苦労して子供らを音楽に進ませたエステルも報われると、私は思いこんだのである。

そうしたある日、ジュリのチェロがこわれてしまった。マリカが友人に頼んでジュリに使わせていた借り物のチェロだったので、大金をかけて修理することになった。新しいチェロを買う余裕が一家にはない。

この時、ちょうどブダペストへきていたマサコが、ウィーンの彼女の下宿先には、使っていないチェロがあるはずだと教えてくれた。まもなくウィーンに戻ったマサコの手紙で、下宿先の大家さんがこのチェロをジュリに貸してもよいと言ってくれたと知らせてきた。

そこで問題となったのが、どうやってこのチェロをハンガリーに持ち込むかである。

ハンガリーでは、優れた楽器に番号がつけられており、国境を越える時には、それが記録される。ハンガリーから持ち出した楽器を、必ず持ち帰るように手配されているのだ。逆に国外からハンガリーに楽器を持ち込む時にも登録され、ハンガリーを出国する際は、その楽器の所在を明らかにしなければならない。もし外国から楽器を寄贈された場合には、もらったハンガリー人に高額の税金がかけられる。たとえ私が自分のものとしてウィーンのチェロをハンガリーに持ち込んでも、私がハンガリーを出国するたびに、必ずそのチェロを持って出なければならないわけである。

リスト音楽院の受験をひかえたジュリにとって、毎日の練習にチェロは不可欠だ。チェロを借りたとして、どうやってウィーンからブダペストへ持ち込むかと我われも悩んだが、

妙案は浮かばない。考えてばかりいてもしょうがないから、ジュリを連れてウィーンに行き、そのチェロがジュリの欲しいものかどうか確かめようと、私は言った。

マサコの下宿先はウィーンの名家で、昔は大変なお金持ちだったという。そのチェロは良い楽器かもしれない。ウィーンへ行くことになった。

リーゼ夫人の厚意

ロータリー奨学金をもらうマサコの留学資金は月額七万円ほどである。東京と同じくらい高物価のウィーンで暮らすのは、並みたいていのことではない。マサコにとって下宿先のシュタインホフ家が、この事情を熟知したうえで好意的な姿勢を示してくれるのは幸運である。

留学生は将来の相互理解の担い手となる人材なのだから、留学先で最低生活が保証される程度の奨学金では不十分である。書籍を買い、その国を広く旅し、文化を理解するためのさまざまな機会に触れる経済的余裕も必要である。日本にくる留学生のうち日本政府の公費留学生は、月額二十万円ほどを支給される。これは先見性のある優れた条件だといえるだろう。

逆に、日本の経済力が強くなったことで、海外へ行く日本人留学生は枠を狭められたり

時に劣悪な条件のもと、持ちだしを覚悟で渡航せざるをえない状況も生まれている。ハンガリーにいる日本の公費留学生も、渡航費や文化的催しへの参加費、旅行費用はむろん、本代やコピー代も自前でがんばっている。

マサコが下宿するシュタインホフ家は、ハプスブルク帝国の王宮家具師の家柄であった。ウィーン市内にはシュタインホフ家所有の一角があり、親戚がレストランを経営する別棟の横に、大きな五階建ての母家がある。母家の四階にシュタインホフ一家の住居があって、マサコはその一部屋を借りているのだが、この四階全体に先祖の王宮家具師が残した豪華な内装をそのまま残してある。ジュリを連れてシュタインホフ家に入った我われは、その華麗さに息をのんでしまった。

シュタインホフ家の当主であるリーゼさんは、三人の子を持つ中年の婦人である。夫と別れ、女手ひとつで子供を育てているばかりか、華麗で広大な邸宅の維持にひどく苦労している。歴史的なこの建物の保存のため、外壁の大がかりな修復が間近に迫っているそうだ。

経済的なやりくりでひとときも気の休まることがないリーゼ夫人から、貧乏なハンガリーの若者のためとはいえ、無料でチェロを借りうけるのはいささか気がねであった。しかしリーゼ夫人は、本物の音楽家になりたいと語るジュリをみつめながら、チェロを貸すの

ではなく、あげることにしようと申しでたのである。
緊張しきってジュリがかなでると、チェロは深く厚みのある音を出した。みごとなチェロであった。
リーゼ夫人は、このチェロには豊かな時代の良い思い出があり、自分で演奏することはできないが、寝室にいつも置いて時々つまびいてみるのだと説明した。祖先の華麗な遺産をいとおしみつつも、その保存が重く肩にのしかかっている夫人の自室は、他の部屋とは違ってなんの飾りもない質素さである。装飾過多の遺産に囲まれて、彼女はがらんどうの部屋にむしろ安らぎを感じている。もう何物も所有したくないと語る夫人が、このチェロだけは身近において眺める、そんないわくつきの品であった。
夢中でチェロを弾きながらジュリは、これをちゃんと使うためには弦を張り替え、修理も必要だと言った。どうしたものかと考えながら、我われはその夜、マサコがみつけてくれたウィーンの小さな音楽会に行った。教会で行われる室内楽の地味な演奏会だったが、演奏の質の高さと聴衆が心から引き込まれている様子は、私がハンガリーでそれまで味わったことのない本物の感触であった。
とりわけチェンバロとパイプオルガンを弾いた女性はすばらしく、合奏曲では合奏者をひきたて、独奏曲では教会がまさに神の場と化すほど荘厳なパイプオルガンの音につつま

れた。彼女に感嘆しながら、同時に私は伴奏というもの、本当の音楽というものをエステルの姿と重ねながら考えこんだ。地味なコンサートにもこれほどの質の高さがあるウィーンとは恐るべきところだと思い、なまぬるいコンサートしか知らないとしたら、ハンガリーの音楽家の卵たちはかわいそうだとも思った。

チエロを急いで修理する必要があるため、ジュリは演奏が終わったチエリストからウィーンの楽器修理店を教えてもらった。修理はブダペストでする方が安いというジュリに、我われはリーゼ夫人の厚意をいかすためにも、修理はウィーンでしようと説得したのだ。ハンガリーにどれほど職人技術が生き残っているか、我われは危ぶんでいたからである。ウィーンの店でおそるおそる修理を頼むと、なんとか払える額なうえ、大急ぎで修理をしてくれることになった。弦も最上のものを選んだ。マサコがすべての手はずに駆け回った。

思いきって国境突破

ジュリは費用のことを心配する。とりあえず我われが支払うと言うと、返済でエステルが精神的に追い詰められると、ジュリはもっともな懸念を口にした。

そこで、かかった費用のことは伏せて、リーゼ夫人から無償でみごとなチエロを贈られたことだけ、エステルに説明することとなった。最近は語学校をさぼりつづけている私に、

ジュリがハンガリー語を教えることで返済にかえることも約束した。
リーゼ夫人は三人の子の親であり、成長するジュリの力になりたいという無償の愛情は、我われにもしみじみと伝わってきた。一刻の猶予もできず困っている伸び盛りの子供に、お金のない留学生と貧乏な大家さんが手をさしのべて問題が解決できるなら、我われもふところ具合が寂しいなどと言っていられない。病気がなおったらエステルに真実を話し、エステルも納得すると考えたのである。
二日間、リーゼ夫人の厚意でウィーンに泊まったジュリは、子供らしい表情できょろきょろとこの社会主義的でない世界の首都を眺め、ハンガリーではあまり見かけない店員たちの微笑みにまごついた。レストランの値段に仰天しながらも、思いっきり食べてごらんと夫にうながされて、初めての西側の雰囲気と、父親に甘えるような気分を味わった。これまでエステルの家では、ジュリが実質的に長男と父親の役割を果たしており、歳のわりに気負っていたこの少年が、幼児のごとく無邪気にあらゆることに感動したのである。
エステルに首尾を報告するため、ジュリは一足先にハンガリーへ戻り、我われは修理の終わったチェロをいよいよハンガリーに持ち込むこととなった。このみごとなチェロの値段は誰にも見当がつかなかったが、ただひとつ確かなのは、とても我われに払えないほど税金がかかることだった。

他に名案が浮かばなかったので、車の後部座席に座った私とタカシがチェロを膝に置いて、その上からシーツをかぶせた。突きでているチェロの頭には、タカシが熊さん型のパジャマ入れをすっぽりかぶせて人形のようにみせかけた。

こうしてたそがれの中、ハンガリー国境に着いた。当時、日増しにハンガリー国境の検問は簡素化され始めており、西側の我われの車が内部まで厳重に調べられる恐れはあまりなかった。そのうえ、前の車が許容量を越える酒を積んでいたため、国境警備兵はそれにかかりきりで、「手まどってすまないね」というお詫びの言葉までもらって、いとも簡単に国境を通してもらえたのである。

いま思い返しても、どうしてあれほど無謀なことができたのか、信じられない気持ちでいっぱいになる。うまく説明はつかないが、さまざまな状況がジュリにチェロを与える方向に準備されているような、そんな気分に動かされていたのだ。国境を越えると、それまでの緊張の反動で、親子三人で笑ったり歌ったり大騒ぎをしながら、ビアトルバージュへ全速力で向かった。エステル一家は厚い祈りとともに、チェロを受け取った。

ウィーンをたつ前に、リーゼ夫人に何かお礼をしたいと、いろいろな案を考えた。

一つは、リーゼ夫人が家の修復費用を捻出するため、自宅で時々開くという王朝風晩餐会にジュリたちがコンサートをするという案だった。次男アンドラーシュは音楽家として

の道を確立し始めているし、ジュリとラースローは室内楽コンクールに優勝していた。クラリネット専門の末の息子バラージュは天才少年と評されている。彼らにとってもウィーンで舞台をふむことは得がたい経験となるはずである。

リーゼ夫人はこの案に目を輝かせた。もしコンサートがうまくいって軌道に乗れば、リーゼ夫人もたびたび懐かしいチェロと再会できるわけだ。子供たちのために良い聴衆を揃えましょうと彼女は言った。もうひとつジュリは、リーゼ夫人が経営する画廊に自分の父の作品を提供したいと提案した。

ブダペストへ戻った我われは、ウィーンの晩餐会でするコンサートについて、エステルと相談し始めた。本場ウィーンでコンサートの機会を与えられ、しかもそれでチェロをもらったことへいくらかでもお返しができるのは、息子たちにとって夢のような話であった。

開かれなかったコンサート

同じ頃、大学で私はヴェトナム人に声をかけられ、二人の友人を得ていた。声をかけてきたのはナムという女性で、友人のグエン君に日本語を教えてほしいというのだ。グエン君はハンガリーの研究所に勤めるヴェトナム人の科学者であった。

グエン君を通じて、ハンガリー最高の医学研究所でエステルの検査をしてもらった。検

査の結果、エステルは身体的な異常はなく、ただ心因性の疲労を克服すればいいと言われた。この診断は今までにエステルがかかった他のあらゆる医師と一致していた。

ハンガリーの医療事情について、医師への心づけが不可欠であると聞いていたし、実際にそういう経験談を知人たちから耳にもしていたが、我われ自身はハンガリー滞在中に一度も心づけを要求されたことはない。公立病院の医師たちは親切かつ丁寧で、タカシは日本でみつけられなかった幼児性の病気まで治してもらった。こうした医療は、外国人である我われに対しても、ほとんど無料であった。しかも、エステルをみてくれた医師は、金銭の謝礼を一切うけとらなかった。彼はヴェトナム人の友人が、日本人に頼まれて、ハンガリーの婦人を助けようとするいきさつをおもしろがりながら、こころよく検査をひきうけてくれたのだった。

その間、我われはまた、エステルの夫ラヨシュのもとを訪問せざるをえなかった。なんとしてもウィーンの夫人にお返しをしたいという子供たちの心を、むげにはできなかったのである。

ラヨシュは、ウィーンで自分の作品がとりあげられるかもしれない可能性に夢中になった。ハンガリーのあらゆる芸術家にとって、西側が成功への突破口である。しかしラヨシュが新しい妻と暮らす家の壁に飾られたおびただしい彼の作品は、なんの才気も感じられ

ない、絵の具の残骸に過ぎなかった。ジュリやエステルはラヨシュの才能を誇らしげに語っていたが、ウィーンどころかハンガリーでも相手にされないような作品ばかりである。ラヨシュの生活費は、新しい妻の財産が支えている。ラヨシュはエステルと正式に離婚しており、ビアトルバージュの家に戻るつもりはみじんもないのだと言い切った。

離婚はハンガリーにおいて特殊な事柄ではなく、むしろハンガリーの離婚率は五十パーセントに迫っている。対等な条件で働くハンガリー女性にとって、五人も子供がいる場合は別として、離婚による経済的な不利益をはなはだしくこうむるとはいえない。社会的に評判を落とすことでもない。ラヨシュが離婚したと言い切る言葉と、夫と別れたわけではないというエステルの言葉は、なぞなぞのような響きをもった。

ラヨシュと話しながら、この人物は常軌を逸しているらしいことに気づいた。父親が常人でないならば、いっそうエステルの子供たちの独立を手伝わなければならないと、我われは思った。

ウィーンのコンサートに向けて、エステルには懸命に準備するよう促しながら、一方、ヴェドレシュ君の住所をつきとめたり、一緒に共演してくれそうなフルート奏者をみつけた。また我われは、ピアノを探した。息子のタカシは心から音楽を学ぶようになっていたが、エステルの古いウィーン製のグランド・ピアノはがたがきはじめていたので、借りる

のが気兼ねになっていた。
ハンガリーでは、ピアノにはイギリス型とウィーン型があり、ウィーン型は寿命が短いから買うべきではないというのが常識であった。しかししばしば述べたように、どんな型にしろ、手に入るピアノはどこにもみつからなかったが、一軒のピアノ店で、楽器修理のコスモスという店があると教えてくれた。
コスモスに出向くと「ホフマンがありますよ」と誇らしげに見せてくれた。これはドイツ製のたて型ピアノで、一九四二年ごろ造られたものだという。あとで分かったことだが、ホフマンは有名な製造元で、しかもこの時代のホフマンは実にみごとな音であった。めったに出ない逸品をこうして手に入れたわけである。
ホフマンを勧めてくれたおじさんはきっすいのピアノ職人で、ハンガリーにもまだこうした職人はいるのだった。現在でもハンガリーは上質のピアノを年間に五十台ほど輸出しているそうだ。このおじさんは優れた職人技術を持っているが、国策によってピアノを造る現場を離れ、修理にまわっていることが悔しくてならないようだった。
こうしてリーゼ夫人と約束したコンサートのあらゆる準備は軌道にのったかに見えた。しかしビアトルバージュの子供たちは、いくら待っても現れない。
くどくどしいいきさつは省くとして、子供たちの独立を恐れるエステルは「あの日本人

たちはウィーンのコンサートを手掛かりに、金儲けをたくらんでいる」と子供たちに言いふくめ、我が家への出入りを禁じたのである。

母親の狂気

エステルは幼い子供たちを音楽家として育てながら、いよいよ子供たちが専門家になろうとする時期にさしかかると、自分だけが取り残されないために、子供たちの練習を抑えこんでさえいたのだ。とりわけ一家の柱となっていたジュリがリスト音楽院に進んで家を巣立つことを恐れ、試験に落ちて徴兵に行けばいいと、内心は願っていた。徴兵されて演奏家としての道が閉ざされたら、楽器の修理人として、いつまでも自分のそばで暮らしてくれるというのが、エステルの計画であった。私に伴奏を頼んだのも、素人が本番で息子ともども失敗することを期待していたのかもしれない。やさしい言葉で、真に才能があれば練習はほどほどにすべきだとさとし、ジュリの試験が近づくたびに病気になって倒れてみせたのだ。次男のアンドラーシュが別な町に下宿したのも、エステルの本心にうすうす気づいて家を離れたのだという。

こうしたことは、なりゆきを知ってあわてたマリカが話してくれたのだった。マリカは知人の精神科医をエステルのもとにそれとなく通わせていたと打ち明けた。なぜそういう

事情を前もって教えなかったのか、そういう人物を、タカシの先生として紹介したのはなぜなのかと、我われは思わず語気を強めた。マリカはお金のないエステル一家を見過ごしにできなかったと言いながら泣き出し、「あなたたちは音楽だけ習っていればよかったのよ」とつぶやいたのだ。

この時を境に、我われはマリカともあまり顔をあわせなくなった。

幼い子供の心にとって、教師は時に全人格的な強い影響を及ぼす。深く慕っていたエステルが、自分の子らをがんじがらめに束縛しようとする狂人だということは、タカシになんと説明のしようがあるだろう。

また、誰に対しても無謀なマリカであったが、彼女の中に、日本人の我われをまるで貯金箱のように考える姿勢がなかったとはいえない。ハンガリーで暮らすうちに、我われは西と東の貨幣価値の差に実生活で翻弄され始めていた。

幼稚園のことで世話になった旧友のチャバ君とも疎遠になっていた。家を建てているチャバ君は、大工さんからドルを都合してくれと頼まれたとかで、二度、三度とこんな話が我が家にもちこまれた。しかしチャバ君の老母が失明し、眼球に西側製レンズをいれるため西側通貨が必要になった時、チャバ君はこれをあとまわしにした。母の目を治すことより、早く家を建てようとするチャバ君の態度が我われには理解できなくなったのだ。

インフレによりハンガリー通貨の価値がどんどん目減りする一方、国境の開放によって、西側外貨さえあればどんな物でも手に入るという状況は、我われから知人の幾人かを奪ってしまったのである。

エステルは常軌を逸していたとしても、この一家にもまた、西側の人間には自分たちの苦しみは分からないという、自己弁護と正当化があったのだろう。どうしてこんなに援助してくれるのかとしばしば尋ねるジュリに、夫は十年前の安定していたハンガリー社会で自分も多くのハンガリー人の友情に助けられたのだと説明した。また現在の混乱するハンガリー社会の中で子供たちの成長だけが確実な希望であり、ジュリと兄弟たちが優れた音楽家として自立することこそ、ハンガリーを愛する自分にとって、最上のお返しだと説明したのに、これが結局は通じなくなってしまったのだった。

頼みの綱の息子が自分に黙って借金をしたと知って、エステルは逆上した。エステルに黙って費用を我われが肩がわりしたのは、もとはといえば母に負担をかけたくないというジュリの気持ちを尊重してのことだった。ジュリに頼まれて、我われは後日、事情を説明したが、事情なんてエステルにはどうでもいいことだった。息子が自分で判断し行動したことこそ、彼女が一番恐れていたことだったのである。

ウィーンのリーゼ夫人も、女手ひとつで三人の子を育てているが、「自分で判断できる人

間になりなさい」というのが夫人の子供に対する姿勢である。マサコはリーゼ夫人の中に西欧型の強い母の愛情を感じ、尊敬している。これは「親に従いなさい」というエステルの子育てと極端な対照をなすものであった。

またエステルの子供たちは、五人も子供を抱えた母親が子供の犠牲になっているという負い目を抱いている。不条理なことではあるが、エステルが体の痛みを訴え、頼りにできる夫はいないと溜め息をつくだけで、子供たちは何も言えなくなるのだ。

我われの友情を最後まで信じようとしたジュリに、エステルは彼の留守中、あの日本人たちが車で乗りつけて、高価なウィーンのチェロを盗み出そうとしたという立派な嘘までついてみせた。チェロを盗まれるという恐怖に、この少年は理性を失ったのである。

狂信者エステルと村の教団

あまりにも異様なエステル一家を、一般的なハンガリー事情とするわけにはいかないが、それにしてもこの一家を通じて我われは、ハンガリー社会の暗部を極端な形でさまざまに見せられた。

とりわけ宗教のことがある。ジュリはリーゼ夫人に我われをペテン師の泥棒としてののしる手紙を出す一方で、我われには「おまえたちは何が目的なのだ。エステルをおとしめ

ることだけは許さない。エステルは神の子なのだぞ」という奇怪な手紙をよこした。マリカはエステル一家が信仰に厚いと説明していたが、エステルの一族はみな、新興の宗教団体で主導的な地位を占めていた。この教団は終末が間近に迫っていると説く一派で、聖書のあらゆる言葉を文字どおりに信じ、信徒が思い思いに聖書の解釈を説教する俗人集団であった。

夫のラヨシュも信仰深いことで知られていたが、エステルの聖書解釈に耐えきれず、彼は彼で、家族を捨ててイエスのもとにくる者は、その百倍ものむくいを受けるであろう、という聖書の一行をひたすら信じて出奔したとのちに知った。

エステルの一番下の息子バラージュだけが、この教団に距離をおいていた。バラージュは、一家が悲しみにくれていた時に、家庭内の事情を詮索し、批判を浴びせた村の教団をキリスト教的だと思えなかった。すべてはあとのまつりだったが、バラージュの言葉をつなぎ合わせて我われが知ったのは、奇想天外な物語である。

教団の指導者であるエステルが夫に捨てられたことは神意にそむいた罰だとして、ビアトルバージュという村の小さな教団で、エステル一家は非難にさらされた。しかしエステルは聖書から、神がむすんだものをひきはなすことはできない、という一句と、使徒書簡中の受難を耐え忍ぶ婦人の話をぬきだして、夫の芸術的創造の犠牲になる賢婦の役割を自

分に与え、しかも成功した夫がいつかは自分の献身にひざまずく日がくるという、都合のよい解釈で村人と子供たちに対して武装したのである。こうしてみじめな境遇からエステルは栄光に満ちた聖女に変身し、村の教団の先頭に立った。

エステルは都会からきたよそものであり、村の教団では珍しく大学教育を受けた身だったが、こんな筋書きで体面を保ったのだ。一家は聖家族として人前でいつもむつまじさを装わざるをえなかったとバラージュは言った。

「エステルは、お父さんが大芸術家として成功し戻ってきて許しを乞うと説明するけれど、僕は成功なんてどうでもいい。お父さんに帰ってきてもらいたいだけだ」と十二歳のバラージュは思った。家族の中で彼だけは教団に従順でない困り者であった。

病に冒されたことは、エステルにとって神の受難の証しであり、チェロがこわれたことは、夫が極限状態の末に帰還する前兆というわけである。そこへ、マリカに連れられて日本人の我われがのこのこと現れていろいろ手助けしたことは、すべて聖女エステルへの神の愛と励ましの証拠となった。しかし、我われが心因性過労という診断書をもらってしまったり、新しいチェロをみつけたり、才能が枯渇したラヨシュは廃人同様だから、帰還をあきらめ母子でがんばるようにと励ましたことの数々は、聖女エステルにとってどんなにか迷惑だったことだろう。

つきあう中でエステル一家の反応には時々妙なずれを感じるのだが、と我われが尋ねるたびに、カトリックであるマリカや知人たちは、一家の宗教に対してよくは知らないと言いながら、言葉を濁し続けたのだった。
のちに、別な農村でこの話をした時、無神論者だという女性が、それは信仰に厚いのではなく、狂信者というのでしょうと笑った。マリカや知識人の友人たちは教養とつつしみが邪魔をして、他人の宗派をこうあけすけに表現できなかっただけだと気づいた。

宗教も自由になったが……

ハンガリーでは現在、宗教上の制約は何もないといっていい。社会主義政権下で教会財産が没収され、教会に通うこと自体が、呼出しの対象となった時期は過去のことである。ハンガリーの自由化は教会活動にも現れていた。
むしろ教会によって、ハンガリーの自由化の重要な一翼が担われてきたというべきである。反体制派の活動は国際組織である教会を通じて国外からも支援されていた。そのうえ今日のインフレの中で、身障者や貧窮老人に対し教会が積極的な活動にのりだしている。赤字を抱えたハンガリー国家は福祉事業で教会をあてにさえしている。
ハンガリーは国民の六割がカトリックといわれ、少数のプロテスタントもいる。この数

字は民族統計と同じで、改革とともに変化するであろう。現在、国外教会組織の援助によって、昔の教会学校のいくつかが再建されてもいる。政治改革よりはるか以前に、ハンガリーのあらゆる教会の門は開かれ、内部は修復され、常に信者の姿がみられた。

これは、一九八八年にスロヴァキアで、多くの教会の扉に鍵がかけられ、教会に行きたくても行けないという話を聞いたのと、正反対の状況であった。

ハンガリーでも、ユダヤ教のシナゴーグは廃墟になっている。通常シナゴーグにはユダヤ人学校とユダヤ料理店も併設されており、この廃墟をみると、かつてそこにユダヤ人の生活全体があったことを彷彿とさせる。五十万人といわれたハンガリーのユダヤ人は戦争やナチズム、白色テロなどによって離散し、殺され、激減した。今日のハンガリー社会ではユダヤ系知識人と呼ばれる人びとが再び重要な地位を占め、広範な活動をしているが、シナゴーグやユダヤ人居住区は荒れたままか、修理されても博物館などに使われている。

またハンガリーの教会で私が不満を感じたのは、他の宗教や、キリスト教各宗派間の対話というものがほとんど行われていないという点であった。今日、世界の宗教界の間では対話が盛んに行われているが、ハンガリー人の間では、マリカたちのように、せいぜい他の信仰の悪口は言わない程度の認識が存在するだけに思われる。

教会へ行きたくても行けなかった人びとにとっては、自由に自分の信仰を表明できるよ

うになっただけで十分なのであろう。厳しい時代に信仰を糧として生きてきた人にすれば神はどこにみいだされるのかという比較宗教学の問いなど、考えるまでもないのかもしれない。

知人の中には、立派なカトリック信者が幾人かいた。彼らはどんなに闊達な人でも、どこかに厳しい自己抑制を身につけ、謙虚であった。かつて身分社会のハンガリー王国では、教会こそが大貴族も貧しい農民も、等しく敬虔にひざまずく場であった。マリカは、自分のように強情で過ちの多い人間は自分の力で自分を正すことはできないと言い、自力を重んずるプロテスタントは理解できないと言いながら、教会で無心に祈った。

東部の都市デブレツェンを中心に、トランシルヴァニアともつながりの深かった地域にはプロテスタントが多い。プロテスタントの知人には批判精神に満ちた活発な感じがあって、ハンガリーの歴史の中でプロテスタント地方がしばしば改革的な運動の拠点となったことを思いおこさせた。

先に触れた無神論者だという婦人の話も印象深い。彼女は第二次世界大戦期に少女時代を過ごした。ドイツ人はカトリックとプロテスタントに分かれて、それぞれに勝利を神に祈り、カトリックの国同士、プロテスタントの国同士が敵対する状況の中で、味方の勝利を祈る教会に疑問を感じ、教会へ行くのをやめたという。世界にはいろいろな宗教がある

みたいだし、私は人間的良心の限界までがんばってみるのよと、彼女は言った。

異邦のおもい

エステル一家とのいきさつから、私はしばらく立ち直れなかった。もうハンガリー語の勉強をするのもいやだったし、ハンガリーそのものにもうんざりというありさまであった。ちょうどこの時、日本からきた知人たちがイタリア旅行に誘ってくれた。旅行できる気分ではなかったが、イタリアへ向かった。

イタリアといえば、私は何か物騒な、かなりいいかげんな印象を抱いていた。しかしヴェネチアやパドヴァ、ボローニャなど北イタリアの美しさと、生活のおちつきや豊かさは心にしみとおるようであった。博物館を訪れれば、古代ローマから続くイタリアの文化と歴史の重みに比べ、民族大移動後の中部ヨーロッパ文化はいまだに洗練と成熟の度合いが乏しい気さえする。

それにしても、なぜこれほどイタリアで心が休まるのかと考えて、ふと、ここには誰もドルを欲しいという人がいないためかもしれないと気づいて、寂しいもの思いにふけった。ここでは、昨日までの友人が、今日はおずおずと両替を頼む未知の表情を見せる人に変わることはないのだ。

語学校で仲よしだったポーランド人のヨアンナとも、もう会っていなかった。彼女の夫であるハンガリー人は、ポーランド人の知性の高さや礼節はハンガリー人の心を魅了すると言った。ハンガリー人とポーランド人は歴史的にも共感の絆が深い。そしてこの夫妻は、我われをとおして日本人とも心が通じる友達になれると思ってくれたが、正直いって民族や国籍や人種という概念は、相手とつきあう前提にするべきではない。思い込みは相手の姿をみえにくくする。とはいえ、さまざまな民族が境を接している土地では、周囲の異民族に対し、かなり明確な感想を抱いているものだ。私自身もポーランドの歴史や文化にヨアンナの人柄を重ねて、まだ訪れたことのないポーランドへの好感を強めた。

しかしポーランドでは、食料や日用品までドル・ショップで買う状況である。ヨアンナはポーランドの肉親のために西側通貨が必要だった。我が家は限られた収入でやりくりしていたし、西と東の経済格差の中で、東欧の誰かにドルの融通をすれば、東欧のどこかにひずみを拡大させる手伝いをすることになるわけである。知人との交際にこうしたお金の融通を介在させないことを、貫かねばならないと感じていた。ハンガリーでは日常物資をドルで買う状況はなかったので、我われも個人的な両替を断ることは良心が痛まなかった。だがヨアンナは、ポーランドの生活でドルを入手することが習慣化していたのだ。

ハンガリーでは、都市や村や広場などいたる所に、ポーランド人の行商の姿があった。

むろん営業許可は受けていないが、ポーランド人の行商市場にはいつも人だかりがしていた。普通のポーランド庶民が荷物を売り、手にしたフォリントでハンガリーの食品を買って帰るのである。ポーランドが外貨所有制限をいちはやく撤廃したことによって、ポーランド人は西側外貨を自由に持てるようになった。西側外貨を持って東ドイツに行き、そこの闇ドル市場で西側外貨を大量の東ドイツ・マルクと交換する。この東ドイツ・マルクをもとでにして東ドイツやチェコスロヴァキアの工業製品、ハンガリーの食料、ルーマニアの衣類など、ソ連・東欧各国の安くて豊富なものを、あるところから足りないところへと流通させて行商を続けるそうだ。こうした物流は組織だって行われ、また個人も行っていた。

ハンガリー人にとっても、ポーランド人市場はありがたい存在であった。西側製のカセット・テープや化粧品、衣類のほか、東欧圏の衣類、ガラス製品、革製品、水道の蛇口から爪きりばさみまで、ハンガリーで高値のもの、手に入らないものを、ポーランド人が売っていた。我が家も子供の衣類を買ったりしたが、隣にいたハンガリー人が、買ったらすぐにしまい、この場を離れなさいと教えてくれた。警官の姿が近づくと、ポーランド人市場はあっというまに解散して消え去った。

家族旅行を装うポーランド人の車はいつも売り荷でいっぱいであり、乗っている人びと

の表情は疲れきっていた。世界じゅうに富める国も貧しい国もあるが、これほどに西側との格差で庶民までが翻弄される時代は、かつて東欧にあったのだろうか。東欧の不幸を、しみじみ思った。

私は予想もしなかったほど北イタリア文化の香りの高さに魅せられ、生気をとりもどしたのだが、それには旅行者の感傷も手伝っていたに違いない。貧しいイタリア南部を私は知らないし、北イタリアも住めばそれなりの苦労があるに決まっている。ウィーンを時たま訪れる我われは、いつもちょっとした開放感にひたったのだが、ウィーンに住むマサコにとって、ウィーンの誇り高い排他性と伝統社会の重みに息がつまり、アジアやアラブの労働者が下積みの仕事に汚れた汗を流すのを見るのが辛いのだ。

ブダペストだって、気楽に訪れればまことに美しい都で、治安もよく、活気はあり、住みやすい所である。私はブダペストで、もっと力をぬけば、ハンガリー生活を楽しむことができるのかもしれない。

14——ハンガリー人とアジア

中国人？　ヴェトナム人？

こうしてブダペストへ戻ったが、のんびりしてはいられなかった。日本語を勉強したいという人が三人、我が家にくるようになっていた。ハンガリーにおける日本語熱の高さに比べ、残念なことに日本語教育はさっぱりふるわない。ポーランドのワルシャワ大学日本語科はみごとな日本語を話す人材を輩出しているが、ハンガリーには教材も人材も不足しているため、我が家もささやかな勉強の場を提供することにしたのだ。

ヴェトナムのグエン君は旧南ヴェトナム出身で、学生時代はアメリカの奨学金をもらって充実した勉強の日々を過ごしていたそうだ。グエン君はヴェトナム皇室を懐かしみ、現

ブダペストで開催された「広島・長崎講演会」で日本の歌を合唱する高校生

在のヴェトナム政権に激しい批判を抱いている。一方、ガールフレンドのナムは北ヴェトナムのコミュニスト官僚の娘である。グエン君はフランス語と英語もでき、世界じゅうどこへ行っても通用する優れた研究者で、ハンガリーでも業績をあげつつあった。ナムはコミュニストの親戚に囲まれていなかったら、肩書だの研究業績だのと堅苦しいこととは無縁の、優しい主婦として本領を発揮したことだろう。

何から何まで正反対の背景を持つこの二人は、ヴェトナム人同士としても北と南の異なる文化を負っていた。ブダペストという異邦の地で会って、二人はお互いの人間性だけでつきあうことができたわけである。ヴェトナム人に冷淡なハンガリー社会で暮らすことが、二人をいっそう近づけたのかもしれない。

ハンガリーで歩いていると、東洋人は珍しいため、我われは視線をあびせられ、しばしば声をかけられる。

「中国人かい」「いいえ」――「ヴェトナム人か」「いいえ」「じゃあどこからきたんだ」「日本」「おお、日本か。日本はすばらしい。日本人は好きだ。日本人とハンガリー人は親類同士じゃないか」というのが、耳にたこができるほど繰り返された路上の会話である。そして――で表した部分に、妙なためらいと反感の空白がある。

ハンガリーで中国料理は流行のきざしをみせている。中国料理店もいくつかあり、いつ

も満員なうえ、中国料理の本が盛んに売れている。また一九八八年にブダペストで中国古代文化の展覧会が開かれ、四千年も前の中国に高い文化があったことに、ハンガリー人は感嘆した。書店に中国歴史関係の本も増えた。ハンガリー人はアジアがかくもすばらしい古代文化を持ったことへ、マジャール人祖先への郷愁もこめて感慨を抱くのである。

しかし現在の中国は、ハンガリーより厳しい独裁国家だとして批判する。中国に関して歴史的過去と現在に分裂した印象を抱いているといえるだろう。天安門で学生たちが弾圧された事件は、現代中国からハンガリー人の心をますます遠ざけた。

ヴェトナムに対してハンガリーや東欧諸国のすみずみにまで反感がゆきわたってしまったのは、ヴェトナム戦争の時に東欧圏が北ヴェトナムを支援したことに始まる。週休二日のハンガリーに「ヴェトナム人のための土曜日」というものができ、ハンガリー労働者は土曜日も働かされたのである。そして東欧圏には社会主義友朋国ヴェトナムから、大量の出稼ぎ労働者と留学生が送りこまれた。ヴェトナム戦争で俺たちに迷惑をかけ、ひきつづき迷惑をかけどおしというのが、ハンガリー庶民のいつわらざるヴェトナム観である。ヴェトナム戦争時代、ハンガリー自体も貧しかったのに、北の社会主義勢力の勝利にむけてハンガリー人が働かされたことは、忘れがたい悪夢だと知人は言った。

ブダペスト市内で、到着したばかりのヴェトナム人労働者の一群がハンガリー人に引率

されている光景をみた。若く、幼いといってもいいくらいの若年労働者の一団であった。ヴェトナムの妹もブダペストの工場にきて働いている。ヴェトナム人はハンガリー人より安い賃金で、しかもハンガリー人の嫌がるような職種で勤勉に働くのだから、文句を言ういわれはないと思うのだが。最近はこうした偏見を乗り越えて、ヴェトナム人がハンガリー人と結婚する例もでてきて嬉しいと、グエン君は言った。

日本への親近感

これに比べ、ハンガリー人の日本像は、ひとことで言えば手放しの賞賛である。東欧圏一般に日本の経済力への憧れが強いが、敗戦国日本が奇跡的復興をなし遂げたという事情が、社会主義経済からの立ち直りをめざす東欧の人びとを、ある意味で励ましてもいるのだ。一方的な思い込みが強いにしろ、東欧の人はよく日本をお手本だという。

我われがハンガリーに滞在中、日本の円が二度、急速に安くなったことがある。日本で首相が辞任したことのあおりだった。最初の辞任は企業汚職にまつわる疑惑で、二度目は女性問題のスキャンダルだ。どちらもハンガリーで報道されたが、最初の件に比べていかにもジャーナリズムの恰好の題材となりそうな二番目はさしてとりあげられなかった。

最初の辞任が詳しく報道されることは、日本人である我われにとって居心地の悪いでき

ごとだったが、ふとこれは、日本では汚職の摘発が最高権力者によってでも阻止できないということや、権力者には倫理的な責任があることを、ハンガリー人がハンガリー社会にむけて訴えているのだと気づいた。ハンガリー共産党幹部の特権に対して、ハンガリー人は従来、無言の反感を抱いていた。しかし日本の例をとりあげて、民主主義には問題を摘発し是正する機能があると、ハンガリー報道人が自国にむけて教示していたのだ。こうしたハンガリーの姿勢は、この事件に関する西側の報道と根本的に異なっていたのではないだろうか。

ハンガリーの場合、さらにアジアの血による日本への親近感というものが加わる。現在のハンガリー人を見て、アジアの仲間だと親しみをもつ日本人はいないであろう。スラヴ、ゲルマン、ラテン、あるいはトルコの血と混血したハンガリー人の外観は、日本人から見れば白人だが、他のヨーロッパ世界から見れば変わり種らしい。しかし例えば、新生児のお尻に時おり蒙古斑が出るとか、牛乳アレルギーの率が高いとか、アジアの血は今もハンガリー人の中に認められると強調する知人もいる。またごく最近、日本人とハンガリー人の遺伝子構造がきわめて似ているという学術論文が、ハンガリーで話題をよんだそうだ。

ハンガリーと日本の人種的な関心は、第二次世界大戦前にツラニズムという奇妙な花を咲かせた。ウラル地方のどこかにハンガリー人、フィンランド人、トルコ人、日本人などを含

めた共通の祖先として「ツラン民族」がいたと想定し、世界じゅうのツラン民族の連帯を呼びかける運動である。この運動は両国で政治的、軍事的にさんざん利用されて、現在は逆に葬り去られてしまったが、言語の構造とか、音楽的な類似性とか、おもしろい研究材料はたくさん残されているようである。

とにかくハンガリー人の中に、日本人との血縁的なつながりを意識する気持ちは現在でも存在する。また、書くべきことではないのだが、夫がハンガリーの床屋へ行った時、床屋のおじさんから「こんど戦争をやる時はドイツ人抜きで一緒にやろうな」と言われたそうである。日本では、第二次世界大戦で同盟した国々の中にハンガリーという国があったことなど知らない人が多いのに、年配のハンガリー人には、こんな事情で日本に親近感を抱く人がいたのかと、夫はたまげてしまった。

最近ブダペストのめぬき通りにできた商業センターには、中央の窓に韓国の国旗が掲げられた。日本の電気製品はハンガリー人の憧れだが、高嶺の花である。これに比べ韓国製品は品質の割に安いうえ、積極的な進出をしているので、今後ハンガリー社会に歓迎される可能性が大いにある。

ブダペストの街で日本人をいっぱい見たとハンガリー人が言う日に、ブダの丘を通ると、韓国の旅行団がヒルトンホテルから出てきた。服装が美しくカメラやビデオを下げていれ

ば、ハンガリー人はすぐに日本人だとみなすが、ブダペストを訪れる旅行者は日本人より韓国人の方が多いかもしれない。ハンガリー人は韓国のことを今までよく知らなかった。韓国が物的、人的に東欧との交流を盛んにしていけば、東欧の中に韓国という新しい東洋の知人の像がじきに生まれていくであろう。

15——夏休みに

個性あふれる町々

我われはハンガリーの最初の一年を目まぐるしく過ごしたが、新たな一年は夫の研究に専念すべき時である。勉強に精をだしながらも、週末や夏休みには息子を連れていろいろな所へ行った。

日本から私の両親を迎えて、ウィーンからオーストリアの町アイゼンシュタットへ行った。アイゼンシュタットはハンガリーの大貴族エステルハージー家の領地であった。旧エステルハージーの城にはハイドンが演奏したというホールもあり、オーストリアの観光名所となっている。エステルハージー家は各地にお城を三十六も持っていたそうだ。ここオ

町全体が博物館のキューセグの町

ーストリア東部のブリューゲンラント一帯が、かつてのハンガリー領である。町でマーケットを開いているある店主は、家ではハンガリー語、社会生活はドイツ語で営むというハンガリー系オーストリア人だが、国境が開かれて、ハンガリー人の客がこの店にも増え、良い時代になったと喜んでいる。

ついで両親とともに、国境に近いハンガリーの町キューセグに泊まった。四星の新しいホテルを避けて二星の古いホテルを選ぶと、昔のままの内装にめぐり会えた。我われはいつも安宿にばかり泊まっていたが、キューセグでは二星のこの安いホテルこそ、ハンガリーの古き富める階級の雰囲気を留めていたのだ。音楽家のリストが泊まったかもしれない部屋には真紅のカーテン、寄木の床、昔のみごとなベッドやタンスがあって、うっとり眺めた。

また、教会の古いステンド・グラスのみごとさや中世の家並みなど、このキューセグの町全体が歴史の博物館であることに、両親ともども喜んだ。いままで首都ブダペストのことばかり書いてしまったが、ブダペストはいわば国際的でコスモポリタンな町である。ハンガリーの真髄は地方にあるといってもいい。

私が高校生だった昭和四十年代に、日本の新聞で、日本の諸都市が個性を失い、どこも同じような町並みになっていくという記事を読んだ。ハンガリーの地方都市は、それぞれ

に固有の町並みをもち、個性的でうらやましい。司教座のあるヴァーツは広場を囲む家々が丹念に修復されて、古風なたたずまいが美しい。大司教座のあるエステルゴムには、すばらしい大聖堂とともに、マーチャーシュ王の城跡がある。今世紀初頭に、大聖堂の向かいの丘を発掘したところ、城が現れたというのである。トルコが城を埋めてしまってから数百年間、この城は土の丘の形で眠っていたのだ。

東部のデブレツェンは大学町で、この地方一帯はハイドゥーという匪賊が活躍したところである。ハイドゥーは領主の支配を逃れた山賊だったが、トルコと戦い、国難に際して幾度も立ち上がった。貴族の称号を村ぐるみでもらったりした、あっぱれな賊である。ハイドゥーの土地で両親と共に古い農家を使った民宿に泊まった。農民の木の家具や藍染の織物、白い土壁など、ハンガリー農民の美意識は日本にもどこか似ていて心惹かれるものであった。

南部のセゲドは教会と近世以来の大学の町で、町を流れるティサ河の魚料理が名物である。大平原の農業都市ケチケメートには、有名な建築家レヒネルの設計した市庁舎がある。ハンガリーのどこへ行っても、個性溢れる町並みと、土地の自慢を豊かに持っている。

さらにバラトン湖へ行ったが、内陸国ハンガリーでこの湖は「ハンガリーの海」と呼ばれ、避暑でにぎわう。ぶどう酒の産地でもある。

バラトン湖畔に家を持つ知人を訪ねると、ドイツ人の先客があった。西ドイツと東ドイツに分かれて暮らす肉親同士が、このバラトン湖で再会しているのである。自由化を進めるハンガリーはこんな役割も果たしていたのだった。

またバラトン湖畔のおじさんから、チェルノヴィイリ事故のあとでソ連からバラトンにぶどう輸送用の木箱が届いたが、住民みんなでこれを焼却したところ、その場所からは草がはえないという不気味な話を聞いたりした。

けたちがいのインフレ

つぎに、両親と共にユーゴスラヴィアへ行った。ラディチ氏はいつも自分の国をぜひ見てくれ、ハンガリーよりずっと自由でまったくいい国なんだと、胸をはりながら推薦していた。ただ経済だけが不安の種だなと、彼は顔をくもらせた。

確かに極端な赤字を抱えたユーゴスラヴィアのインフレはすさまじく、銀行で日本の五万円をユーゴスラヴィア貨幣のディナールに両替しただけで、ディナールの分厚い札束を三つ以上も受け取った。隣ではアメリカ人がドルと交換にディナールを山積みされて、唖然としている。財布などは役にたたず、札束を袋につめた。こんな札束を手にするのはあとにも先にもこの時限りと、アメリカ人と一緒にふきだした。

また、ディナールを次々造幣しているため、ディナール硬貨がいくとおりものまちまちな大きさである。日本で五、六種類の十円玉が同時に使われるなど想像もできないことだ。しかもスーパーマーケットでは客が、こんな小銭のディナールはなんの使いみちもないとおつりを受け取らないでレジに積み上げていくありさま。トイレの使用料は千ディナールで、前は五百ディナールだったはずだという客を、入口のおばさんが足りないと怒って中に入れない。売店では新聞を買う人が印刷された定価四百ディナールを払おうとすると、店員が「新聞が発行された時には四百ディナールだったけれど、売場に並べるあいだに四百三十ディナールになりました」と説明している。我われがユーゴスラヴィアに滞在中も、毎日ホテルの宿泊料金は上がっていった。これは確かに異常な事態であった。

しかしユーゴスラヴィアを現在、戦闘状態においこんでいる民族問題について、セルビア人であるラディチ氏は、当時あまり心配していなかったようである。「アメリカ合衆国へ行ったことがあるけど、あそこの南部と北部はまるで別の国じゃないか。人種差別はあるし。僕は諸民族の連邦ユーゴスラヴィアが好きだ」と、心から言っていたのだから。

民族と文化のモザイク

我われはスロヴェニアで首都リュブリァナを通って、アドリア海沿岸のピランへ行った。

リュブリァナの街の美しさと人びとの生活水準の高さに、我が母は、ここはとってもお金持ちのところなのねと感心した。イストリア半島のピランに向かう途中には、広く豪華な別荘が建ち並んでおり、確かにスロヴェニア地方は西欧と遜色のない経済力を持っていると納得させられた。それ以上に痛感したのは、イタリアに続くアドリア海沿岸一帯の文化圏が、いくら国境で分断してみても、しょせんは分けることのできない有機的なつらなりだということである。アドリア海沿岸は古代から豊かな文化圏を形成していた。

アドリア海に臨むピランは、イストリア半島のなかほどにある。北隣はもうイタリアのトリエステだ。ピランの食文化も町並みも、スラヴ語が聞こえてこなければイタリアにいるのかと錯覚しそうだ。スロヴェニア共和国の町ピランの南は同じユーゴスラヴィアでもクロアティア共和国に属す。かつてハプスブルク領だった時、このイストリア半島にはオーストリア領とハンガリー領の境がひかれていた。半島の西の町ピランはオーストリア領で、東にある現在のクロアティアの町リエカは、昔のハンガリー領フィウメであった。フィウメは第一次世界大戦に敗れるまで、内陸国ハンガリーが持つ唯一の港だった。

イストリア半島は第一次世界大戦後にイタリア領に、第二次世界大戦後にはユーゴスラヴィア領にと、めまぐるしく所属が変化した。政治学者なら、そんな簡略な言い方をしてもらっては困ると、今世紀前半のイストリア半島についてたちまち分厚い大著を書くだろ

う。現在は、一つの半島が北からイタリア領、ユーゴスラヴィアのスロヴェニア共和国領、そしてユーゴスラヴィアのクロアティア共和国領に分かれているわけだ。

クロアティアも豊かだという印象を受ける。ハンガリーからクロアティアへ向かうと、国境を越えただけで、クロアティアの農家が美しいことに驚かされる。このクロアティアは十二世紀からハンガリー王権の下に置かれていた。オスマン・トルコに税金を納めた時期もあったし、ハプスブルクの臣下だったこともあるが、大雑把にいえばクロアティアはハンガリー王権の下にあって、自立した地位とクロアティア語を保ち続けた。クロアティアの町ノヴィ・サドはハンガリー語でウーイ・ヴィデークといったが、今日のノヴィ・サドの物質生活は、ハンガリーと比較にならないほど豊かに思われる。ハンガリー人が言うには、ユーゴスラヴィアが経済的困難に陥る以前に、自由と生活水準の高さにひかれて、ハンガリー女性がクロアティアへ嫁ぐケースがかなりあったそうだ。

このノヴィ・サドの町でレストランを探していると、ベンチに座っているおばあさんがタカシの話すハンガリー語にびっくりして、レストランを教えてくれた。あとでこのおばあさんが、タカシにチョコレートを買ってレストランまで届けにきてくれた。おばあさんの母語はハンガリー語である。そしてノヴィ・サドの町には、古いハンガリー様式の建物が残っている。

ユーゴスラヴィア全体の首都ベオグラードはセルビア共和国にある。セルビアでは東方正教会が主流だった。スロヴェニアとクロアティアはローマ・カトリックである。セルビア語とクロアティア語は同じ言語だといわれるが、セルビア人はキリル文字、クロアティア人はラテン文字を使ってきた。そしてセルビアはトルコの支配が長く、十九世紀末にやっとこれからぬけだした。セルビア人ラディチ氏はブダペストにはトルコ・コーヒーがないと嘆き、ベオグラードからとりよせている。一方、スロヴェニアとクロアティアは自分たちをヨーロッパ人として明確に意識している。

ラディチ氏はベオグラード駅はできれば見ないようにしてくれと言った。この駅にはユーゴスラヴィア各地の人がゆきかうが、南部の人びとの姿がとりわけ目につく。身なりは北のクロアティアやスロヴェニアでは見ることのない粗末なもので、外観も明らかに違う民族を思わせる。母は、これが同じ国の人たちなのと目をこすったが、ユーゴスラヴィアは初めての私も、同じ気分だった。

民族と文化のモザイクのようなユーゴスラヴィアにびっくりしながらも、我われは旅行を楽しんでいた。北ユーゴスラヴィアは、まったくハンガリーより豊かであった。現在、日本にあって、ユーゴスラヴィアの軍事衝突に胸を痛めながら、あの美しいリュブリァナが戦車で囲まれたニュースに耳を傾けている。ハンガリーがクロアティアに武器を売った

という報道に、夫は言葉を失った。

しかもベオグラードの駅で我われが感じたのは、北の豊かなスロヴェニアやクロアティアが独立を望むのと同じ気持ちは、南の貧しいマケドニアやコソヴォ、モンテネグロの人びとの誇りにも脈うっているに違いないということである。東欧の民族問題は、かつて力で解決されたことがない。東欧諸民族は、何かまったく新しいお互い同士の付き合い方をつくりあげなければならない。

トランシルヴァニア再訪

状況は違っても、トランシルヴァニアでもまた、独裁者チャウシェスク氏への不満のかげに、民族問題が深くくすぶっていた。

セーケイの村から「またおいで」と一行書いたハガキが届いて、我われは今度は家族三人でトランシルヴァニアへ出かけた。

セーケイ人の村へ行くと、偶然にもまたまた村は結婚式で、去年結婚した青年の弟がお嫁さんをもらうところだった。懐かしいおばあさんが、花婿の母として台所で料理の指揮をとっている。今晩のごちそうは前菜に始まってスープと肉料理二種類、デザートつきという豪華なものだ。おばあさんは婚礼のために大切な豚をさいた。村人が乏しい配給の中

から各戸ごとに小麦粉一袋、砂糖一袋、卵十個、鶏一羽ずつを貸してくれたそうだ。借りた方も、いずれ他の家で婚礼などがある時に、現物でお返しする。

この婚礼の様子をビデオフィルムにおさめた日本女性がいる。彼女はブダペストへ留学している音楽の先生だ。村の婚礼でブダペストからきた日本人が二組、偶然はちあわせしたわけである。トランシルヴァニア農村の滅ぼされようとしていた民俗文化を、他にも写真家のみやこうせい氏が記録している。日本人が世界じゅうを駆け回って、こんな異民族の文化遺産を蒐集し伝え残そうとしていることに感慨を覚えた。

我われの方はだらしないことに、去年の婚礼の写真を届けにきただけで、婚礼のお祝いにふさわしい品は何もっていない。コーヒーやタバコやサラミとお菓子に小麦粉くらいしかないのだ。パンをおみやげに入れようとしたら、小麦粉を持っていった方がよりたくさんのパンになると亡命者から助言された。農家に小麦粉をおみやげにするなんてなんということだろうと思いながら運んできたのだった。ルーマニア農民は生産物を厳しく管理されて供出させられる。

そのうえ、遅れた農村を嫌うチャウシェスク氏は、農家をビルにして、映画館とディスコを併設した文化的な村を建設しようとしていた。このセーケイ村の人びとも民族音楽や踊りを楽しんでいると、どうしてもっと近代的な芸術をやらないかと役人に言われたそう

だ。
　外国人が長居して村人に迷惑がかかってはいけないと思い、早々に退散しようとすると、おばあさんが今晩は泊まって婚礼に列席しなさいと言った。先刻渡したおみやげからアメリカ・タバコを役人と警察に届けたから大丈夫だそうだ。今回の旅で、私自身も婚礼の行列や教会儀式の一部始終をこの目で見ることができた。村のプロテスタント教会は村人の支えである。婚礼の教会音楽は、ふいごを使った古いオルガンでかなでる。子供たちがおもしろがって交代でふいごを踏んでいる。
「でも子供たちには活力がないでしょう、甘いお菓子を食べたことがないからです」と村人が言った。健康のために甘いお菓子をやめましょうという日本の母親と正反対の理由で、ここの母親たちは子供の発育を心配している。
　幾人ものおばあさんが小声で、飴かガム、チョコレートを持っていたら、孫のためです、売って下さいと頼みにきた。村の子供全員にあげるお菓子がないことを悲しみながら、そっと手にガムひとつつみ、チョコレート一枚ずつを渡す。どんなに断ってもお金を払おうとする彼らの姿は律儀そのものだった。
　本来ならこの村の人びとはお客が大好きな農民で、客にはもてなす一方の大盤振る舞いしたい人たちなのだ。我われのコーヒーやガムが村人同士の心に、誰がもらえたのだろう

という亀裂を生まないか心配だった。実際、外国人がよく訪れるこの村では、村人の間にお互いをはばかる微妙な気配も生まれていた。

一人のおじさんが自分の家にどうしてもきてくれというので、婚礼をぬけだした。その家では奥さんが質素な昼食を用意して待っていた。我われはお腹がすいていないと固辞したが、どうしても食べなければ失礼になるようだった。去年の婚礼の写真にこの家の娘さんが写っていて、写真をもらって嬉しいからと、お礼の昼食を作ってもてなしてくれたのだ。帰りがけに美しい刺繍の民芸品をいくつか贈られた。ブダペストへ持って売りにいくつもりで娘さんが刺繍したが、ハンガリーへの出国許可はおりなかったそうだ。

「娘はハンガリー語と同じにルーマニア語もできます。賢い子だからいずれ町へ出ていくかもしれない。でもセーケイ人の心を守りとおすと言っています」と話してくれた。どんなに物がなくても、この人たちから誇りと暖かい心が失われることはないのだろう。

夜は婚礼のテントの横に車をとめて眠った。婚礼は夜どおし行われるのだが、物のないぎりぎりの生活の中で行われるこの婚礼の儀式は、村の楽しみというものをはるかに越えた何かであった。しきたりを守らなければ、人間でなくなるというかのように。もうすぐ夏がくれば、村人たちは森に行って「喪の儀式」を行う。十三世紀にタタール人がこの村を襲った時、生き残った祖先たちが森に隠れたことを記念して、綿々と続けられている村

の儀式である。

ルーマニアへの危惧

翌日はマロシュ・バーシャールヘイ市へ行った。夜、暗くなってから亡命作家の両親をこっそり訪ねた。思いもかけない客に喜びながら、我われの渡した肉料理に、この老夫妻は目をまるくした。セーケイの村を出発する時、我われのおみやげへのお礼に、おばあさんが包んで持たせてくれた婚礼料理であった。亡命作家の両親は「食料品店には野菜の瓶詰しかない。菜食主義者にさせられた」と笑う。

夫人は、病気の夫がもう治療を受けていないと言った。若者は治療を受けられるが、老人は薬ももらえないし、入院していた老人たちは退院させられたそうだ。救急車を呼んでも、六十歳以上の病人と分かると救急車はこないという。国家にとって労働力となる若者の健康だけが重要なのだ。

おみやげの肉やヴィタミン剤より、夫妻が何より喜んだのは、ブダペストへ移住した孫が英語のコンクールで入賞した話だった。「あの子は本当に頭が良くて努力家だもの」と。

いつまでルーマニア国民はこんな状態に黙って耐え続けるのだろう。これはブダペストで繰り返し知人たちと話しあった疑問であった。

その夜、マロシュ・バーシャールヘイの牧師館も訪ねた。牧師は夫の旧友である。牧師夫妻は、ティミショアラにいる友人の牧師一家がきわめて危険な状態だと話した。牧師館を明け渡せという政府の命令に従わず、教会財産として牧師館を守り続けているが、最近この牧師の仲間が死体でみつかった。牧師への警告だという。

私の夫は、その頃、古文書にかかりきりで、こうした日々のニュースすべてに目を通せないでいた。夫がこの件についてよく知らないと分かって、牧師夫妻は話題を変えた。この牧師館にも監視の目と盗聴装置がしかけられている恐れがあった。

翌朝、我われがマロシュ・バーシャールヘイを発つ時、牧師館の前を散歩しているかのような牧師の姿があった。そして我われの車にちらりと手を振った。夫は「手なんか振っちゃいけない。警察に疑われると危ないのは君たちじゃないか」とつぶやきながら、急いで車を走らせた。

目のうえのこぶというべきティミショアラやマロシュ・バーシャールヘイのハンガリー人牧師たちを、チャウシェスク政権が一気に拘禁したり暗殺できないでいたのは、国際的な世論の目が、この牧師たちに注がれているからだった。ティミショアラ牧師館の話の意味を我われが本当に理解したのは、日本に帰ってまもなくである。牧師館を守るために集まった民衆にルーマニア警察が発砲し、この事件をひきがねにして倒れたのはチャウシェ

スク政権の方であった。
しかしチャウシェスク政権の崩壊は、ルーマニアにとって真の解決とは思えない。なぜ武器も持たないチャウシェスク夫妻を、たちまち銃殺しなければならなかったろう。ルーマニア自身のためにチャウシェスク政権の構造を明らかにし、チャウシェスク氏にも弁明の機会を与えるべきであった。法律にのっとり、時間をかけ、公正に独裁政権時代を究明するべきであった。
旧東ドイツの第一書記ホーネッカー氏の処遇が注目されているが、ソ連にしろドイツにしろ、ホーネッカー氏に人間の権利として、法の保護を与えることを大前提としている。チャウシェスク氏に行われたのは、これと正反対のことであった。独裁制も近代ヨーロッパ社会の概念と相反するものだったが、それを裁いたのも法の支配や人権というものがどこにも認められない方法であった。

未解決の民族問題

流血で始まったルーマニアの改革は、チャウシェスク氏という強いたががはずれたことによって、民族問題をときはなった。
今年一九九一年の春、夫は単身ハンガリーに出張し、あるドキュメンタリー・フィルム

をテレビで見た。チャウシェスク政権崩壊後、マロシュ・バーシャールヘイのあの牧師館前の大通りに、ハンガリー語による教育を求めてハンガリー系住民が集まった。彼らとルーマニア人群衆が対峙し、沈黙と討論の末、武器を手に、警官でも軍隊でもなく、民衆同士が互いに襲いかかったのだ。

今のところ、チャウシェスク政権の崩壊で我われが唯一ほっとしたことは、命の危険にさらされていた牧師たちが、国際世論で守られとおしたことだけである。

トランシルヴァニア・ハンガリー人の中には、危機的な状況によって、いよいよその良心をとぎすまされたような、みごとに高潔な人びともいる。ブダペストに亡命した知人たちの間では、言論の自由と物資の豊富さはうれしいが、本国のハンガリー人の道徳がトランシルヴァニアより高いわけではないと感じる気持ちが生まれている。

また、東欧改革の先駆者を自認するハンガリーだが、ある亡命者は、ルーマニアからハンガリーにきて「墜落する飛行機から沈みつつある船にとびうつったような気分だ」と言った。

ルーマニアからのハンガリー系亡命者にとって一番辛いのは、本国のハンガリー人にはトランシルヴァニアのことが分からないという悲しみである。チャウシェスク時代に、ブダペストのルーマニア大使館を、ろうそくを手にしたハンガリー学生が、民主化を訴えて

取り囲むというできごともあった。しかしこの静かで美しくもあり、平和的に見える示威行動が、トランシルヴァニア・ハンガリー人の生活を直接脅かしたことは明らかであった。本国のハンガリー人が示威的活動をするたびに、ルーマニア側は内政干渉であるとこれを非難し、ハンガリーはトランシルヴァニアへの領土的野心を復活させたのだと言って、ルーマニア人の民族的反感をあおった。ルーマニアはハンガリーへの出入国を厳しく制限し始め、トランシルヴァニア農民の行商も、一九八九年にぱったりやんだのである。

チャウシェスク政権の崩壊後も、民族問題という根本的なものは未解決のまま残された。亡命者たちはトランシルヴァニアが再びハンガリー領となることを望んでいるのではない。彼らは民族が混住するトランシルヴァニアなりのあるべき将来像を求めて、模索を続けているのだ。

一九〇六年にブダペストを訪れた一人のイギリス人がいる。シートン・ワトスンというこの青年は、コシュートの民族独立革命に感銘を受け、大のハンガリーびいきであった。彼はまずウィーンに行き、諸民族の言語が飛び交うこの帝都が、他の西欧都市とまったく違うことを興味深く眺めた。しかしオーストリア人はハプスブルク諸民族に対して理解がないと憤慨して、自らハンガリー語を習得し、ブダペストへおもむいたのである。しかしブダペストでシートン・ワトスンは、ハンガリー人のオーストリアに対する偏見の方がは

るかにはなはだしいと感じて茫然とした。ついでハンガリー王国各地を旅して、当時のハンガリー王国が進めていた「マジャール化」というものに直面したのだ。

これまで本書では、ハンガリー人という言葉を用いてきたが、話をはっきりさせるために、ここで一時的にマジャール人と表記することをお許し願いたい。

ハンガリー王国の国民のうち、マジャール人は半数に満たなかった。ユダヤ人やジプシーを別として、ルーマニア人、クロアティア人、セルビア人、スロヴァキア人、ルテニア人などを少数民族として抱えていた。ヨーロッパの真ん中にあって、マジャール人は自民族がヨーロッパに吸収され消滅してしまうことを恐れていた。そして、それまでは王国の中でばらばらな民族母語を使って暮らしていた少数民族を、中央集権化のもとで一気にマジャール人化しようと試みたのである。

中世にはラテン語、近世にはドイツ語を公用語としていたこの国は、一八六八年にマジャール語を国語とした。そしてスロヴァキア語やルーマニア語などの学校を次々に閉鎖し、これら少数民族の出版、言論活動に対しても厳しい検閲を行った。

支配民族の立場から民族分断へ

イギリス人シートン・ワトスンは、オーストリアに対しては自民族の独立と民族的権利

を要求するマジャール人が、自領内の少数民族には文化的根絶をめざしている矛盾をつき、「マジャール化」を厳しく批判した。こうして当時のマジャール支配層と大げんかを繰り広げる一方、シートン・ワトスンはハンガリー領内のスロヴァキア人やルーマニア人、南スラヴ人の窮状をイギリスや西欧に向けて訴える著作を次々に刊行した。

第一次世界大戦が始まると、シートン・ワトスンは本国イギリスでチェコの学者マサリクの亡命活動を助けた。シートン・ワトスンのもとには南スラヴの亡命者たちも集まった。マサリクはハプスブルク帝国で諸民族の平等と自治をめざす人として知られていた。しかし開戦とともに、マサリクは、ハプスブルク帝国に中欧諸民族の保護者となる力はないと判断して、ハプスブルク帝国解体と中央ヨーロッパの再編成をよびかけた。

大戦の結果、ハプスブルク帝国は崩壊し、マサリクの主張したチェコ人、スロヴァキア人、ポーランド人、南スラヴ人の独立は達成された。ルーマニアもトランシルヴァニアを得た。しかしハンガリーは領土の三分の二を失い、それまでとは逆に、国外に少数民族としてのハンガリー人がたくさんとり残されてしまったのである。

少数民族の多い地域がハンガリーから割譲されたため、現在のハンガリーは領土を失ったと同時に、少数民族問題も必然的にある程度整理された形である。支配民族として少数民族を圧迫していた立場から一転して、近隣諸国にとり残されたハンガリー人少数民族の

境遇を心配する立場になったのである。

今日のブダペストで、もし当時のハンガリー王国がシートン・ワトスンのような忠告に耳を傾けていたらという問題意識で書かれた論文を見つけた。ハンガリーは今、自己の痛みの中から、民族問題に対してかつてない視点でとりくむ可能性をもち始めている。これは東欧の民族問題を展望するうえで、かすかな光明となりうるだろうか。

シートン・ワトスンは、ハプスブルク崩壊後に生まれた新体制の中で、ユーゴスラヴィアやポーランド、ルーマニアが内部抗争にあけくれ、政情不安に揺れ続けることに絶望を感じた。西欧人であるシートン・ワトスンが目の当たりにし、当惑した東欧の諸問題の多くが、現在の東欧にも未解決のまま引き継がれている。

彼が唯一希望をみたのは、マサリクのもとで、チェコスロヴァキア共和国が議会制民主主義を発達させ、新国家として着実な歩みを続け、そこに暮らす少数民族の人間としての権利が守られていることであった。

16――東欧の哲人政治家マサリク

マサリクのバッジ

民主主義の英雄

一八五〇年にモラヴィアの町で一人の赤ん坊が生まれた。父はハプスブルク帝室領の御者で、文盲のスロヴァキア人農奴であった。母はドイツ語学校を出た教養のある婦人だった。彼女は姓からいえばチェコ人だがドイツ化しており、結婚するまでチェコ語は知らなかった。オーストリア高官のドイツ人家庭で女中をしていた彼女が、十歳年下の言葉も違う夫と結婚し、八ヵ月めに出産したことなど、この赤ん坊の出生は変わっていた。

赤ん坊は聖人トマス・アキナスにちなんでトマーシュと名づけられた。トマーシュは村の学校で優れた天分を示し、農奴の子に学問はいらないという父の反対にもかかわらず、

教師や母親の支援で初等教育を終えた。父は彼を鍛冶屋の徒弟奉公に出したが、トマーシュは紆余曲折を経ながらウィーン大学まで進み、やがてプラハの大学教授になった。のちのチェコスロヴァキア共和国初代大統領トマーシュ・マサリクである。

プラハでマサリクは、チェコ人の民族的な誇りとされていた古文書は偽作であると証明したり、キリスト教徒殺害の罪をきせられたユダヤ人の冤罪をはらしたりして、民族主義者や反ユダヤ主義者の攻撃にさらされた。マサリクはプラハ社会で孤立してしまい、種々の既存勢力から煙たがられたが、真実を曲げぬ人であるという評判も高まった。

ついで彼はオーストリア帝国議会議員に選出された。ハプスブルク帝国に反逆をたくらんだ罪状で南スラヴの青年たちが検挙されると、この事件を調査して議会に立ったマサリクは、反逆罪の証拠文書を捏造だとして、逆にオーストリア政府を告訴し、オーストリアは面目を失った。

現在のユーゴスラヴィアの都市ザグレブやベオグラード、リュブリァナには「マサリク通り」がある。南スラヴ人はマサリクを恩人として忘れないのだ。

しかしハンガリー人は七十年間、マサリクの名を嫌ってきた。ハンガリー王国からスロヴァキア地方を奪ったからだ。六十歳をこえた老学者マサリクが、第一次世界大戦中に西欧で亡命活動をくり広げ、ハプスブルク帝国解体の先鋒に立った。この大戦で、ロシア帝

国、ドイツ帝国、トルコ帝国、そしてハプスブルク帝国の四大帝国が崩壊した。
一千年間ハンガリー人支配下で暮らしてきたスロヴァキア人と、三百年間ドイツ人の支配を受けてきたチェコ人が共和国を作り、マサリクが繰り返し大統領に選ばれ続けて十七年間の「マサリク時代」を築いた。民主主義の英雄マサリクの名は世界じゅうに喧伝され、「大戦が生んだ最大の偉人」とか「哲人王」などと呼ばれた。チェコスロヴァキアにとっては誇らしい建国の父であった。
マサリクはハプスブルク帝国の解体を初めから主張したのではなく、逆に十一もの多民族をかかえるこの帝国が諸民族に自由と平等を与え、連邦を形成して力強い近代国家になることを目指していた。それこそが、ハプスブルクだけではなく多民族世界のヨーロッパ全体が進むべき道だと考えていた。ある民族が他の民族を支配したり、あるいは他民族に隷属させられてはならないということは、小民族出身のマサリクにとって明らかである。
しかし、民族の権利が守られることが最終の目標ではない。小民族はそれぞれ自立したうえで助け合わなければ存在していけない。こうしてマサリクは、民族の自治と平等を主張しながらも、ヨーロッパ全体が共同の連邦へ向かうことを期待した。小民族、小国に限らず大国といえども戦争を手段とした過去を克服し、国際法と相互協力による新しい秩序を確立するべきだと、マサリクは時代を展望した。ECの生みの親であるクーデンホーフ・

カレルギーはマサリクの信奉者であった。マサリクの理念などあたりまえだと思われるかもしれないが、マサリクの時代に、これは決してあたりまえの考えではなかった。

二十世紀初頭のヨーロッパでは、西欧列強が拮抗していた。ドイツはプロイセンを中心にドイツ民族の統一をなし遂げ、新しく帝国主義列強の仲間いりを果たしていた。東からは帝政ロシアがバルカン進出をめざし、バルカンやハプスブルク領内のスラヴ諸民族に影響を及ぼしていた。ハプスブルク帝国はその王朝的な華やかさと威信にもかかわらず、列強のはざまにあって、どこへ向かうかに煩悶していたのである。

オーストリアのドイツ人には自国の国力を強化しようとする動きと、プロイセン・ドイツに惹かれる動きがあった。マサリクはプロイセン主導のドイツ帝国に、強烈なドイツ民族至上主義と優越感をみて、その危険を西欧にむけて警告し続けた。彼のドイツ思想潮流への危惧は、その後の歴史で実証されたといえるだろう。

またスラブ人には、ロシア皇帝がドイツ人やハンガリー人から自分たちを解放してくれるという期待があった。第一次世界大戦が始まると、ハプスブルク帝国内のスラヴ人たちは、なぜドイツ人の勝利にむけて、兄弟スラヴのロシアやセルビア人と戦わなければならぬのかと、戦闘意欲がわかなかった。マサリクは、ロシアと戦う意志のないチェコ人兵士が、前線でロシア側へ投降するための手筈を整えた。この投降兵たちが、やがてマサリク指揮

のもとでチェコ軍団に組織される。マサリクはシベリアで立ち往生したチェコ軍団の救援を求めて、一九一八年に日本へきた。これが第一次世界大戦の日本によるシベリア出兵につながっていく。

マサリクの予言

マサリクはロシア文化を深く愛したが、帝政ロシアのツァーリズムと、ロシア文化が西欧に優越すると考える民族主義的なロシア・スラヴ派を厳しく批判した。一九一三年に刊行した大著『ロシアとヨーロッパ』(邦訳『ロシア思想史』みすず書房)で、やがてロシアに革命が起こり、帝政は崩壊すると予言した。つまりチェコ人の大半が帝政ロシアに期待していた時に、マサリクは、チェコ人やスロヴァキア人の未来はロシア皇帝の臣下となることでもなく、大国の庇護に頼ることでもなく、民主主義をめざすことだと信じて、大衆的基盤のない孤独な独立運動を少数の仲間と続けていたのだ。

一九一七年、ロシア二月革命の第一報にマサリクは喜び、欧米に向けて民主的ロシアの出現を言明して、革命への支持を訴えた。戦前にマサリクはロシア研究に没頭し、帝政ロシアの中から必ず民主主義をめざし西欧とも協調する勢力が台頭してくると確信していた。しかもロシア二月革命が、西欧の民主主義諸革命のように激しい流血をともなわず達成さ

れたことを賞賛してやまなかったのである。
しかしロシア革命がボルシェヴィキ革命に進展すると、これは新たなツァーリズムであり独裁であると鋭く批判した。そしてボルシェヴィズムも過渡期の様相であり、これを乗り越えて真に民主的なロシアが生まれるのだと言い続けた。ソ連とレーニンにとってマサリクは思想上の強敵であった。
またマサリクは、若き日にいち早くマルクス研究に取り組み、その唯物史観や階級闘争論に賛成せず、労働問題の解決をあらゆる人間解放の一環として漸進的に実現しようとした。実際に彼が大統領となったチェコスロヴァキア共和国は、反ボリシェヴィズムの防波堤として西欧諸国に支持されたのである。
チェコスロヴァキアの人びとが社会主義とソ連衛星国時代を経た現在、ソ連にどんな感情を抱くのか、残念ながら私にはまだ分からない。しかしマサリクが、帝政ロシアは倒れ、ボルシェヴィズムもいずれはロシアの民主化への移行の中で終わりを告げると予言したことを、現在のソ連の動きを見ながら改めて考えさせられるのである。彼のドイツ帝国主義への認識やマルクス批判も含めて、東欧に思想の力ひとつで歴史を見通していた人物がいたことを思わずにはいられない。
東欧の小民族を西欧型の市民社会と議会制民主主義へと導こうとしたマサリクの理念は、

現在のチェコスロヴァキアの改革とハヴェル大統領にも受け継がれている。

民族平等の理念

もう一度マサリクの生い立ちをみてみよう。彼はスロヴァキア人の父とチェコ人の母を持つ新生チェコスロヴァキア統合の象徴とみなされていた。しかし母は、当時の民族統計からすればドイツ人とみなされて当然だった。父にはハンガリー人の親族がいた。また父がもし、このスロヴァキアの農奴ではなく、母の奉公先のドイツ人高官だとしたら、マサリクはチェコ人ともスロヴァキア人ともいえなくなるではないか。まさにハプスブルク諸民族の縮図というべき境遇を持つマサリクは、民族の誇りとは血によってうちたてられるべきものではなく、その民族が自立し、どれほど優れた文化的貢献をなすかによるべきだと考えた。

彼はまた、農奴だった父の中に、人間としての権利を剥奪され、自らの意志を持たぬ屈従の姿を痛感した。西欧で農奴が解放されて近代社会へと向かう時期に、東欧では逆に再版農奴制といわれる過程が進み、十九世紀まで農奴制が強力に存在し続けたのである。

独立を達成した共和国にはチェコ人、ドイツ人、スロヴァキア人、ハンガリー人、ルテニア人などが含まれた。平等な諸民族の共同体という構想を、マサリクはこの新生複合民

族国家で実現しようとしたのである。チェコスロヴァキア国民は民族権と公民権を持った。つまりマサリクは国内諸民族に生来の民族的権利を保障すると同時に、農奴に象徴されたハプスブルク時代の臣民意識にかわる、市民社会と民主主義の担い手となる新しい国民性を創造しようと考えたのである。

マサリクの中に、西欧を理想化しすぎるきらいがないとはいわないし、マサリク時代の欠陥はむろんあった。だがマサリク時代のチェコスロヴァキアで、それまでのハプスブルクやハンガリーのマジャール化政策などとは根本的に異なる、少数民族の保護や民主主義の理念があったことは否定できないのである。

抹殺と再評価

しかし当時のハンガリーはマサリクを理解せず、領土を奪った敵とみなした。マサリクの死の翌年、チェコスロヴァキアのズデーテン地方のドイツ人は、ナチス・ドイツと組んでこの国を解体し始め、ここから第二次世界大戦に拡大していった。ハンガリーもヒトラーと組んで、スロヴァキア南部のハンガリー人地域の奪還を果たした。

さらにスロヴァキア人が独立した。一千年を隔てて兄弟スラヴのチェコ人と合流したスロヴァキア人は、チェコ人が新たな支配民族となったことを非難し、マサリクの死後、同

じ国家に留まることを拒否したのだ。もともとスロヴァキア人の中でマサリクの独立運動に共鳴したのは一握りの知識人で、多くの素朴なスロヴァキア農民はふって湧いたような共和国にとまどいを感じていた。確かに教育水準の高いチェコ人は、知識人層を欠いたスロヴァキアで、良くも悪くも教師として振る舞い、スロヴァキア人の反感をかきたてた。

こうしてスロヴァキアはハンガリー人地域をハンガリーに割譲し、スロヴァキア人地域そのものが独立国となったのである。しかしナチスに後押しされた独立スロヴァキアは、じきにナチス・ドイツの保護国に転落した。

マサリクの後継者ベネシュはナチスの手を逃れて西欧に亡命し、亡命政権を作った。ベネシュはまたソ連と友好条約を結んだ。崩壊したチェコスロヴァキアを解放したのはソ連軍であった。スロヴァキア人は自力でナチスを打破し、チェコスロヴァキアに復帰した。

祖国に戻ったベネシュ大統領は、戦争協力者としてドイツ系住民とハンガリー系住民の国外追放に着手した。二百万といわれたドイツ系住民は八分の一に減少した。ハンガリー系住民の追放は完遂されないうちに、チェコスロヴァキア社会主義政権が樹立され、社会主義のもとでハンガリー人七十万が少数民族としての権利を保障されてスロヴァキアに留まったが、スロヴァキアを再び失って、ハンガリー本国の民族的禍根は残された。

チェコスロヴァキア社会主義政権は、当然のことながらマサリクの存在を建国の歴史の

中から抹殺してしまった。しかし、マサリクの理念が反体制派の中に生き続けていたことは、プラハの春でマサリクの著書がたちまち復刊されたことにも現れていた。

しかも今日のハンガリー知識人の一部が、一九八八年にブダペストでシンポジウムを開き、初めて民主主義者としてのマサリクを評価した。マサリク時代に、本国から分断されたスロヴァキアのハンガリー人に母語による教育が与えられ、民族的権利も保護されたことを強調したのだが、マサリク時代と違って当時のチェコスロヴァキア社会主義政権が、このハンガリー少数民族からハンガリー語教育を削減し、スロヴァキアのハンガリー文化を滅ぼそうとしているという危機感がこのシンポジウムにはみなぎっていた。シンポジウムに招待されたチェコスロヴァキア側の席はからっぽであった。ハンガリー側主催者は「東欧改革に背をむけるチェコスロヴァキアの状況を考慮しましょう」と述べた。改革の先頭をゆくハンガリーに、チェコスロヴァキアのフサーク政権は警戒を強める一方だったが、それがこのシンポジウムにもはっきり表れていたのである。

またハンガリーの新聞は、ハンガリーが真に民主的な国となったら、スロヴァキアのハンガリー地域をハンガリーに返還するとマサリクが発言したことをとりあげた。

我われは、改革のきざしがみえないチェコスロヴァキアへ二度、おもにスロヴァキアのハンガリー人地域に旅をした。

17――スロヴァキアのハンガリー人

スロヴァキアのハンガリー人小学校

マサリク時代はよかった

我われはスロヴァキア南部のガランタ市に行った。

スロヴァキア南部にはハンガリー人が五十万から七十万人いる。ガランタはハンガリー人の都市であったが、現在は市内がすべてスロヴァキア語表記になっている。昔は、南スロヴァキアがハンガリー人地域で、北スロヴァキアがスロヴァキア人地域であった。今では、国策によりハンガリー人地域にスロヴァキア人が流入し、その比率は増大するいっぽうである。

我われの案内役プッカイ氏は、高校の先生をしているハンガリー系住民だ。家庭では妻

子とハンガリー語で生活する。子供たちはスロヴァキア語もハンガリー語も同じようにできるし、プッカイ氏と妻も、子供たちほど流暢ではないが、むろんスロヴァキア語が話せる。第二次世界大戦後には、ハンガリー語をはばかる時期があった。今はそんな気がねはいらない。

プッカイ氏は家を建てているが、資材が不足して困ると言った。ハンガリー人がスロヴァキアへ大量に安い建築資材を買いにくる。チェコスロヴァキア政府は建築資材と子供用品、衣料などの国外持ち出しを規制してしまったが、その標的はもっぱらハンガリー人だということであった。一九八〇年代の終わりに、改革の進むハンガリーはインフレに襲われた。一方社会主義の堅持を掲げるチェコスロヴァキアの物価は統制されたまま、インフレがしのびよっていたとはいえ、まだかなり安かったのだ。プッカイ氏は家を建てるために時間をとられ、まかせられる部分は専門家にゆだねたいのに、請け負ってもらえないと嘆いた。何から何まで自分でやり、みんな疲れきっていると。

これは、ハンガリーにもあてはまる状況であった。しかもインフレのせいで、両国とも建築を途中で断念する人が多くなった。

プッカイ氏は歴史を教えている。チェコスロヴァキアの建国の功績はマサリクにあったと彼は堂々と言うものだから、異端者扱いされていた。しかし歴史家として真実を曲げる

気持ちはないと胸をはる。実はプッカイ氏は大学の教師であった。大学改革案を提言して当局ににらまれ、高校に左遷されたのだ。

四十歳のプッカイ氏自身は、マサリク時代を直接は知らない。プッカイ氏から数人のお年寄りを紹介された。七十歳ほどのこのスロヴァキア・ハンガリー人たちは、マサリク時代を覚えていた。

一人のおばあさんは農民だが、ヒトラーとハンガリーがチェコスロヴァキアを分解したおかげで、ベネシュ時代にスロヴァキア・ハンガリー人はひどい目にあったと言った。ガランタのハンガリー人にも、二十キロまで荷物を持って二週間以内に国外退去せよと命令が出され、この命令が完遂される前に、ベネシュは政権を共産党に譲ったのである。社会主義政権下では、少数民族としてのハンガリー人が一応保護され、「ベネシュ時代よりいいよ。それでもね、今のスロヴァキア政府よりかマサリク時代はハンガリー系住民にもっと自由と権利があったのよ。マサリクは好かれていたねえ」とおばあさんが言った。

プッカイ氏は、別なおばあさんからハンガリー語で書かれたマサリクの伝記を借りてくれた。第一次世界大戦後にスロヴァキア・ハンガリー人にむけてチェコスロヴァキア国民としての自覚をはぐくむために、ハンガリー語で書かれた子供向けの本である。おばあさんはこれを大切にとっておいたのだ。こうした本は何種類かある。

第一次大戦後のハンガリー本国は敗戦で疲弊していたが、スロヴァキア・ハンガリー人の中には、新生チェコスロヴァキアの民主主義にひかれ、新国家の国民となる熱意を抱く人も少なくなかったそうだ。

三番目に紹介された御老人は、スロヴァキア政府の財務顧問を務めたこともあるハンガリー系知識人であった。彼はマサリク時代にスロヴァキア・ハンガリー人の間で生活協同組合を再組織した。

「マサリク時代は確かに民主的でした。我われは共和国のもとで、ハンガリー時代からの協同組合を建て直しました。この組合は経済だけでなく文化、厚生活動も行ったのです。活動は軌道に乗り、スロヴァキア人も仲間に加わりました。我われはうまくやっていたのですよ」

この協同組合は、十九世紀末のハンガリー王国に始まった。

しかしナチス時代に再びハンガリー領となったスロヴァキア南部へ、ブダペストからかつての協同組合中央組織の幹部がやってきた時、スロヴァキア・ハンガリー人の意識と本国のハンガリー人の意識は噛み合わなかった。ブダペストからきた幹部は中央の指示をスロヴァキア南部に命じたが、スロヴァキア・ハンガリーの組合員は、自分たちの組合は自立した民主的な組織であると言い、中央の命令に従うことを拒否したのである。

プッカイ氏をはじめ現在のスロヴァキア・ハンガリー人たちは、テレビなどを通じて本国ハンガリーの改革をみつめ、本国の改革が明確な理念や手段を欠いているのではないかと懸念している。そして改革に背をむけ続けたチェコスロヴァキアが、ハンガリー改革への報復として、スロヴァキア・ハンガリー人の諸権利をいっそう削減することを何より恐れていた。実際に、スロヴァキアの大学入学定員に占めるハンガリー系学生の数が削減されるという情報が流れた。あくまでハンガリー語を母語としハンガリー人としての民族意識を持ちつつも、彼らはチェコスロヴァキアで暮らさざるをえない。だからマサリク時代のような理念で自分たちは生きたいというのが、プッカイ氏の立場であった。

チェコ化へのおそれ

我が家はガランタの隣村に住む知人ユトカの家に泊まった。ユトカは村のハンガリー語小学校の教師をする未亡人である。上の息子は徴兵でチェコ地方に派遣されている。

スロヴァキア政府は、混血が進めばスロヴァキア・ハンガリー人というものはなくなると考えたのだと、彼女は言う。しかし旧支配階級であるハンガリー系住民と農民が多いスロヴァキア人は、ほとんど結婚することがなかったそうだ。むしろハンガリー系住民は教育水準の高いチェコ人と共鳴する部分が多く、これがさらにスロヴァキア人の民族意識を

とがらせた。
「最近は国策で、スロヴァキアのハンガリー青年が徴兵されるともっぱらチェコ地方に送られるの。私の息子も、チェコでお嫁さんをもらわないとも限らないわ。そういう例が増えてきているのよ。しかも生まれた子供はチェコに同化して、ハンガリー的でなくなっていく」とユトカは訴えた。
マサリク時代には、ハンガリー語で大学教育を受けられた。だが小学校の子供たちはハンガリー語で初等教育を受けても、現在はハンガリー語の高等教育機関が次々縮小されているから、将来は真っ暗だと、この婦人は悲観していた。下の息子は下宿して遠い町のハンガリー語による技術専門学校へ通うが、スロヴァキア語で暮らす時間の方が長くなったそうだ。
こんな思いに悩む彼女は、ハンガリーの子のようにハンガリー語を話す我が家のタカシに驚喜した。「僕にはブダペストの幼稚園にね、六人もお嫁さんがいるの」と自慢するタカシに、ユトカは目を細める。
ブダペストの幼稚園では保母さんが、子供たちで世話をしあうように好きな子同士を組ませてくれたが、タカシにも「お嫁さん」がたくさん集まったのである。初めは陰気で静かだった日本の子が、本来のわんぱくぶりを発揮し、ハンガリーの男の子もたじろぐほど

いたずらもするようになって、たちまち女の子の人気を獲得したのだ。息子の幼稚園では、民族音楽や詩の暗唱など、幼い時からハンガリー文化を積極的に子供に伝授する。

こうして育ったタカシを、ユトカは「私の息子」と呼び、自分の教える小学校にタカシを連れていった。「ブダペストなまりのハンガリー語をぺらぺら話す日本の子がきた」と、子供たちは大歓迎してくれ、遠足にも連れていってくれた。こうして息子は、素晴らしい思い出と友達をたくさん獲得したのである。

少数民族の安定と調和

スロヴァキアのハンガリー人の間で、彼らを本国から分断した張本人であるはずのマサリクが好感を持たれていることに驚いた。本国では、改革派知識人がマサリクの理念に関心を深めているとはいえ、一般庶民はいまだにマサリクの名を耳にするだけで眉をひそめる状態である。

トランシルヴァニアのハンガリー人にも同じことが言えるが、本国と分断されたハンガリー人たちは、祖先からの土地で孤立しても、そこに築かれた自分たちの伝統文化を守ろうとする意志と、その土地を離れたくないという気持ちが強い。少数者として、異民族である隣人と共存できる理念を求めているのである。しかもスロヴァキア・ハンガリー人に

は、マサリク時代に、ハンガリー人としての民族的権利とチェコスロヴァキア国民としての権利や意識が調和していたというのだ。
ある国が、そこに留まるだけの理想と意義を提示すれば、少数民族にも安定と調和が生まれるということを、私はここで知らされたのであった。しかし、せっかくのこの道しるべが、現在のチェコスロヴァキアでは生かされていないらしい。スロヴァキア・ハンガリー人にみなぎる自己証明の崩壊に対する危機感は、我われにも重苦しく伝わってきた。
確かに改革前のチェコスロヴァキアは、息のつまるような感じがあった。各地で我われは、執拗な闇ドル交換の誘いに悩まされ続けた。ホテルもさんざん断られたが、知人がドルを心づけに渡せば泊めてくれると忠告してくれた。そのとおりであった。またホテルでは、正規の料金をチェコスロヴァキア通貨で払おうとしてもドルを要求され、しかもそれをフロント係は自分のポケットにしまいこんだ。両替機関やホテルの窓口におけるドルの着服など、ハンガリーではまったく経験しなかったことである。チェコスロヴァキアには何より精神の改革が必要ではないかと、我われは暗い気持ちを抱いた。
マサリクの生地を訪ねると、マサリクと聞いただけで足早に去る人もいた。しかしマサリクの通った学校や、墓地を案内してくれた人がいたし、民宿の主人であるチェコ人からは、マサリクの伝記を贈られた。現在の改革で、プラハのめぬき通りにはマサリクの像が

よみがえったという。チェコ人がナチスや社会主義政権から守りとおした像である。

もしチェコスロヴァキアがマサリク時代のように国境を開き、外国との交流を奨励するなら、スロヴァキア・ハンガリー人の問題もかなりの部分が解決できるはずである。従来どおりに初等教育はスロヴァキアで保証したうえで、優秀な若者はハンガリーの大学で教育を受ければいいし、ハンガリー領に残されたスロヴァキア人にもこれと逆の機会を与えればいい。

スロヴァキア・ハンガリー人にとってスロヴァキア南部は故郷である。そこで人間としての権利が守られれば、そもそも故郷を捨てるいわれはない。国境など何度修正してみても、東欧の民族問題は決して解決しないのである。むしろ国と国との交流を盛んにし、少数民族であるがゆえの不利益を減らすことによって、隣人と共に繁栄することができるのではないだろうか。

ハヴェル大統領は、マサリクのように「スロヴァキア人とチェコ人のあいのこ」という神話を持たないだけに、その立場にはいっそうの困難が予想される。しかし私は、ハヴェル大統領が、社会主義時代の弊害を他人のしわざとして裁くのではなく、この時代を生きた一人ひとりの良心と姿勢の問題としてみつめようと呼びかけたことを高く評価する。ハヴェル氏自身が反体制派として長い下積みの孤独な生活を送っただけに、彼の言葉には重

みと真実がある。東欧の改革の中で今のところ、ハヴェル氏の姿勢だけは正真正銘の価値ある改革だと、私には思えるのである。

二人の博士

ブダペストには、マサリク時代のスロヴァキアに生を受けた二人の知人がいる。

一人は、すでに登場した歴史学の大家ニーデルハウゼル博士である。博士はブラチスラヴァ生まれだ。当時のブラチスラヴァではドイツ語、ハンガリー語、チェコ語、スロヴァキア語を耳にして育った。マサリク時代にブラチスラヴァは町の表示も公式にチェコ語、ハンガリー語、ドイツ語で表記されていた。博士はさらにラテン語やスラヴ諸語を習得し、中央ヨーロッパとスラヴ民族全体の歴史に造詣が深い。ベネシュ時代に追放されたハンガリー系住民としてブダペストに移住したが、今でもマサリク時代のチェコスロヴァキアは現在のハンガリーより民主的な国であったと語る。民族混住地域出身ならではの優れた語学力と視野が、博士の基盤となっている。

多民族地域というのは確かに困難な問題を生じやすい。しかしこの博士のように、たくさんの民族の言語や文化と生まれながらに接し、豊かな視野をもって人類に貢献する人材を生む可能性が、そこには秘められてもいるのだ。

現在のブラチスラヴァを訪れる人は、街の様子に目をみはるに違いない。王国時代からの城と古い街並みに対峙して、近代的だがかなりずさんな高層建築群がそびえている。遅れたスロヴァキアという印象を嫌うスロヴァキア政府は、スロヴァキア地方全体の工業化と近代化を積極的に推進したが、それが今のところ裏目に出てしまった。なぜなら公害対策も不十分な工業化が地域を汚染し、社会主義圏にしか通用しない水準の、武器製造をはじめとする重厚長大型の産業を抱えこんでしまったからだ。

そして、発端の責任はチェコ人にもあったとはいえ、スロヴァキア人の民族意識は、この豊かな民族混住地域の文化をスロヴァキア色一色にしようとして、ハンガリー系住民やチェコ人との協調を狭める方向で働いてきたようである。

もう一人の知人はスーケ博士という。彼はチェコスロヴァキア国民となる理想に燃えてチェコ語を熱心に学び、学校の視察に訪れたマサリク大統領の前で詩を朗読した思い出を持つ。スーケ博士はまた、南スロヴァキアの生活協同組合に青春をかけた。ベネシュ時代に故郷を離れざるをえなかったが、マサリク時代のチェコスロヴァキアはスーケ博士の真の故国である。スーケ博士のような立場の人は、本国ハンガリーに移住してから、新たな理念を生きる支えとしてみつけなければならなかった。

スーケ博士の「鳥の歌」の研究は世界的に有名である。スーケ博士は鳥の声を録音し、

それをさまざまな速度で再生した結果、鳥の声には人間の音楽と同じ音階があることを発見した。スーケ博士の研究は日本でも昭和四十年代にテレビで放映されたそうだ。スーケ博士に日本語の表彰状を見せてもらった。

スーケ博士は鳥の歌の研究を通して、また蒐集した各地の民謡の類似性を通して、人間が細分化してとらえているこの世界には、まだ人間が気づいていない共通の何かが存在するのではないかと考えている。分化と対立概念で世界をとらえるのではなく、生命の共通項を求めて博士は研究を続けている。

民族紛争や戦争に直面せざるをえなかった世代の中から、このように優れた逸材が生まれ出たのである。彼らの中に民族問題への示唆をみることはできないであろうか。また民族分断を味わった本国のハンガリー人や、ルーマニアとスロヴァキアに少数民族となったハンガリー系住民の中から、東欧全体を啓発するような優れた民族への視点が生まれはしないだろうか。

私はそれを、楽観的ではないにしろ、期待しようと思う。

18――ガビおじさんの農場

ガビおじさんとイロンカおばさん

ペストの楽しみ

今まで紹介した東欧の人びとは、どんな印象を読者に与えたであろうか。話が随分と錯綜しているが、東欧の複雑さと、とりわけその魅力を描ききれなかったのではないかと心配である。

また、ブダのことばかり書いてペストの紹介はおろそかになってしまったが、ペストの散策こそ実はハンガリー最大の楽しみであった。ただしこの楽しみは自ら探しだし、自分で見つけることによってのみ味わえるたぐいのものである。

例えばペストのヴィダーム・パルク遊園地へ行ってみれば、新しい設備よりも古いメリ

ーゴーランドに心ひかれる。王国時代の子供たちが楽しんだこのメリーゴーランドは、今では塗装が剝げてボロボロである。しかし目をこらして見れば、そこに良きヨーロッパの夢が浮かびあがるはずだ。また木で組んだジェット・コースターに乗ってごらんなさい。現代のスリル満点な電気じかけではなく、傾斜の自然な高低を利用した素朴なものだが、それだけにその巧妙なできばえに驚かされるのである。二十世紀前半のハンガリーの子供たちが、世界一素敵な遊園地を持っていたことがひしひしと伝わってくる。

そしてペストの街路で建物の扉が開いていたら、内側に凝らされたステンド・グラス、壁や柱の彫刻などを味わってごらんなさい。よくもハンガリー人は装飾に熱をあげたものである。裏通りではたくさんの古い建築が、修理してもらう日を待っている。中にはとても復元しきれないのではないかと思われるほど複雑で華麗な装飾もある。ハンガリー人自身、国家赤字を乗り越えて修復を続けられるかどうかを心配している。たとえ修復が首尾よく続行されるとしても、現在の半ば朽ちた歴史の幻を味わうこと自体が、得がたい楽しみである。

ある日こうした散歩をぶらぶらしていると、アンドラーシュ通りの角の建物から出てきた婦人が、三階に行ってごらんなさいと言う。この建物は前世紀末に新興の大金持ちが建てた自宅で、オペラ座の内装を手がけた画家たちによって壁画が描かれている。現在は三

階を郵便博物館にしてあるが、みごとな内装はもとより、部屋から部屋へ管を通し、書類をつめたカプセルを真空状態の原理を応用して運ぶ装置まである。ここにも、ハンガリーの発明狂が活躍したのだ。

ウィーンに住むリーゼ夫人の兄は、最近ユーゴスラヴィアのベオグラードへ行き、祖先の宮廷家具師が手がけた屋敷をみつけた。ハプスブルク時代に現在の国境を越えてひとつづきの文化圏があったことを改めて実感したという。ブダペストのこの郵便博物館も、もしかしたら家具をリーゼ夫人の先祖が手がけたのかもしれない。室内の感じがウィーンの夫人の家にそっくりである。

リーゼ夫人はエステル一家のその後を知って、マサコに「私のチェロはどうなったのかしら……いいえ、もう私のチェロではないのだわ。すべての物は、自らのふさわしい場所をみつけるのだと信じることにしましょう」と言ったそうだ。我われはマサコがこの件でどんな肩身の狭い思いをするかと心配だったが、マサコとリーゼ夫人の友情は損なわれなかった。リーゼ夫人とマサコの人柄のたまものである。

郵便博物館長のイリンケ女史とはのちに面識を得たのだが、彼女はこうした歴史的建物の保存をハンガリーの企業などに働きかけている。つまりお金のあるところからそれを有効にひきだし、ハンガリー全体の文化のために生かしているのだ。確かにハンガリーにも、

あるところにはお金がある。郵便博物館ばかりでなく、ハンガリーの大平原にある昔の農村を保存した有名な野外農事公園も、イリンケの指導力で作られたものである。
　イリンケは反体制派の友人が拘留された時にマリカと出会った。マリカは署名を集めて西側や国連に人権保護を訴えようとし、イリンケは一刻も早く友人を留置場からだす方法を考えた。イリンケはマリカのやり方はいつも犠牲をかえりみないと感じている。一番大切なのは社会によって個人がおしつぶされないこと、そして現実的な解決を探しだすことだと信じるイリンケは、その後マリカと共に活動することはなかった。
　ハンガリーのさまざまな社会問題の運動で、そしてトランシルヴァニア問題やスロヴァキア問題への活動でもイリンケの名を耳にする。彼女は最も具体的な解決を探しだし、人の能力をその適性に応じてひきだすことで有名だ。みごとなハンガリー人である。

その後のマリカ

　マリカの子供たちのうち、美術学校へ通う長女は家を出て独立した。独立したことで、彼女はかえってマリカを大切に思うことができるようになった。美術学校では前衛芸術に取り組んでいたのだが、いつも舞台の女優のようにこってりお化粧していた。私にはそれが、素顔で人前に出ることのできない内気さの裏返しに思われてならなかった。彼女は試

行錯誤をくり返しながら、ついに自分の適性をみきわめたようである。子供の絵本の挿絵で受賞し、当分は生活の心配をしなくていいほどの賞金を獲得した。将来、日本の子供たちが彼女の絵本を手にする日がくるかもしれない。

我われが最後に会った時のマリカは、トランシルヴァニアから亡命した女友達のエニキュー一家にかかりきりであった。エニキューはガンを患っていた。チェルノヴイリの放射能雨はルーマニアを直撃し、今後もガンの発生率が高まるのではないかと心配されている。

二人の幼子を持つエニキューは医者であった。エニキューはさまざまなガンの治療方法を探し求め、日本の治療に注目した。それは薬物や物理的方法にたよらぬ自然治癒をめざすものであった。我が家も日本に治療機関を探したり、知人たちにエニキューの日本渡航を支援してくれるよう手紙を出した。エニキューの旧友である日本のハンガリー研究者から、いつでも日本に迎えるという心のこもった返事がきた。しかしエニキューはその時をまたず、マリカの家で息をひきとった。死のまぎわまでマリカが不眠不休の看病にあたった。

このマリカの姿を見て、マリカの子供たちは、母をいたわるようになっていった。マリカという強烈な個性の中の優しい無私の心に触れ、マリカの真価にめざめたのである。

口ではとろけるような母の愛情を語りながら、実際には子供たちを犠牲にしているエス

テルとマリカを比べて、我われもマリカの子供たちを心配するのをやめた。きっとマリカの子供たちは、マリカや夫ペーテルのように、社会に奉仕する人間として成長するに違いない。

ただひとつ、マリカはやっぱり無茶なマリカだと私が思ったのは、エニキューの子供たちをカトリック教会に引き連れていくことである。エニキューは敬虔なプロテスタントであった。

エニキューの告別式は、マリカの通うカトリック教会で行われた。列席者のうち、トランシルヴァニア系プロテスタントの人はエニキューの両親も含めて、カトリックの式典や聖歌に唱和できず、黙然としていた。しかし式の終わりにマリカが、トランシルヴァニアのプロテスタント牧師から送られたエニキューへの別れの言葉をカセット・テープで流しますと言った。カトリックの神父たちは静かに退席した。

そして告別式は、カセットの賛美歌に唱和するプロテスタントの人びとの歌声で静かに終わった。マリカの心づかいはすばらしいと思ったが、プロテスタントの牧師の言葉をカトリックの神父さんたちも一緒に聞いたなら、どんなに良かったろうと、私には思われてならなかったのである。

エニキューを墓地に埋葬する時は、プロテスタントの賛美歌が歌われた。そこまではプ

ロテスタントに譲歩したが、以降、マリカは他人の援助をいっさい断り、エニキューの子供たちを自分の子供と同じに育てている。

ガビおじさんの豊かな農場

この東欧の回想の終わりに、我われは農業都市ケチケメートの郊外にあるガビおじさんの農場を訪ねよう。

ガビおじさんとイロンカおばさんは六十歳を越えて持病のリューマチに悩んでいるが、元気なハンガリーの農民である。二人には子供がなくて寂しい。元気者のタカシを気にいってくれて、タカシが養子にくるなら農場も豚も、何もかもあげるんだがなあと冗談まじりにつぶやく。

確かにガビおじさんは財産家である。村人の中にはあんな金持ちになるなんて何か不正なことでもしたのさと陰口をたたく人もいるが、ガビおじさんとイロンカおばさんは神を恐れる敬虔なカトリックであり、悪を憎む正直者である。

おじさんは広い農地を持っている。近所の農家から、甲斐性のない息子は農業をいやがるから買ってくれないかと持ち込まれた農地や、組合から借りた土地で農地を拡大してきた。ガビおじさんにとって、農地をそまつにするなどもってのほかである。ほったらかし

の公有地も見捨てておけない。
ガビおじさんの父もイロンカおばさんの父も、自分の力で荒地を開墾して農場主となったのに、社会主義政権はこの汗の結晶を接収してしまった。ガビおじさんとイロンカおばさんは、また新しく一から始めて自力で農地を獲得してきたのだ。集団化で多くの農民が痛めつけられ、計画農業は農民の知恵を台無しにしてしまった。ハンガリーのスターリンともいうべきラーコシ政権時代に、ハンガリー農民は南国のレモンまで自給自足で作れと命令されたという。
その後、私有地が認められるようになると、農民は公営農場の作業はあとまわしにして、自分の土地ばかり世話をするようになった。公有地と私有地は見ただけですぐ分かる。公有地は草ぼうぼうである。
ハンガリー王国は優れた農業国であった。この豊かな農業を衰退させたゆえに、社会主義を憎む農民も多い。いやハンガリー人全体が農業の衰退を悲しんでいる。ハンガリーが作る工業製品は、コメコン諸国にしか売れない代物だが、ハンガリーの農作物は西側にも喜んで買ってもらえる。しかも無理な工業化までして、外国に借金を抱えてしまった。
若者は農業に背をむけ、都市に流れこむ一方だったが、最近は一攫千金を狙って、農業を始める青年も現れた。例えばガチョウの飼育は、フォアグラや羽毛など、成功すれば大

もうけになるかもしれない。でもガビおじさんは、これがとても心配だ。一種類の作物や家畜だけ育てて、失敗したらどうするんだ。天候は神様が決めるものだ。凶作や病害やあらゆることに対処できなければ、本当の農民じゃないぞと、おじさんは信じている。

ガビおじさんは伝統的なハンガリー農民の知恵を身につけた、数少ない生き残りだ。おじさんの農場では、多種類の作物を育て、天候が不順でも全滅しないように考えてある。どんな野菜や果物が育てるのに相性がいいか、いろんなことを知っている。

ただ困るのは人手の問題だ。子供がないので特にこたえる。しかし近所の人や親類が、農繁期には日雇いでやってくる。陰口をたたく人でも、カビおじさんの農場に雇われて家計を潤している。年金生活の農民なども手伝いにくる。ガビおじさんの農場があることで救われている隣近所も多いのだ。

食べて、働き、食べる

タカシは農場でイロンカおばさんと鶏の卵集めをする。豚にえさをやる。果物をつませてもらう。鶏とホロホロ鳥の小屋でタカシがきれいな羽根をみつける。クジャクの羽根だ。なんと、鶏小屋の屋根には、みごとなクジャクのジュリカが住んでいるのだ。ジュリカは鶏たちをみおろし、王者のように屋根で胸をはる。肉も卵もとれないクジャクだが、ガビ

おじさんの自慢である。
羊のお産の時期には、タカシは牧童のヤンチおじさんと草地に出かけ、生まれた羊の赤ん坊をよいしょよいしょと抱きながら羊小屋に運ぶ。次々に羊の子が生まれる。赤ん坊の面倒をみない母羊がいると、牧童のヤンチおじさんはガビおじさんと夜もろくに寝ないで赤ん坊羊にミルクを飲ませ、世話をする。
タカシは馬にも乗せてもらう。毛並みの光った足の短い働き者の馬である。こうした家畜たちも、ガビおじさんとイロンカおばさんが少しずつ自分の力で増やしてきたのだ。
トラックがやってきて、降りた人がガビおじさんと話している。子羊たちをイタリアに売る商談だ。「かわいそうじゃないか、子羊はイタリアへ行ってどうするの」「クリスマスと謝肉祭のごちそうになるんだよ」
タカシは驚いて口もきけない。子羊の肉は柔らかく、とても良い値で売れるのだ。タカシはひどすぎると思いながらも、イロンカおばさんが作ってくれるハンガリーのごちそうをパクパク食べる時には、そんなことも忘れてしまう。
ガビおじさんとイロンカおばさんは、朝五時すぎに目がさめてしまう。身支度をして近所の人を待つ。農繁期には六時に農家の人が五、六人も手伝いにくる。ピーマンの王様みたいなパプリカとパン、それにサロンナで朝食を食べる。サロンナとは豚の脂の塩漬けで、

これも農場の豚をつぶしてイロンカおばさんが作ったものだ。強い焼酎をグラスであおって、みんな畑へ行く。それから六時間、みんながんばって働く。昼食にイロンカおばさんがすごいごちそうを用意してくれるのを楽しみに。

羊の煮込みをイロンカおばさんはかまどにかける。この羊はイタリアへ行く子羊の親兄弟、親類だった。市場に売れない恰好悪い野菜をイロンカおばさんはとってきて、鍋にほうりこむ。昼食ができると、タカシはひとっ走り畑へ行って、みんなを呼んでおいでと言われる。

手を洗い、食卓につく。晴天の日は戸外のテーブルで食べる。食卓のワインもガビおじさんの自家製だ。百年前の道具でぶどうをしぼって作った、コンクールで優勝するほど良いワインだ。食器を並べるのもタカシは手伝う。ガビ農場に住みこむ使用人のヤンチおじさんとイムレじいのお皿はアルマイトだ。イロンカおばさんの考えでは、陶器の食器はぜいたく品で使用人むけではないからだ。普段はガビおじさんとイロンカおばさんもアルマイトの食器を使っている。

牧童のヤンチおじさんにはみんな「ヤンチおじさん」とちゃんと言うのに、イムレにだけは「イムレじい」と変な呼び方をする。イムレじいは少し知恵が足りない。帽子にクジャクの羽をつけて、いつもわけの分からないことをつぶやいている。イムレじいはガビお

じさんの父の代から働いていた。社会に出たらあまり幸せになれそうもないが、この農場にいればガビおじさんとイロンカおばさんが守ってくれる。毎月、給料をガビおじさんが積み立てておいてくれる。ガビおじさんが働けなくなって農場をやめても、イムレじいにはちゃんと年金がたまっているのだ。イロンカおばさんは有名な料理上手で、結婚できなかったイムレじいも温かい家庭料理を味わい、身の回りの世話もしてもらい、なんにも不自由がない。イムレじいは豚の糞をワラに混ぜて肥料を作る。人気のない仕事だけれどイムレじいは懸命にやる。ハエがぶんぶんたかっても、気にせずやる。

昼食のあとはみんな昼寝をする。昔ながらのしきたりだ。昼寝を終えて畑に戻ると、三時にはイロンカおばさんが甘いお茶をやかんに下げてやってくる。一つのコップをまわしながら、みんなで飲む。こうして夕方まで働くと、みんな帽子をぬいでガビおじさんと挨拶し、それぞれ家へ帰っていく。働き者のエルジーおばさんには、イロンカおばさんが時々羊肉のかたまりなんかを包んで持たせる。エルジーおばさんのところには子供がいるし、夫のバンディおじさんはお酒が好きであまり働かないそうだ。

村の名士

ガビおじさんとイロンカおばさんは、しばしば親戚や知人を昼食に招く。それが村の名

士というものなのだ。イロンカおばさんはいつもの羊料理のほか、鶏のスープとケーキを準備する。毎朝イロンカおばさんが卵をとりにいく時、鶏たちは平気でえさを食べつづけるのに、鶏スープを作ると決めた日は、イロンカおばさんが鶏小屋へ向かうだけで鶏たちは半狂乱でわめきたてる。動物の勘はすごい。一羽が選ばれ、他の鶏は平常心をとりもどす。イロンカおばさんはスープにいれるヌードルも自分で作る。どんな一級レストランでも味わえないおいしさのヌードルだ。客用食器を四十人分もおばさんは持っている。食卓の席順、親類の上下はきっちり守られる。それでこそ名士というものだ。

食事が終わると、イロンカおばさんは脂がついた食器をまず少しの湯で洗い、その湯を犬用のバケツに入れる。肉料理の味がするその湯に残り物を丁寧に入れ、パンのみみを浸して犬に食べさせる。犬はたくさんいて数がはっきりしない。次におばさんはガビおじさんの古シャツのきれはしで食器をどんどん洗って乾かす。使用済みの紙ナプキンもタバコの包み紙もかまどの焚きつけにとっておいて、無駄というものがない。

食べ物の残りは大きな冷凍庫にしまう。いつか味をつけ直し、他のお客をもてなすのに使うのだ。今の若い者が神様からいただいた物をそまつにするのはどうしてなのか、おばさんには分からない。

日曜日は神様の決めた安息日だ。おじさんとおばさんは教会に行って、午後は休む。ま

たおばさんはトラックで作物を市場に運ぶ。仲買や卸にまかせると、農民は損してばかりいる。だから市場に台を置いて自分で売るのだが、市場でケチケメートの顔なじみとおしゃべりする楽しみもある。

ケチケメート市内には、おじさんとおばさんの「町の家」もある。昔からハンガリー大平原の豊かな農民は町に一軒家を構え、別に農作業用の家を畑に持つのがきまりだった。最近はこんな農民も少なくなった。イロンカおばさんとガビおじさんは引退したら市内の家に住むつもりだが、いつになったら引退できるか分からない。隣近所から頼りにされているし、何より土が好きでたまらないから畑を離れられない。

ケチケメート市にはおばさんが通った女学校と、おじさんの通った実業学校がある。二人とも立派な教育を受けた。両親が賢い人で、農民にも学問は必要だと知っていたからだ。

誇り

イロンカおばさんは、赤ん坊の時に父を亡くした。ガビのお父さんは偉い人だったとイロンカおばさんは思う。手に職をつけておけと言って、ガビには運転免許と肉屋の免許をとらせた。また第一次世界大戦が始まると、ハンガリーはひどいめにあうぞと戦争に反対していた。第二次世界大戦では、ナチスなんかと組んだらハンガリーはもう終わりだと反

対していた。
ナチス・ドイツもひどかったが、そのあとにきたソ連の解放軍もひどかった。ガビの家はすっかりソ連軍に略奪された。フランスの画家が描いたというガビの曾祖父の肖像画もソ連軍に没収された。「立派なハンガリー農民」という題の絵だったが、今はソ連の美術館にあるそうだ。どうせ返してはくれないだろう。
先祖から残してもらったのは、農民の知恵と教育だけだ。でもそのおかげで、二人は結ばれた。ケチケメートの青年団で、二人とも社会奉仕や生活改善運動のリーダーだった。そこで意気投合したのだ。
ガビおじさんは第二次世界大戦に行った。出征の前に婚約を交わした。終戦の時、おじさんはオランダの収容所にいたが、食べ物もあり、何も困らなかった。なのにガビおじさんは、一刻も早く祖国に帰ろうと収容所を脱走し、ハンガリーに向かって歩いていたところをソ連軍にみつかって収容所に送られた。三年間、食べ物もないひどい所でハンガリー人は働かされ、次々と仲間が死んでいった。この抑留について、ハンガリーに帰国しても語ってはいけないと誓約書をとられた。ハンガリーに戻ってきた時、ガビおじさんは骨と皮にやせこけていた。子供ができなかったのはこの抑留生活のためかもしれない。
帰ったガビおじさんを待ちうけていたのは、ハンガリー社会主義政権による集団化だっ

た。富農の子としてガビおじさんは冷遇され、トラックの運転手をして暮らした。この小さな農場でイロンカおばさんが農業を続けていた。でもガビおじさんの中の農民の血は農業を忘れなかった。少しずつ世の中が変わり、ガビおじさんは運転手をやめて、農業にいそしんだ。ついに優秀農家として農業大臣がガビ一家を表彰した。壁にはその時の写真がかかっている。

でも、そんなことどうでもいいねえ、農業大臣だって人間じゃないか、本当に大切なのは神様と両親の教えだけだとガビおじさんもイロンカおばさんも思っている。

イロンカおばさんは読書家で、新聞も小説も読み、たくさんのことを知っている。旅行も好きだ。団体旅行でソ連やチェコスロヴァキア、西ドイツやトルコへも行った。ガビおじさんはソ連旅行の誘いを頑として断った。忘れられない国だからだ。しかし最近、ソ連からきた農業視察団が、ハンガリー優良農家としてガビ農場を訪問した。ガビおじさんとイロンカおばさんは最高のもてなしをした。それがハンガリー農民の誇りというものだ。

我が家は夫のハンガリー農業経済史研究で、このガビおじさんと知り合いになった。勉強のためとはいえ、タカシも夫もたちまち農場に夢中になり、農作業を手伝いながらガビおじさん夫婦の話を聞かせてもらった。幾度もこの農場で過ごした。

ある時は、隣の農家からパイプをくわえた粋な紳士がやってきた。なんと紳士は「ハウ

ドゥーユゥードゥー」と我われに英語で挨拶し、わしはハンガリーのシャーロック・ホームズだと言ってパイプをふかす。イロンカおばさんが、このカルチおじさんは長いことカナダで過ごし、英語ができると紹介してくれた。カルチは農村にいても都会の暮らしを忘れず、いつもツィードの上着を着てきどっている。あとでイロンカおばさんが、カルチは戦後に収容所を脱走し、トルコ経由でカナダへ渡ったのだと教えてくれた。ハンガリー人はトルコになんの親しみも感じないけれど、トルコ人はハンガリー人をアジアの仲間とみなし、何かと親切にしてくれたそうだ。

カナダで何をしていたかは知らないが、歳をとってカルチは祖国に戻ってきた。貯金もなくカバンひとつで帰ったところを見ると、どうも口で言うほどむこうで良い暮らしをしていたわけではなさそうだ。今は甥の農場に住んでいる。甥は農業をやる気がなくて、農場を西側観光客に民宿として宣伝しているが、まだお客はついていない。失敗するのじゃないだろうかとイロンカおばさんは心配する。現在のハンガリーでは、人びとが成功しようといろんなアイデアで勝負する。失敗、倒産、夜逃げの話も多い。

独立農民の魂

近所まわりをするから一緒においでとガビおじさんに誘われる。ガビおじさんの車、ソ

連製の大型高級車ヴォルガに乗り込む。イロンカおばさんも一緒だ。着いた先は農家らしいが、庭に車がいっぱいある。ベンツも二台ある。実はこの農家の息子が、西側から部品を持ってきては組み立てたベンツである。外車をそっくりハンガリーに持ち込むとたっぷり税金がかかるから、バラバラにして何回にも分けて運びこむのだ。

イロンカおばさんは「こんなこととして法律にそむくのじゃないかね」と小声で言う。夫が「部品に分けて運んでも法律には触れませんよ」と説明する。だけどイロンカおばさんは「やっぱり農民の仕事は農業じゃないかい」と納得できない顔をする。

次に村の学校へ寄る。ここにはトランシルヴァニアから亡命した知識人の夫婦が、教師として住み込んでいる。イロンカおばさんとガビおじさんは、何か困ったことはないかと尋ねる。周りの人にいつも手をさしのべる二人だが、とりわけトランシルヴァニア問題には心を痛めている。何かあったら相談においでと、この学校をあとにした。

ガビおじさんの農場には、初めイムレじいとシャニおじさんが住み込みで働いていた。シャニの給金もガビおじさんが貯金していた。現金を持つとシャニはお酒を飲んで使ってしまうからだ。

そのうちシャニの姿を見かけなくなった。「シャニおじさんはどうしたの」「あいつは親戚から遺産が入ってな、人が変わってしまったんじゃ。昼から酒を飲むようになり、他の

イムレやヤンチをろくでなし、甲斐性なしとののしって喧嘩するようになった。あんまりひどいからやめさせた」とガビおじさんは言う。シャニは独身だったが、昔ジプシーの女の子と知り合って、どこかに子供がいるらしいとは聞いていた。シャニは親としての責任を果たしたことがなかった。その子は成長して美しい娘となり、都会で看護婦をしているそうだと、イロンカおばさんが言う。

牧童のヤンチおじさんは新参者だ。ガビおじさんとイロンカおばさんにとって、働き者のヤンチがきてくれて大助かりだ。ヤンチはドイツ系の妻と離婚し、慰謝料が払えなくなって監獄に入っていた。前科があるから雇ってもらえないでいるところを、ガビおじさんが見つけた。イロンカおばさんはドイツの女とハンガリーの男が結婚すると、たいていうまくいかない、その逆はうまくいくようだと教えてくれる。

ヤンチは都会より農場が性にあうと言ってここに満足している。それでも今までの使用人は自分の部屋が欲しいなどと言わなかったが、都会からきたヤンチは台所の二段ベッドで寝るのがいやだというので、ガビおじさんが生まれて初めて使用人の部屋を作ってやった。時代は変わったものだと思いながら。

かつてハンガリーの農家には、住み込みの農奴のような使用人がいた。チェレードという。チェレードは日本の小作人のように貧しく権利もなかったが、まじめに働けば独立し

て土地を持つ農民に出世できた。私の夫はガビおじさんの農場でチェレードがまだいたのか、と驚いた。

私自身はアルマイトの食器や二段ベッドなどを見て使用人の待遇に眉をひそめたが、つきあっているうちに、ガビおじさんとシャニを比べて、ハンガリーの独立自営農民の魂と、一生チェレードに甘んじる人の姿勢にはおのずと差があることを知った。ガビおじさんを批判する気持ちはなくなった。独立自営農民には、主人としての権利だけでなく義務を果たす責任感が備わっているからだ。

働き者の牧童ヤンチをガビおじさんは対等な仲間として信頼するようになっている。ヤンチが独立を望むなら、ガビおじさんは喜んで力をかすだろう。昔ながらの農民にはこんな良識が備わっているのだ。現在のガビ農場に近所の農民も助けられている。むしろハンガリーの社会主義政権下で、独立心と農業知識を身につけた新しい農民が生まれたのかどうか、とても心配になる。

現在の改革で、ガビおじさんのもとには、復活した独立小農業者党から誘いがきた。おじさんは青年時代に党員だった。しかしガビおじさんは、党の幹部に迎えるという話を断った。昔は政治に熱をあげたが、もう政治なんかわしは信じない、農民は農業をしっかり守るんだ、とガビおじさんは断言する。自分の食べる分を、おばさんと一緒に守りぬいてい

くそうだ。

復活独立小農業者党の政治アピールを読んで、私もおじさんの選択は正しいような気がした。アピールは冒頭で国外に分断されたハンガリー人の本国帰還を応援し、また他国にいるハンガリー少数民族の文化的向上を援助するとうたっている。それほどに民族が分断されたハンガリー人の悲壮感は強いわけだが、スロヴァキアやトランシルヴァニアにいるハンガリー人の気持ちは既に述べた。しかも現実に今のハンガリーには、国外にこうした援助をするだけの財源があるとも思えない。民族意識を真っ先に掲げるからには、東欧諸国全体の友好に貢献するような視野の広さと、注意深く緻密な理念が必要であろう。

ハンガリーの農村にも、こんなに複雑な人生模様があることに驚かされた。

私の綴った東欧の回想は、びっくり箱をあけてしまったような話ばかりかもしれない。外国人にとって、あらゆる異国での生活が驚きの連続には違いない。しかしとりわけ今日のめまぐるしい東欧世界は特製特大のびっくり箱ではないだろうか。ふたをあけたら次々に飛び出すできごとに、ほっと息つくひまもない。どうなることかと、覗き込むのはやめられない。笑ったり怒ったりしながらも、東欧の人間の生きる強さがみえてくる。

息子のタカシが大人になるころ東欧はどんな状態になっているのだろう。

タカシにとって幼い時に東欧に友達がたくさんでき、いたるところでかわいがってもらえたのは得がたい宝である。いつか私のこの回想をタカシが読めるようになった頃、タカシが改めて自分で東欧を考え、友達をみつけに行くことを願っている。また、もしかして読者の中から、東欧を自分の目で確かめにいこうという勇者が現れるのではないかと、密かに、そして心から願っている。

今世紀の二つの世界大戦をみても、さらに現在の東欧改革をみても、東欧が世界に及ぼす影響力の大きさを痛感する。それにもかかわらず、日本のソ連・東欧研究の層はまだ十分に厚いとはいえない。日本に熱い思いを抱く東欧の人びとをふりかえりながら、本書が日本と東欧を近づけるひとつのきっかけとなることを願って筆をおこう。

ハンガリー狂騒曲――東欧改革の光と影

一九九一年一〇月二〇日第一刷発行

著者――家田裕子

発行者――野間佐和子　発行者――株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目一二‐二一　郵便番号一一二‐〇一

電話（編集部）〇三‐五三九五‐三五二二　（販売部）〇三‐五三九五‐三六二六　（製作部）〇三‐五三九五‐三六一五

装幀者――杉浦康平＋赤崎正一

印刷所――凸版印刷株式会社　製本所――株式会社大進堂

ISBN4-06-149072-9　Printed in Japan　（定価はカバーに表示してあります）

「講談社現代新書」の刊行にあたって

教養は万人が身をもって養い創造すべきものであって、一部の専門家の占有物として、ただ一方的に人々の手もとに配布され伝達されうるものではありません。

しかし、不幸にしてわが国の現状では、教養の重要な養いとなるべき書物は、ほとんど講壇からの天下りや単なる解説に終始し、知識技術を真剣に希求する青少年・学生・一般民衆の根本的な疑問や興味は、けっして十分に答えられ、解きほぐされ、手引きされることがありません。万人の内奥から発した真正の教養への芽ばえが、こうして放置され、むなしく滅びさる運命にゆだねられているのです。

このことは、中・高校だけで教育をおわる人々の成長をはばんでいるだけでなく、大学に進んだり、インテリと目されたりする人々の精神力の健康さえもむしばみ、わが国の文化の実質をまことに脆弱なものにしています。単なる博識以上の根強い思索力・判断力、および確かな技術にささえられた教養を必要とする日本の将来にとって、これは真剣に憂慮されなければならない事態であるといわなければなりません。

わたしたちの「講談社現代新書」は、この事態の克服を意図して計画されたものです。これによってわたしたちは、講壇からの天下りでもなく、単なる解説書でもない、もっぱら万人の魂に生ずる初発的かつ根本的な問題をとらえ、掘り起こし、手引きし、しかも最新の知識への展望を万人に確立させる書物を、新しく世の中に送り出したいと念願しています。

わたしたちは、創業以来民衆を対象とする啓蒙の仕事に専心してきた講談社にとって、これこそもっともふさわしい課題であり、伝統ある出版社としての義務でもあると考えているのです。

一九六四年四月

野間省一

現代新書既刊より——本書と同時期の東欧全域に吹き荒れた変革の嵐、
激動の過程を跡づけ、未来を展望した同時代ドキュメントが
南塚信吾＋宮島直機編『'89東欧改革』。ぜひ併読を。
さらに激動のソ連、その病根と復活の可能性を生々しい体験から語るのが、
S・ブラギンスキー＋V・シュヴィドコー『ソ連経済の歴史的転換はなるか』。
また、**森本良男『ソビエトとロシア』**は、極端な二面的性向ゆえに、
「謎の謎」とまで評されたロシア人の理解しがたい心性をさぐる。
本書の歴史的背景として大きな位置をしめるヨーロッパの名門王朝、
その盛衰と役割を考察したのは、**江村洋『ハプスブルク家』**である。
ロート美恵『生と死のウィーン』は、ブダペストとならぶ
中欧の古くて新しい都市のエロティックな魅力を大胆に描きだす。
何をなしてきたかを知ることで、何をなすべきかを探る手がかりとしたい。

ISBN4-06-149072-9 C0230 ¥650E(0)
定価＝650円(本体631円)

ハンガリー狂騒曲──目次より

●いえだ・ゆうこ
一九五四年、札幌市に生まれる。
早稲田大学文学部(心理学科)卒業。
同大学院文学研究科史学科修士課程終了。
同研究科博士課程終了。
一九八七～八九年、夫・息子とハンガリーに滞在。
訳書に『チェコスロヴァキア民族小史』―恒文社より近刊、
共訳書に、R・オーキー『東欧近代史』―勁草書房―がある。